

第5節 円筒埴輪

1 円筒埴輪の出土状況

調査年次を追ってグリッド別の円筒埴輪出土重量を表にして掲げる。埴輪出土重量の総合計は1,309.58 kgであった。残存率が高く、完形品の推定重量が算出可能なB2類円筒埴輪の14.0 kgに換算して93本余り、C1類朝顔形円筒埴輪の20.0 kgに換算して65本あまりとなる。主要な埴輪の出土状況については、遺構説明のところで記述しておいた。

なお、実測図または拓影図を掲載した資料の個別データは観察表に掲げておく。

9年度				10年度				11年度						
調査区	出土位置	グリッド	重量(kg)	調査区	出土位置	グリッド	重量(kg)							
1	外堀	B-6、C-6~8 D-6・7、E-6	15.84	1	①	G-15	3.96	2	一括 表採 その他	I・J-23~27	5.76 13.6 32.94 52.3			
	内堀	E-8	76.26		②	H-15	0.9		計					
	中堤	D-8、E-7	7.04		③	H-16	3.24							
	その他	E-5(一括含む)	1.8		計		8.1							
	計		100.94		④	H-18	2.48	3		N・O-23・24 P-23・24・25 Q-25・26・27	23.26			
2	外堀	B-12・13、C-12	64.16	⑤	H-19	0.6	4		墳丘 内堀 表採	K・L-15・16 M-14・15 M-14・15	96.86 10.03 2.64 109.53 10.34			
	内堀	E・F-12	150.55	⑥	G-20	0.32						計		
	中堤	D-12	3.24	計		3.4								
	墳丘	G・H・I-12	13.27	⑨	H-21	2.1						5	O・P・Q-22	
	計		231.22	⑩	I-21	9.02		6				F-24~26、G-26	3.29	
3	外堀	B・C-15	3.26	3-①	⑪	I-22	0.29	7	M-25、26	1.62				
	内堀	E-15	0.28		⑫	J-20	1.1	8	I-5~9	5.16				
	中堤	D-15	0.74		⑬	J-21	12.12	9	A・B-19、C-19・20 D-19・20、E-20	6.7				
	その他	A-15	0.58		⑭	J-22	0.46				11年度調査計	394.14kg		
	計		4.86		⑮	K-21	2.32				内堀西側	中堤	28.93	
4	外堀	J-6	31.13		⑯	L-21	5.14	11年度調査計	内堀表採 内堀一括 内堀C地区	N-16 O-15~19、21・22	20.08 13.63 8.28			
	内堀	J-8	8.89		⑰	M-21	5.1					一括 耕作土		9.36 10.61
	中堤	J-7	1.8		⑱	N-21	0.48							
	墳丘	J-9~11	11.1		⑲	M-20	1.18	9、10、11年以外の調査	調査年	出土位置	重量(kg)			
	その他	J-4・5	0.72		⑳	L-20	1.56					平成3年	西側中堤表採	17.83
グリッド外	K-7	0.15	㉑		L-19	2.67	平成4年					表採	8.79	
計		53.79	㉒		L-18	0.4	平成7年	造出し(表採) 前方部表採	6.12 11.78					
①	K-10	5.34	SD1		F-21	5				平成14年	試掘1区 試掘2区 試掘3区 試掘4区	6.72 0.02 1.26 0.72		
②	L-10	2.13	SD2		F・G-21	10.41							平成15年	内堀内墳堀
③	M-11	0.19	SD3		H・I・J・K-21	4.07	計	60.22kg						
④	L-11	9.4	計			63.42	総合計	1309.58kg						
⑤	M-12	5.12	⑦	F-21	0.8									
⑥	L-12	4.34	⑧	G-21	3									
⑦	M-13	57.81	計		3.8									
⑧	L-13	15.92	10年度調査計		78.72kg									
⑨	M-14	67.68	表採		66.46									
⑩	L-14	3.24	くびれ部一括		10.52									
⑪	M-15	4.98	10年度計		155.70kg									
⑫	L-15	15.93												
⑬	K-15	16.96												
⑭	J-15	0.45												
計		209.49												
9年度調査計		600.3kg	1	外堀	A・B-25・26 C・D-24・25	143.95	総合計	1309.58kg						
表土含有分		8.33		内堀	D・E-23	37.99								
9年度合計		608.63kg		計		181.94								

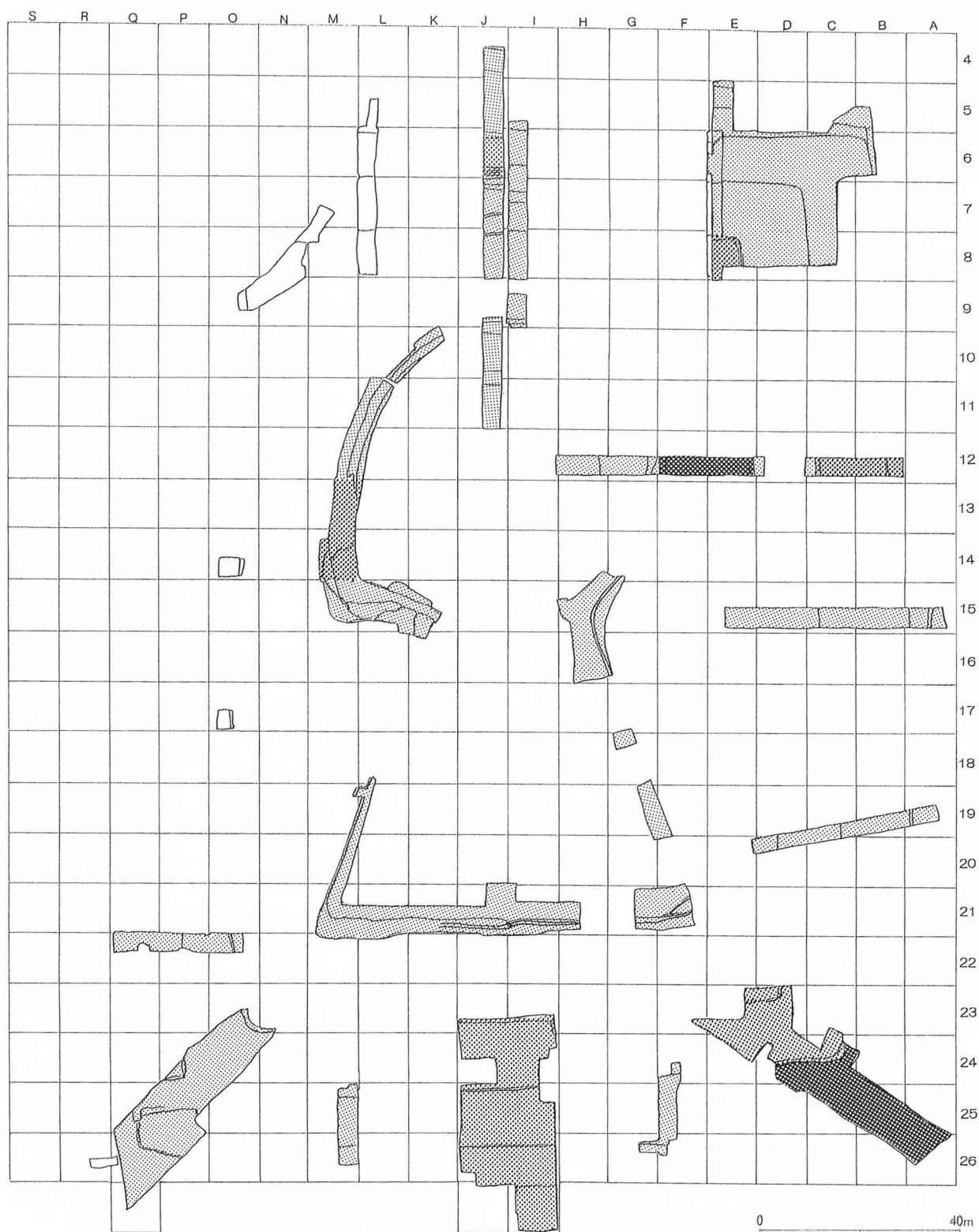
第2表 稲荷山古墳調査区別出土埴輪重量表

2 円筒埴輪の分類

円筒埴輪の特徴を記述するに当たって、事前に分類を行う必要があるので、最初に分類基準を掲げ、次に分類結果に基づいてすべての類型についての説明を行いたい。

(1) 円筒埴輪の分類基準 (第40～42図)

稲荷山古墳から出土した円筒埴輪は極めて多種多様である。一古墳に樹立された円筒埴輪には斉一性があるという一般的な事実からは大きく乖離するものであって、円筒埴輪の法量、段数、焼成具合、色調、凸帯や透孔の形状など多くの点で、互いに異なった個体が存在している。しかし、これらは単体として独立するのではなく、いくつかのグループとして存在するので、統一的な分類基



凡例  0~30kg  30~50kg  50~80kg  140~160kg

※ 基本はグリッド毎であるが、11年度調査区は一括重量

第39図 稲荷山古墳出土埴輪重量図

準を設けた上で、まず的確な分類作業を行う必要がある。その分類基準の各要目を下記に掲げる。

(ア) 法量

口縁部径・胴部径・底部径

(イ) 器形

器壁の立ち上がり方や乾燥単位をチェックし、第40図に示した器形分類に従って分類を行う。また、口縁部についてはその形状をチェックし、微外反・外反・端部外傾など(第41図)に分類する。さらに朝顔形円筒埴輪にあっては口縁部凸帯貼り付け位置での段の有無についてチェックする。

(ウ) 段構成

完形品は少ないので段構成が確定するものはほとんどないが、各部位の状況を総合して段構成の推定を行う。手順としては分類が進んだ段階で、その残存部の全体における部位を一点ずつ吟味しながら最終的に判断する。また、昭和48年度の第2次調査で出土した資料も参考とする。

(エ) 凸帯位置

凸帯の貼られる位置の相互関係をチェックする。各段が均等となる場合のほか、第1段が第2段以上より長い場合があり、その時は何倍長になるかを計測して表示する。また、口縁部が他の段に比して長い場合もそのことを記す。

(オ) 凸帯形状

断面形によって第42図のとおり分類し、該当するものを記号で記す。

(カ) 器肉

器肉の厚薄を記す。

(キ) 外面調整

1次調整タテハケ・ナナメハケの別を記す。2次調整のヨコハケを伴う場合はこれを別記する。

(ク) 内面調整

ハケ調整及びナデ調整を記す。また接合痕を残すものは特記する。

(ケ) 透孔

透孔の形状と穿孔されるのが第何段目なのかを記す。口縁部を伴い底部を伴わないものについては上から何段目なのかを注記する。

(コ) 彩色

彩色を伴うものについてその顔料の色を記す。

(サ) ヘラ記号

ヘラ記号を伴うものについて、その記される部位と形状を記す。

(シ) 焼成・色調

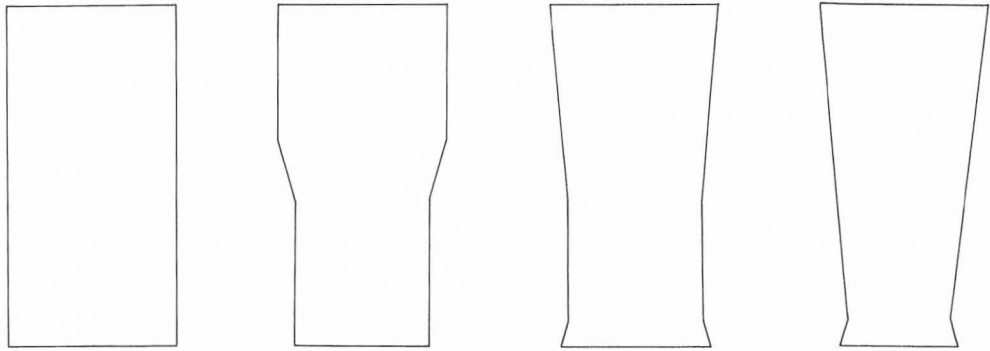
焼成の程度を極硬質・硬質・普通・軟質に分けて記す。還元を認めるものは注記する。また、色調を記す。

(ス) 胎土

含有する鉱物の種類、砂粒の大きさと含有の程度を記す。

(セ) 分類

最終的に判断される分類を記号で記す。



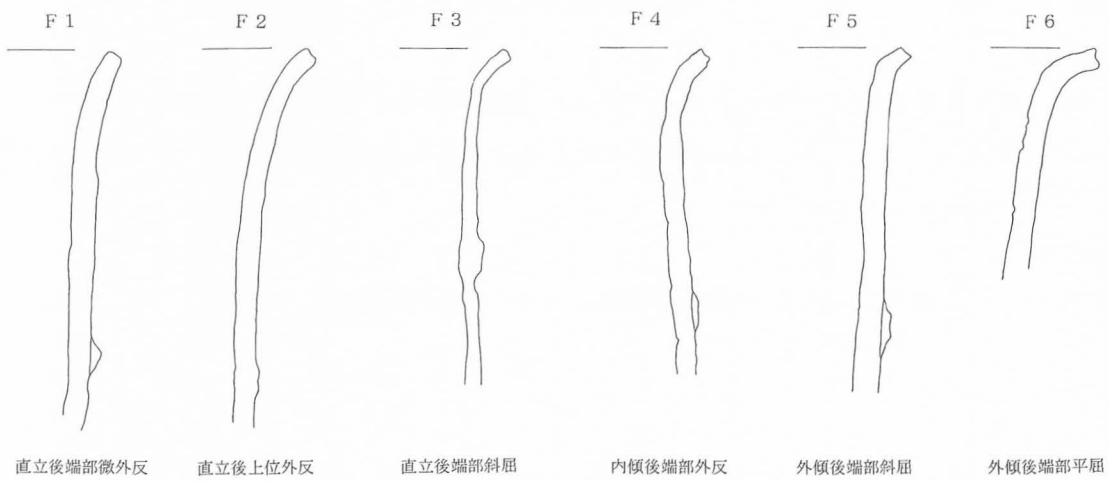
第I器形

第II器形

第III器形

第IV器形

第40图 円筒埴輪形態分類図



直立後端部微外反

直立後上位外反

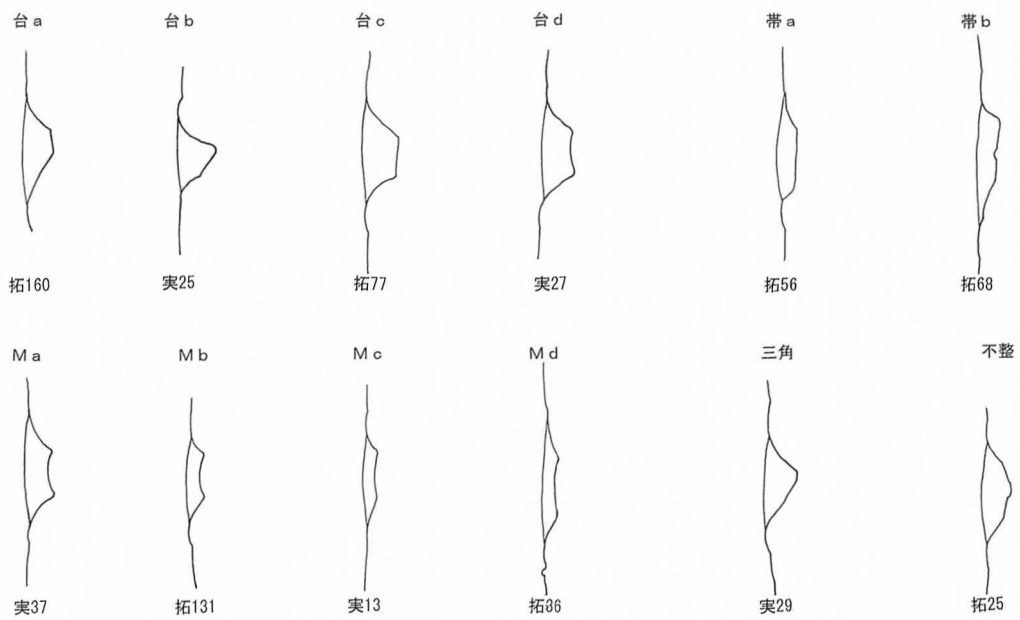
直立後端部斜屈

内傾後端部外反

外傾後端部斜屈

外傾後端部平屈

第41图 円筒埴輪口縁部形態分類模式図



第42图 円筒埴輪凸帯分類模式図

番号	法量	器形	段構成	凸帯位置	凸帯形状	器肉	外面調整	内面調整	透孔	彩色	ヘラ記号	焼成	色調	胎土	
50	口39	直立・口縁端部外反	推6段	均等	台	厚手	タテハケ	ヨコハケ+ユビナデ	半円（上3段）	赤色	上から2段目に×	硬質	灰白色	細砂少量	A 3
39	口42	直立・口縁微外反	推6段	口1.4倍長	台・三	普通	タテハケ	ヨコハケ+ユビナデ	半円（上3段）	赤色	上から2段目に×	軟質	乳白色	細砂やや多い	A 3
1	胴34	直立	推6段	均等	台・三	厚手	タテハケ	ヨコハケ+ユビナデ	半円			軟質	淡灰褐色	細砂やや多い	A 3
30	胴30	凸帯下くぼむ	推4段		台		タテハケ	ナナメハケ	半円	赤色		軟質	淡黄白	細砂少量	A 4
31	底（25）	小外傾	推4段	1段1.8倍長	台b		タテハケ	ヨコハケ+ユビナデ	半円2・3段			硬質	淡褐色	細砂少量	A 4
35	底30胴31	小外傾	推6段	1段1.3倍長	台a・b		タテハケ	ナナメハケ+ユビナデ	半円2・4段			良好	黄白色	細砂少量	A 3
33	口38	口縁微外反・端部凹線	推4段		台b	普通	タテハケ	ヨコハケ+ユビナデ		赤色		普通	黄褐色	細砂少量	A 4
36	口36	直立・口縁微外反			三		タテハケ	ヨコハケ+ユビナデ		赤色		良好	黄白色	細砂やや多い	A 4
37	口46胴39	直立・口縁微外反	推6段	均等	台・三	厚手	タテハケ	ナナメハケ+ユビナデ	半円（上3段）	赤色		硬質	淡黄灰白色	粗砂やや多い	A 2
47	胴35	直立	推6段		台b		タテハケ	ナナメハケ+ユビナデ		赤色		軟質	淡オリーブ灰色	粗砂やや多い	A 3
48	口46.5	直立・口縁微外反	推6～7段			厚手	タテハケ	ナナメハケ				軟質	乳白色	粗砂やや多い	A 1 or 2
40	胴41	直立	推6～7段		台・三		タテハケ	ナナメハケ+ユビナデ	半円	赤色	透孔の上の段に×	軟質	乳白色	細砂少量	A 1 or 2
41	胴41	直立	推6～7段		台	普通	タテハケ	ナナメハケ+ユビナデ	半円	赤色		普通	乳白色	細砂やや多い	A 1 or 2
51	胴42	直立	推7段		台	普通	タテハケ	ユビナデ+ナナメハケ	半円	赤色		軟質	淡黄灰色	粗砂やや多い	A 1
53	口45胴39	直立・口縁微外反	推7段	均等	台・三	普通	タテハケ	ナナメハケ+ユビナデ	半円（上3・4段）	赤色		軟質	乳白色	粗砂やや多い	A 1
54	底（33.5）	直立	推6段		台	厚手	タテハケ	ユビナデ	半円か2段			硬質	乳白色	細砂少量	A 3
3	底23	小外傾				厚手	タテハケ	ナナメハケ		赤顔料		良好	淡褐色	粗砂多量	A（形）
25・26	胴25	微内傾	推4段		台b	普通	ナナメハケ	ナナメハケ+ユビナデ				硬質	淡褐色	細砂少量	A 4（朝）
27	底28最38	下半部直立上半部外傾	推6段	均等	台c	普通	タテハケ	ナナメハケ	円（3・5段）		第6段に平行縦線	良好	橙褐色	粗砂少量	B 2
28	胴30	直立（第3～5段）	推6段		台d	普通	タテハケ	ナナメハケ	円			普通	淡赤褐色	粗砂やや多い	B 2
32	底28	小外傾	推6段	均等	台d	普通	タテハケ	ナナメハケ一度で調整	円（3段）			硬質	明赤褐色	粗砂やや多い	B 2
43	胴26～34	小外傾	推6段	均等	台d	薄手	タテハケ	緩ナナメハケ	不正円（5段）			硬質	橙褐色	細砂少量	B 2
44	底28		推6段			普通	タテハケ	ナナメハケ				軟質	淡橙褐色	粗砂やや多い	B 2
46	口62	朝顔・口縁段部A技法	推7段		三	普通	ナナメハケ	ヨコハケ				硬質	赤褐色	細砂少量	B 1（朝）
2	底20	外傾		均等	台d	普通	タテハケ	ナナメハケ				硬質	橙褐色	細砂少量	B（形）
14	口42胴31	小外傾・口縁外反	推7段	均等	Ma（線）	厚手	タテハケ	ナナメハケ+タテハケ	横長円（上2段）		最上段にU	軟質還元	灰褐色	粗砂やや多い	B 2
42	口39胴36	口縁外反	推7段		帯a	薄手	ナナメハケ	ユビナデ+ナナメハケ	不整円（上2段）		最上段にA	軟質	淡褐色	粗砂やや多い	C 1
5	口34	小外傾・口縁微外反	推6段	均等	M b 幅広	薄手	タテハケ	ヨコハケ				硬質還元	淡黄褐色	細砂少量	C 2
8	胴28～31	小外傾	推6段	均等	Ma 幅広	薄手	タテハケ	緩ナナメハケ	円（上2・4段）			硬質還元	淡灰褐色	細砂少量	C 2
29	胴31	小外傾（第3～5段）	推7段		Ma	薄手	タテハケ	ナナメハケ	円			硬質	橙褐色	粗砂少量	C 1
45	口34胴29	小外傾・口縁小外反	推6段	口縁長い	Ma	薄手	ナナメハケ	緩ナナメハケ	不整円（上2段）			軟質	橙褐色	粗砂多量	C 2
13	胴34	直立	推7段		M c	薄手	ナナメハケ	ナナメハケ接合痕なし	円			硬質還元	淡黄灰色	再々少量	C 1
15	胴30	小外傾	推6段		M b	普通	ナナメハケ	緩ナナメハケ	円			硬質還元	淡茶褐色	粗砂多量	C 2
38	底27胴31	小外傾・口縁段なし	6段	均等	M b 雑	普通	ナナメハケ	ナナメハケ（円筒部）	円（3・6段）			硬質	橙褐色	粗砂やや多い	C 1（朝）
34	胴29		推5段		M b 雑	薄手	ナナメハケ	ナナメハケ				普通	橙褐色	粗砂やや多い	C 2（朝）
49	胴29		推5段		M b 雑		ナナメハケ	ナナメハケ	円			硬質	橙褐色	細砂少量	C 2（朝）
2	底19胴26	外傾※串孔あり形象台部	推3段	均等	Ma	普通	タテハケ	ナナメハケ	1～2段になし			硬質還元	橙褐色	細砂少量	C（形象台）
22	底20胴24	小外傾	推4段	1段1.2倍長	M c	薄手	タテハケ	タテハケ・接合痕	円（3段）			極硬質	淡赤褐色	細砂少量	D 3
拓本150	胴23～28	外傾	推4段		M d 幅広	薄手	タテハケ	ナナメハケ・接合痕	円（現3段）				橙褐色	粗砂やや多い	D 3
24	底22胴25	直立	推4段	1段1.4倍長	M c	普通	タテハケ	タテハケ・接合痕	円（3段）			硬質	暗赤褐色	粗砂少量	D 3
23	底33胴40	直立	推5段	1段1.8倍長	M d 幅広	薄手	タテハケ	タテハケ・接合痕・底部調整叩	不整円（2・4段）			極硬質	赤茶褐色	粗砂やや多い	D 1
18	底34胴41	外傾	推5段	1段1.9倍長	M c	薄手	ナナメハケ	タテハケ・接合痕	円（2段）			極硬質	暗赤褐色	粗砂少量	D 1
17	底28胴31	直立	推5段	1段2.1倍長	M b	薄手	タテハケ	タテハケ・接合痕				極硬質	暗茶褐色	粗砂やや多い	D 2
拓本3	底29胴30	直立	推5段	1段1.7倍長	M c	普通	タテハケ	ナナメハケ・接合痕				硬質	赤茶褐色	粗砂多量	D 2
拓本145	底30胴31	直立	推5段	1段長い24cm	M d 幅広	普通	ナナメハケ	ナナメハケ・接合痕				普通	暗茶褐色	粗砂多量	D 2
16	口42胴41	直立・口縁小外反	推5段		M c	薄手	ナナメハケ	ヨコハケ・接合痕	円（上2段）			硬質	灰褐色（還元）	粗砂やや多い	D 1
19	底24胴27	直立	推4段	1段1.5倍長	M c	薄手	タテハケ	タテハケ・接合痕	円（3段）			極硬質	赤褐色生出塚か	細砂少量	D 3
7	胴29	小外傾	推4段		M c	薄手	タテハケ	緩ナナメハケ・接合痕				硬質	橙褐色	粗砂多量	D 3
21	胴27	小外傾	推4段		帯a	薄手	タテハケ	タテハケ・接合痕				硬質	淡赤褐色	粗砂少量	D 3
52	頸部22	朝顔	推5段		M b	薄手	タテハケ	ヨコハケ				硬質	赤茶褐色	粗砂やや多い	D 2（朝）
9	胴37	小外傾	推5段		M d 幅広	厚手	ナナメハケ	ユビナデ+ナナメハケ痕	円			普通	淡褐色	粗砂やや多い	D 1
11	底30胴31	直立	推5段	1段長い	帯a	厚手	タテハケ	タテハケ・底部調整横位ケズリ		6の底部か		普通	淡黄褐色	粗砂やや多い	D 2
6	口35胴34	直立・口縁すぼまり小外反	推5段	均等	帯a	普通	タテハケ	下部タテハケ中間ナナメハケ痕	円（上4段）			普通ムラ	淡黄褐色	粗砂やや多い	D 2
20	底付近39	小外傾	推5段	1段長い	M c	厚手	ナナメハケ	ユビナデ+ナナメハケ痕	円（2段）			極硬質	暗赤褐色	粗砂やや多い	D 1
12	口36胴32	直立・口縁微外反	推5段		M b	普通	タテハケ	ナナメハケ+雑ユビナデ・痕	円（上2）			硬質	淡橙褐色	粗砂多量	D 2
4	口40胴34	直立・口縁微外反	推5段		M d 幅広	普通	ナナメハケ	ユビナデ・部分的ナナメハケ・痕	円（上2）			軟質	橙褐色	粗砂やや多い	D 1
10	胴24～29	小外傾	推6段		M b	薄手	タテハケ	下部タテハケ中間ナナメハケ	円（2・5段）			極硬質	橙褐色	粗砂やや多い	C 2

第3表 稲荷山古墳円筒埴輪分類基準表

(2) 分類結果

A類

凸帯を指標にすると、断面形は台形aを基本とし、一部に三角形に近い台形bがある。側面幅が狭く突出度の高いことを特徴としている。凸帯は拇指・人差指・中指の3本の指を当て、おそらく回転台を用いて2周ほどヨコナデ調整を行っており、器壁に密着している。また水平を保っているものが多い。41では凸帯貼付け面にユビナデの基準線が確認されている。透孔はすべて下向きの半円形であり、他の類型には存在していない。また、外面と口縁部内面に赤色彩色を伴うものがあることもA類のみがもつ特徴である。成形は幅数cmの板状粘土を丸めて基底部とし、そこから粘土紐を巻き上げている。外面調整はタテハケを基本とし、2次調整ヨコハケを伴うものが少量ある。内面調整は体部ではナメハケ、口縁部ではヨコハケを基本とし、ユビナデを加えることもA類の特徴である。ちなみに第1段の内面調整はほとんど例外なく縦位のユビナデ調整である。器壁は薄手のものは稀で、厚手のものが目に付く。焼成は軟質のものと硬質のものとがあり、一定していない。色調は乳白色から黄白色の範囲が主体を成しており、白っぽい埴輪は他の類型に存在しないので、分別が容易である。ただし、還元がかかっていて灰色味を帯びるものや酸化度が高く黄色みの強いものも少数含んでいるので注意が必要である。胎土は細砂を少量含む精選土と粗砂をやや多く含むものとが拮抗している。胎土中に凝灰岩粒を相当量含むことが特記される。なお、外面に×状のヘラ記号を施すものが3例ある。実測個体57点中、18個体がA類に属し、構成比は31.6%を占める。

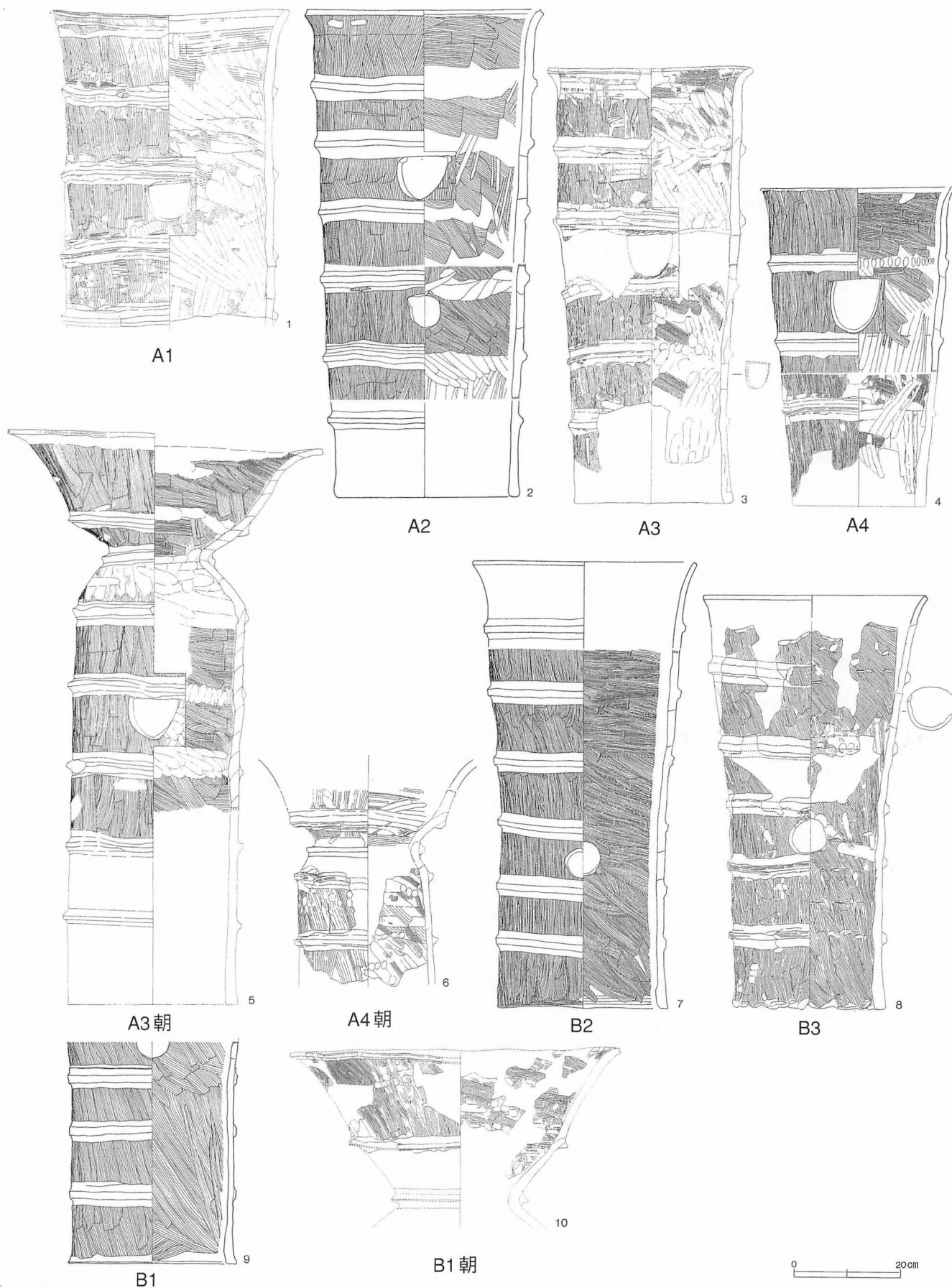
法量と段構成によって、次の4類に細分される。

A1類 6条凸帯7段構成の超大型品

口径が45cmを超え、胴部径も40cm前後となる超大型品で、37・40・41・48・51・53が該当する。器壁が直立する第Ⅰ器形で、口縁部は上位のみが緩やかに少し開く(F1)。口縁端部のヨコナデは総じて弱く、外面のハケ目は完全にはナデ消されていない。また端部は丸く収められるものと角ばって端面に浅い凹線が巡るものがある。段構成は53から5段以上となることが確定するが、6条凸帯7段構成となる可能性が最も高い。段の長さは均等で口縁部長も胴部長と等しい。該当資料では1段の長さ(凸帯の上稜から凸帯の上稜の間を計測)はすべての段で約15cmであり、なんらかの尺度が採用されていたと推定される。このことから復原器高は105cm弱となろう。透孔は半円形で上から3段目と4段目に開口方向を90°ずらして穿孔されている。赤色塗彩は53の例から外面の全面と口縁部の内面に施されていたと見られる。43には上から2段目に×状のヘラ記号がある。

A2類 6条凸帯7段構成の大型品

口径が42cm前後の大型品で、39が該当する。この類型は昭和48年度の第2次調査で内堀及び外堀から出土しており、『埼玉稲荷山古墳』報告書中の第60図1と第71図5が該当する。この2点を合成して全体を復原すると、段構成は6条凸帯7段構成となる可能性が最も高い。段の長さは合成復原図では均等で口縁部長も胴部長と等しいが、39は口縁部が少し長い。胴部の1段の長さは12.5cm前後であり、A1類よりも短い。このことから復原器高は90cm前後となろう。



第43図 稻荷山古墳出土円筒埴輪分類図(1)

器形、口縁部の特徴はA1類と共通する。透孔は半円形で上から3段目と5段目に開口方向を90°ずらして穿孔されており、A1類とは配置が異なる。また下方の透孔は小型である。外面の赤色塗彩は39の例から全面に施されていたと見られる。復原図と39ともに上から2段目には×状のヘラ記号がある。

A3類 5条凸帯6段構成の中型品

口径が39cm前後の中型品で、1・35・47・50・54が該当する。このうち50と35を合成して全体を復原すると、段構成は5条凸帯6段構成となる可能性が最も高い。器形は第2段までが直立し、そこから第4段まで外傾して径を増し、第5段から口縁部まで再び直立する第Ⅱ器形で、口縁部の特徴はA1・2類と共通する。段の長さは合成復原図では中間段はほぼ等しいが口縁部と底部が少し長い。胴部の1段の長さは12.5cm前後であり、A2類と同じである。このことから復原器高は80cm前後となろう。底径は約30cmある。透孔は半円形で上から3段目と5段目に開口方向を90°ずらして穿孔されている。また下方の透孔は小型である。外面の赤色塗彩は50の例から少なくとも上3段に施されている。35には上から2段目に×状のヘラ記号がある。

なお、この類型は昭和48年度の第2次調査で内堀及び外堀から出土しており、『埼玉稲荷山古墳』報告書中の第60図2と第71図2が該当し、後者の上から3段目には第2次調整のB種ヨコハケが施されている。

A3類 朝顔形円筒埴輪

朝顔形埴輪にはA3類に属する確実な例があり、『調査研究報告』第5号に報告した資料はほぼ全貌のわかるものである。西側中堤から内堀側に倒れた状態で水中に露出していたのを取り上げたものである。円筒部は5条凸帯6段構成と推定され、半円形透孔が第4段に穿たれている点でもA3類と共通している。また器高も頸部までの復原長82cmはA3類にほぼ等しい。ただし、器形は器壁が直立する第Ⅰ器形となる点がA3類と異なっており、やや細身である。肩部は丸みを帯びてドーム状を呈し、頸部で強くくびれる。朝顔部は2段構成で二重口縁壺の口縁部のように途中に段を有している。この段から上部は強く外反し口縁部は水平に開く。凸帯は頸部には断面三角、口縁段部には台形のものが巡る。実測図では観察が不十分であったが、朝顔段部の断面を再度観察したところ、擬口縁技法が用いられており、凸帯は接合面の補強を兼ねていることが確認できた。朝顔形円筒埴輪A3類型は昭和48年度の第2次調査で内堀から出土しており、『埼玉稲荷山古墳』報告書中の第60図5・6が該当している。口縁部、肩部とも前述のものより端正な作りで、口径は67.5cmを測り、円筒部最上段には2次調整のヨコハケを伴っている。また『埼玉稲荷山古墳』報告書第61図1は一回り小型ではあるが段構成、器形、透孔の位置が一致しているのでA3類朝顔形円筒埴輪の体部となる可能性がある。

A4類 3条凸帯4段構成の小型品

口径が36から38cmほどの小型品で、30・33・36・31が該当する。この類型は昭和48年度の第2次調査で内堀及び外堀から出土しており、『埼玉稲荷山古墳』報告書中の第60図3と第61図2及

び第71図1・3・5が該当する。31と第71図1を合成して全体を復原すると、段構成は3条凸帯4段構成となるとみて誤りない。器形は底部から徐々に径を増してわずかに外傾する第Ⅳ器形で、口縁部の特徴はA1・2・3類と共通する。段の長さは合成復原図では中間段はほぼ等しいが口縁部がわずかに短く、底部は中間段の1.17倍で長い。胴部の1段の長さは15cm前後であり、A1類と同じである。復原器高は60cmで、底径は25cmある。透孔は半円形で上から2段目と3段目に開口方向を90°ずらして穿孔されている。また下方の透孔は小型である。外面の赤色塗彩は少なくとも上部2段に施されている。

A4類 朝顔形円筒埴輪

A類の特徴を持つ朝顔形埴輪のうち、最も小型のグループをA4類とした。25・26が該当し、同一個体である。円筒部は上から2段分が残存しているだけで段構成は不明であるがA4類円筒埴輪同様の3条凸帯となる可能性が高いであろう。器形は器壁が直立する第Ⅰ器形だが、少し内傾している。おそらく重心が上にあるため安定のよい器形としたものであろう。肩部は失われているが、頸部のくびれは弱い。2段構成となる朝顔部の下段は短く外反して明瞭な段を持ってから、上段が再び外反して開く。その形態的な特徴は下段が短く、上段も立ち気味で開き方の小さいことである。段部は擬口縁技法が採用されているが、そこに貼られた断面台形の凸帯は接合部ではなく下面にあり、補強の用はなしていない。赤みを帯びた淡褐色を呈し、木口状工具も浅くハケ目が疎らという特徴を持っており、少し異色の感がある。

なお、類型は昭和48年度の第2次調査で外堀から出土しており、『埼玉稲荷山古墳』報告書中の第71図4が該当している。形態・法量の面で前述の資料とほぼ共通するが、頸部のくびれはより強く、頸部、円筒部ともに断面三角形の高い凸帯を持っている。透孔はくずれた半円形であり、外面の現存部全体に赤色彩色が施されている。

B類

凸帯を指標にすると、断面形が台形をとなるc類を基本とする。稲荷山古墳のA類と比較すると側面幅が広い。また、側面がくぼむdタイプを含む。凸帯のヨコナデ調整は比較的丁寧だが下部が器壁に密着していないものがある。また水平に貼り付けられておらず、うねりが看取される。透孔はすべて円形である。外面調整はタテハケを主体とし、ナナメハケを客体とする。内面調整はナナメハケを基本とし、ユビナデを加えることは少ない。器壁は普通の厚みで、厚手のものはない。焼成は硬質のものの割合が高い。色調は明赤褐色から橙褐色の範囲が主体だが、還元がかかって灰褐色のものが客体的に存在する。赤色彩色を施すものはない。胎土は朝顔形埴輪の場合、精選されているが、普通円筒埴輪では粗砂をやや多く含むものが多い。実測個体57点中、8個体がB類に属し、構成比は14.0%を占める。

法量と段構成によって、次の3類に細分される。

B1類 7条凸帯8段構成の大型品と推定されるもの

今回の報告資料にはないが、昭和48年度の第2次調査で内堀から出土しており、『埼玉稲荷山古

墳』報告書中の第62図1が該当している。底部を含む4段分が残存し、底部径は31.8cmある。器形は第3段までが直立し、そこから上部が一直線に開く第Ⅲ器形をとるものと推定される。段の長さはほぼ均等配分だが、少しばらつきがある。1段の長さは平均で11.7cmである。透孔は他のB類小分類と異なり4段目に穿たれている。上部の透孔が1段おいた上段にあり、上部2段には透孔がないというB2類の法則性（これはA2類にも共通し6条凸帯埴輪の通則）からすれば、段構成は8段構成7条凸帯となる可能性が高い。成形は第3段までを一気に作り、乾乾燥時間をおいた後に第4段以上の巻き上げを行っており、内外面のハケ調整もこれとよく対応している。外面調整はナナメハケ、内面調整は傾斜の急なナナメハケである。なお、基部は幅6cmの板状粘土を丸めて製作しており、袴腰に開く形状をとる。安定を保つための措置かもしれない。

B2類 6条凸帯7段構成の大型品

今回の報告資料にはないが、昭和48年度の第2次調査で内堀から出土しており、『埼玉稲荷山古墳』報告書中の第61図5が該当している。底部を含む6段分が残存する。底部は歪んでいるが最大径で31.8cmある。段構成は上部透孔の位置から6条凸帯7段構成となろう。復原高は83cm前後となる。器形は第3段までが直立し、そこから上部が一直線に開く第Ⅲ器形をとる。段の長さはほぼ均等配分で、1段の長さは平均で11.7cmとなる。透孔は3段目と5段目に開口方向を90°ずらして穿孔されている。成形は第3段までを一気に作り、乾燥時間をおいた後に、第4段以上は1段ごとに乾燥時間をおいて巻き上げを繰り返している。内外面のハケ調整もこれとよく対応している。外面調整は下半部でタテハケ、上半部でナナメハケ、内面調整は下半部でナナメハケ、上半部でヨコハケである。なお、基部は幅4cmの板状粘土を丸めて製作しており、B1類同様に袴腰に開く形状をとる。安定を保つための措置かもしれない。

B3類 5条凸帯6段構成の中型品

口径42cm前後、底部径28cm前後の中型品で、14・27・28・32・43・44が該当する。このうち27は口縁部以外がほぼ完存しており、段構成は5条凸帯6段構成となる。器形は第3段までが直立し、そこから口迂遠部まで一直線に開く第Ⅲ器形で、口縁部の特徴は14から全体が緩やかに外反して開く形状をとり、端部が四角く収められていることがわかる。段の長さはほぼ均等配分だが、中間の第3・4段が少し短い。1段の長さは平均で12.5cmである。また、27は第1凸帯の剥離した部分に、ヨコナデによる凸帯設定技法が認められる。復原器高は76.5cm前後となる。透孔は3段目と5段目に開口方向を90°ずらして穿孔されている。また下方の透孔は通常の高さであるが上方の透孔は横長かつ大型である。成形は第3段までを一気に作り、乾燥時間をおいた後に、第4段以上は1段ごとに乾燥時間をおいて巻き上げを繰り返している。内外面のハケ調整もこれとよく対応している。外面調整はタテハケとナナメハケを併用するところに特徴があり、内面調整は傾斜の急なナナメハケを基本とするが、特徴的なタテハケを重ねる個体が目につく。また、ヨコハケは口縁部付近の狭い範囲に限定されている。内面には粘土紐の接合痕が多く残り、調整がやや粗雑である。なお、基部は幅7cmの板状粘土を丸めて製作しており、B1・2類同様に袴腰に開く形状をとる。安定を保つための措置かもしれない。

B類 朝顔形円筒埴輪

朝顔部46は大型品で、口径62cmを測る。2段構成で途中で不明瞭な段を有している。この段から上部は緩やかに外反して開くが、A3類と比較すると開き方が小さい。口縁端部には浅い凹線が巡る。段部には尖った三角形の凸帯を伴う。擬口縁技法が用いられているが、凸帯は接合部を跨がずに下面に貼り付けられているので、補強が目的ではなく、視覚的に段を強調するためのものである。くすんだ赤褐色を呈し、法量的にもB1またはB2類とセット関係にあるものであろう。

B類 形象埴輪台部

2は底部径20cmの小型円筒である。直線的に開く器形から普通円筒ではなく、凸帯直下に小孔が開けられているのは、上部構造を乾燥時に支えるために棒を用いる形象埴輪の製作技法かと思われる。したがって人物もしくは器財埴輪の台部と推定する。

C類

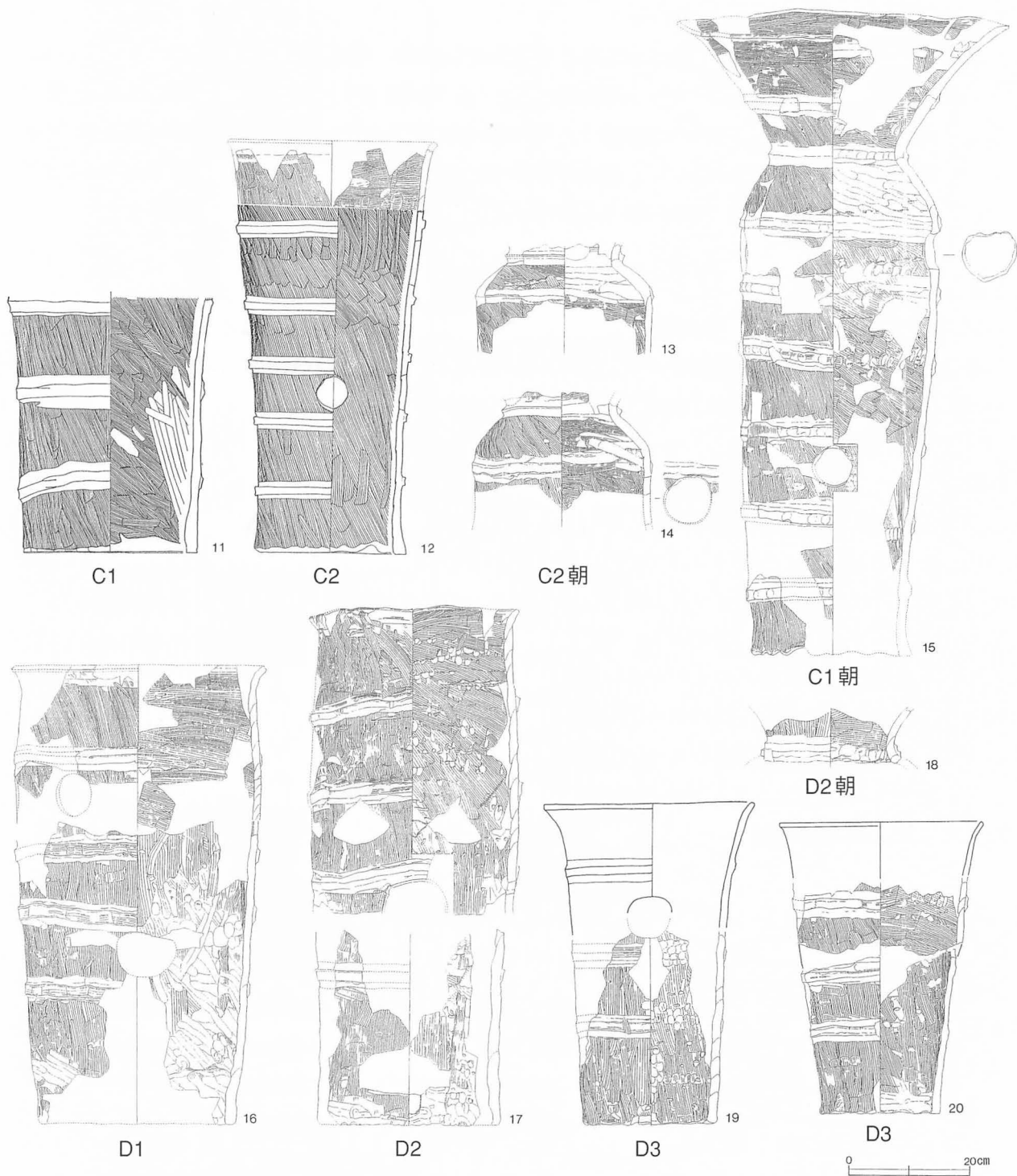
凸帯を指標にすると、断面形がM字形で突出度が比較的高いもの(Ma)から中程度のもの(Mb)を基本とする。凸帯のヨコナデ調整は粗雑で下部が器壁に密着していないものが多い。また水平に貼り付けられておらず、うねりが看取される。透孔はすべて円形である。外面調整はタテハケよりもナナメハケが支配的である。内面調整はナナメハケを基本とし、ユビナデを加えることは少ない。器壁は総じて薄手のものが多い。焼成は硬質のもの割合が高く、還元状態のものも相当数含む。色調は橙褐色から淡褐色の範囲が主体だが、還元がかかっていて灰褐色のものが客体的に存在する。胎土は細砂を少量含むものと粗砂をやや多く含むものがある。なお、外面に凡状のヘラ記号を施すものとⅡ状ヘラ記号を施すものが各1例ある。実測個体57点中、11個体がC類に属し、構成比は19.3%を占める。

法量と段構成によって、次の3類に細分される。

C1類 6条凸帯7段構成の大型品

完形品で円筒部が6条凸帯の朝顔形円筒埴輪(38)が存在しているので、これとセット関係にある普通円筒の存在を仮定してC1類を設定した。42・29そして昭和48年度の第2次調査で内堀から出土した『埼玉稲荷山古墳』報告書中の第62図7が候補となる。42から口縁部径39cm前後、旧報告書第62図7から底部径29cm前後であることが知られる。器形は第2段までが直立し、そこから口縁部まで一直線に開く第Ⅲ器形と推定される。42はかなり薄手で歪みの生じた個体なので一般化することはできないが、口縁部はいったんくびれてから端部が屈曲して開く特徴を持っている。『埼玉稲荷山古墳』第62図7からみると、段の長さは凸帯が水平に貼られていないので計測不能だが、見た目上はほぼ均等配分で、1段の長さは平均で13.7cmである。これに対して口縁部長は12cm前後でやや短い。透孔は残存部を総合すると4段目と6段目に開口方向を90°ずらして穿孔されていることになる。また下方の透孔の特徴は不明だが上方の透孔はかなり大型である。基部は幅7cmの板状粘土を丸めて製作しており、分厚い。

C1類 朝顔形円筒埴輪 6条凸帯7段構成



第44図 稲荷山古墳出土円筒埴輪分類図(2)

38はほぼ完形品であり、全体の特徴がわかる。円筒部は6条凸帯7段構成であるが、円形透孔が第3段と第6段に穿たれている点がC1類普通円筒埴輪との相違点である。円筒部の器形は基底部が少し開くものの全体的には上端部まで直線的に開く第Ⅳ器形をとる。段の長さは凸帯が水平に貼られていないので正確な計測は不可能だが、見た目上はほぼ均等配分で、円筒部の高さ71.5cmを段数6で除した1段の長さは14.3cmである。凸帯は断面M字形で、調整が粗雑なため下端が器

壁に密着せず、側面には貼り付け時の指頭圧痕が残っている。肩部はなで肩で丸みに乏しく、頸部のくびれ方もA3類にくらべると弱い。朝顔部は2段構成であるが、途中に段を有していない。上部はわずかに外反して開き、口縁部は薄く仕上げられ、端部を四角く収めている。凸帯は頸部には低い三角形、朝顔部中間には断面形がM字形で突出度が中程度のもの(Mb)のものが巡る。朝顔部中間ではいったん端部のヨコナデ調整を丁寧に行っており、擬口縁技法と見ることができるが、上段部をその内側に接合するのではなく、端部の延長線上に巻き上げていることが確認できる。器高は106.9cmを測る。

C2類 5条凸帯6段構成の中型品

口径34cm前後の中型品で、5・8・10・15・45が該当する。C1類とともに極めて薄手の作りである点で共通している。これらを総合すると透孔は上から2段目と4段目に開口方向を90°ずらして穿孔されていることがわかる。また、昭和48年度の第2次調査で出土した第61図6はM字形凸帯の特徴に差異はあるもののC2類に属するものであり、器形、透孔の配置、法量などが前記資料群と一致している。したがって5条凸帯6段構成となることはほぼ確実である。5と『埼玉稲荷山古墳』第61図6を合成して得た復原図をもとに検討すると、器形は第2段までが直立し、そこから口縁部まで一直線に開く第Ⅲ器形である。口縁部の特徴は端部が短く外傾する形状で、C1類と共通している。推定全高は67.5cmあり、段の長さはほぼ均等配分だが、中間の第3・4段が少し短い。1段の長さは短い段の平均が9.5cm、他の段の平均が12.1cmとなる。底部径は25cmである。透孔は3段目と5段目に開口方向を90°ずらして穿孔されている。また下方の透孔は通常の大きさであるが上方の透孔は横長かつ大型である。ただし8は例外で下方の透孔もかなり大型と推定される。外面調整はタテハケとナナメハケを併用するところに特徴があり1・『埼玉稲荷山古墳』第61図6のようにナナメハケが主体のものと5・45のように口縁部段のみがナナメハケとなる例とがある。内面調整も10・『埼玉稲荷山古墳』第61図6では傾斜の急なナナメハケによるが、5・8・15・45ではヨコハケを主体的に用いている。これらの相違点を以てC2類はさらに二つに細分される可能性を持っている。良好な資料の蓄積を待つて解決すべき課題である。

C2類 朝顔形円筒埴輪

頸部から円筒部にかけて2個体が出土している。34・49が該当する。肩部はC1類に比べるといくぶん張りが強いが、高さが低い。頸部には断面三角形の、肩部下端には断面M字形の突出度の低い凸帯を巡らせている点でC1類と共通している。また肩部、円筒部ともに外面調整がナナメハケである点も同様である。透孔は円筒部最上段に穿たれている。円筒部の直径は34が27cm、49が29cmであり、C2類第5凸帯直下での計測値とほぼ一致するので、C2類の円筒埴輪と組み合わせて製作された5条凸帯6段構成の朝顔形円筒埴輪である可能性が高い。

D類

凸帯を指標にすると、断面形がM字形で突出度が低いもの(Mc)とM字形で突出度が低くかつ幅の広いもの(Md)、そして帯状で低いもの(帯a・b)を基本とする。凸帯のヨコナデ調整は総

じて丁寧だが、水平に貼り付けられておらず、うねりが看取される。透孔はすべて円形である。外面調整はタテハケとナナメハケが併用されている。内面調整は口縁部付近ではヨコハケだが、それより下部は異例のタテハケを用いるという際だった特徴を有している。また、内面に接合痕を無数に残すこともD類の目立った特徴であり、とくに中型品では器形にゆがみも認められ、粗製の印象がある。このため中型品では調整不十分な位置に補助的なユビナデを加えるものが存在し、さらに底部調整を伴うものが存在している。稲荷山古墳ではD類のみが持つ特徴である。器壁は小型品では薄手だが、大型品にはやや厚手のものがある。焼成は硬質のものの割合が高く、色調は淡赤褐色から暗赤褐色の範囲が主体であり、いずれもくすんだ色調である。胎土は小型品は細砂を少量含み、大型品はチャート礫を代表とする粗砂をやや多く含む。実測個体57点中、17個体がD類に属し、構成比は29.8%を占める。

法量と段構成によって、次の3類に細分される。

D1類 推定4条凸帯5段構成の中型品で径の太いもの

口径が40cm余りの大口徑埴輪で、4・13・16・18・20・23が該当する。16と23を合成して得られた復原図によれば、中膨らみでビヤ樽形の器形となる。分類上は器壁が直立する第Ⅰ器形に準じるが、ゆがみが著しいものである。口縁部はいったんくびれてから外反して開く。口縁端部の内外面は弱いヨコナデが施されており、端面の仕上げ方は四角いものと丸く収められるもののがあって一定しない。透孔が第2段と第4段に開口方向を90°ずらして穿孔されていることから段構成は4条凸帯5段構成とみてほぼ誤りない。復原全高は73cm、底部復原径は32.5cmある。底部は幅9cmの板状粘土を丸めて基部としている。段の長さは中間の3段に比べて口縁部が少し長く、第1段は著しく長い。中間段の長さの平均は12cmであり、第1段は22.5cmあるので、1.875倍となる。凸帯は幅の広い帯状を呈するもので、突出度は低い。側面に木口状工具を当て、断続的に調整した後に、上下にユビナデを加えて仕上げている。透孔はヘラ切り放しのままで不整円形をなし、雑な仕事ぶりである。なお、23の底部付近には外側にはらんだ部分を修正する目的で行った板叩き痕が見られ、内面には円礫と思われる当て具のくぼみがある。通常底部調整技法と異なり、倒立して施したものではないであろう。広義の底部調整技法としてとらえておきたい。

D2類 推定4条凸帯5段構成の中型品で径の細いもの

口径が35cmの中口径埴輪で、6・11・12・17と拓影図3・145が該当する。このうち6と11は同一個体であり、両者を合わせた復原図によれば、中膨らみでビヤ樽形の器形となり、D1類と共通性が高い。口縁部はいったんくびれてから外反して開く。口縁端部の内外面ヨコナデは曖昧でハケ目がほとんど残る。また口縁部はゆがみがひどく、水平を保っていない。端面は丸く収められている。透孔は第2段に不整円形で大型のものが穿孔されているが、第4段にも開口方向を90°ずらして穿孔されていると推測できる。段構成は4条凸帯5段構成とみてほぼ誤りない。復原全高は80cmあり、D1類より高い。底部復原径は30.4cmある。段の長さは第2段以上の各段がほぼ均等であるのに底部が著しく長い。第2段以上の各段の平均13.75cmに対して、第1段は25.0cmあるので、1.82倍となる。凸帯は幅の広い帯状を呈するもの（帯b）で、上の稜が尖る特徴を持っている。水平に貼られておらず、うねっている上に、ヨコナデ調整が不十分で、下端が器壁に密着していない。

外面調整は各段ごとに施し、上部2段では何回もナナメハケとタテハケを重ねて調整を行っている。内面調整は下半部ではタテハケ、上半部ではナナメハケ、口縁部ではヨコハケを施すが、事前に粘土紐の綴じ合わせが行われていないために、接合痕が痘痕状に多数残っており、外面にもその痕跡がある。透孔はヘラ切り放しのままで不整形円形をなしている。11の底部付近外面にはハケ調整後に横位のヘラケズリが施されている。外側にはみ出した部分を削り取ったものであろう。このため基底部はかなり薄くなっている。通常の底部調整技法と異なり倒立して施したものではないであろう。23と同じく、広義の底部調整技法としてとらえておきたい。短時間で製作した粗製の埴輪なるが故にこのような調整を必要としたと理解できる。

D3類 3条凸帯4段構成の小型品

底部径20cm強の小型円筒埴輪で、7・19・21・22・24と拓影図150が該当する。第3段にのみ円形の透孔を持つ3条凸帯4構成の円筒埴輪とみて誤りない。口縁部を補った復原図を2点用意したが、24は直立気味で器高が高く（推定52.5cm）、22と7から合成したものは直線的に開く器形で、やや器高が低い（推定48.5cm）。この差は個体差に属するものである。器形はともに底部から直線的に開く第Ⅳ器形と推定される。第1段が第2段に対してやや長く、24で1.47倍、22で1.56倍ある。凸帯は断面M字形で突出度の低いもの（Mc）で、人差し指から薬指までの3本の指をあてがって一度にナデ調整を行っているが、器壁には十分密着している。ただし水平に貼られておらず、うねりがある。外面調整はタテハケで、底部から第3段の途中までと、そこから口縁部までを分けて施している。内面調整も下半部ではタテハケ、上半部では傾斜の緩いナナメハケと使い分けている。ハケ調整前に粘土紐の綴じあわせを十分にしていないために、接合痕が痘痕状に残るのはD1・2類と同様である。ただし外見上は粗雑感を感じさせないできばえとなっている。また薄手の製作であることがD1・2類との相違点である。

D類 朝顔形円筒埴輪

52は胎土・焼成・色調に加え凸帯の特徴からD類と判断した。15年度の工事中に出土した資料で、正確な出土位置は不明である。頸部のくびれ方が弱く、断面M字形の凸帯が巡る。A・B・C類朝顔形円筒埴輪の場合、くの字形にくびれる頸部に断面三角形の凸帯が巡る点で共通しているので、断面M字形凸帯が巡るのはD類のみの特徴といえる。また頸部の外反度が低いので、口縁部の開き方も小さいことが推定される。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコハケである。

(3) 分類の総括

各類型の規格

分類結果をまとめてみると、第4表のようになる。A類は4つに細分され、6・5・3条の別があり、6条凸帯のものに特に大型のものが存在するので、特大・大・中・小の4規格が存在したことになる。法量

	A	B	C	D
7条凸帯大型		1類		
6条凸帯超大型	1類(105)			
6条凸帯大型	2類(90)	2類(83)	1類	
5条凸帯中型	3類(80)	3類(76.5)	2類(67.5)	
4条凸帯太型				1類(73)
4条凸帯細型				2類(80)
3条凸帯小型	4類(55)			3類(50.5)
朝顔	3類(103)	1か2類	1類(106.5)	1か2類
			2類	

第4表 稲荷山古墳円筒埴輪分類表（括弧内は推定全高cm）

	A	B	C	D
凸帯の断面形	台a	台c	Ma・b	Mc帯a・b
凸帯数	6条大型・6条・5条・3条	7条・6条・5条	6条・5条	4条太型・4条細形・3条
器形	I (6条)・II (5条)・IV (3条)	III	III (6・5条)・IV (朝顔)	I' (4条)・IV (3条)
口縁部	ア	イ	ウ	エ・ア
透孔	半円	円	円	不整円
赤彩	○	×	×	×
胎土	少・多	多	少・多	少・多
焼成	軟質	硬質	硬質	硬質
色調	乳白色	明赤褐色	橙褐色	くすんだ赤褐色
外面調整	タデハケ・稀に2次ヨコハケ	タデハケ>ナナメハケ	ナナメハケ>タデハケ	タデハケ>ナナメハケ
内面調整	ナナメハケ+ユビナデ	ナナメハケ	ナナメハケ>ヨコハケ	タデハケ>ナナメハケ>ヨコハケ
ヘラ記号	×状	III状	A状	不明
底部/第2段	均等	均等	均等	1.8倍
底部調整	×	×	×	○
朝顔頸部凸帯	三角高い	不明	三角低い	Mb
朝顔口縁段部	継目凸帯・下側凸帯	下側凸帯	無段	不明
朝顔口縁端部	水平に開く	斜めに立ち上がり外反	斜めに立ち上がり外反	不明

第5表 稲荷山古墳出土円筒埴輪の分類別諸要素比較表

	A	B	C	D	計
1	2(4%)		3(6%)	6(11%)	11
2	1(2%)	6(11%)	5(9%)	4(7%)	16
3	6(11%)			5(9%)	11
4	4(7%)				4
1か2	3(6%)				3
1朝		1(2%)	1(2%)		2
2朝			2(4%)	1(2%)	3
4朝	2(4%)				2
形象	1(2%)	1(2%)			2
計	19(35%)	8(15%)	11(20%)	16(30%)	54(100%)

第6表 稲荷山古墳出土埴輪(実測図) 割合表

	A	B	C	D	不明	計
小分類無カ	18	19	7	11	3	58
1	2		5	7		14
2	8	1	7	23		39
1か2	4			8		12
3	8	3		10		21
3カ				1		1
4	11					11
3か4	2					2
朝顔	2	3	8	2		15
3朝	1					1
4朝	1					1
計	57(32%)	26(15%)	28(16%)	64(35%)	3(2%)	178(100%)

第7表 稲荷山古墳出土埴輪(拓影図) 割合表

は1mを超えるものから、50cm台に及んでいる。また朝顔形埴輪は5条凸帯のA3類の場合、器高が103cmある。

B類は3つに細分され、7・6・5条の別があり、特大・大・中の3規格が存在するが、小型が欠落している。法量は1mを超えるものと80cm前後の2類型となる。7条または6条凸帯の朝顔形埴輪が存在している。

C類は2つに細分され、6・5条の別があり、大・中の2規格が存在するが、特大型と小型が欠落している。5条凸帯のC2類はA類及びB類に比して一回り小さい。6条凸帯の朝顔形埴輪が存在し、一回り小型のものは5条凸帯となる可能性がある。

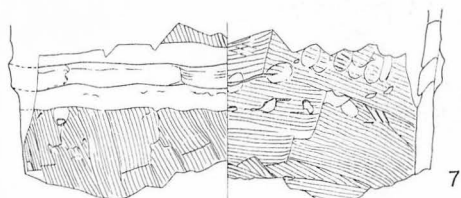
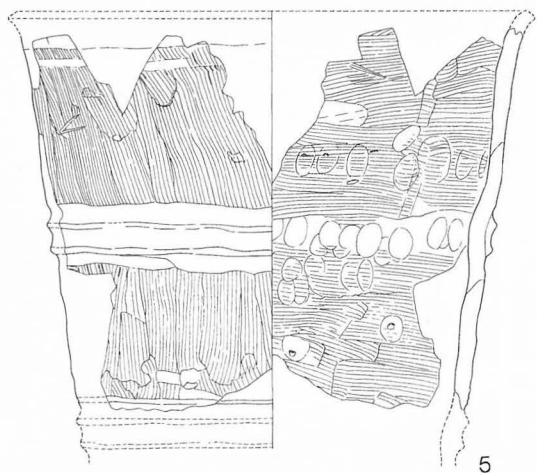
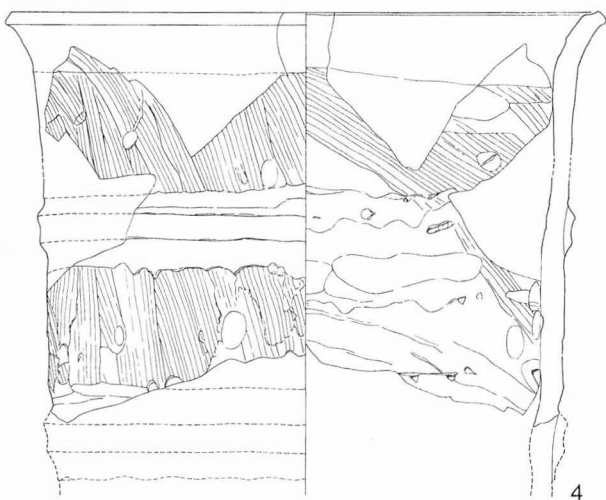
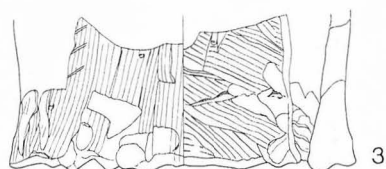
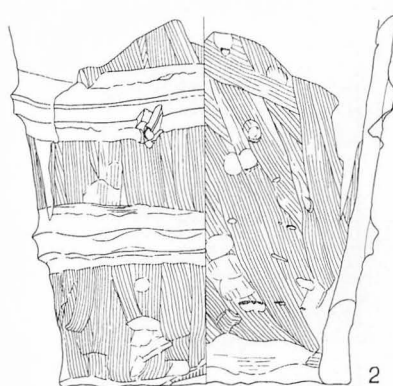
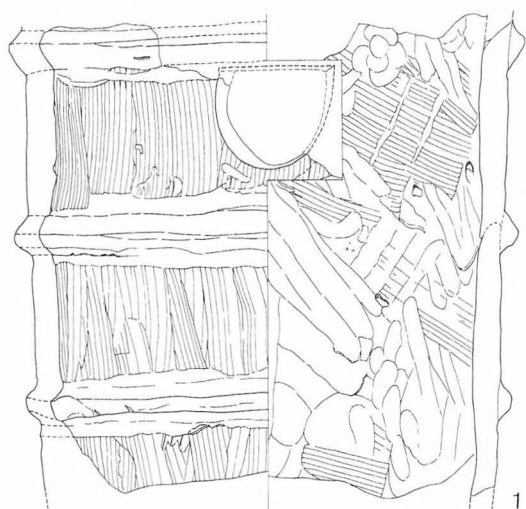
D類は3つに細分され、4・3条の別があり、中・小の2規格が存在するが、特大型と大型が欠落している。4条凸帯のD1及び2類は器高がA類及びB類の5条凸帯品に匹敵する。第1段が長いため、第1凸帯が省略された5条凸帯の円筒埴輪という見方もあり得る。朝顔形埴輪が存在し、4条凸帯となる可能性がある。

A・B・C・D各類型の円筒埴輪をまとめると、合計で12類型が存在し、それぞれ朝顔形埴輪を1類型または2類型伴っているので、円筒埴輪全体では15類型が存在したことになる。

各類型の分布状況

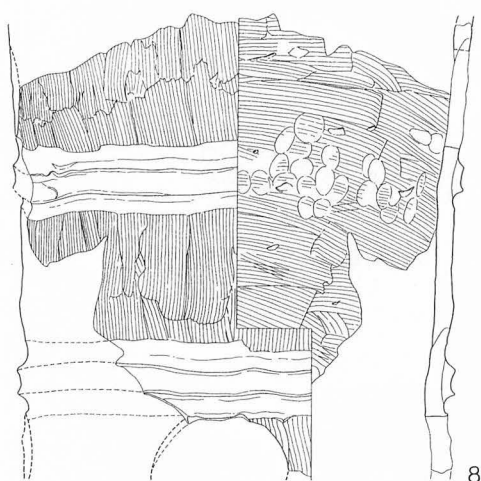
円筒埴輪各類型の分布状況を確認し、さらに規格ごとの設置場所の限定の有無について検証する。

①左側中堤中程の内堀側立ち上がり部では三角堆積中にA1類2個体、A1または2類が1個体、A3類が2個体倒れこんだ状態で検出されている。このことは左側の中堤内側円筒埴輪列には当初A類のみが用いられていて、6条凸帯品と5条凸帯品が混用されていたと推定できる。また、平成3年度の採集品から5条凸帯のA3類朝顔形埴輪を伴っていたことが知られる。

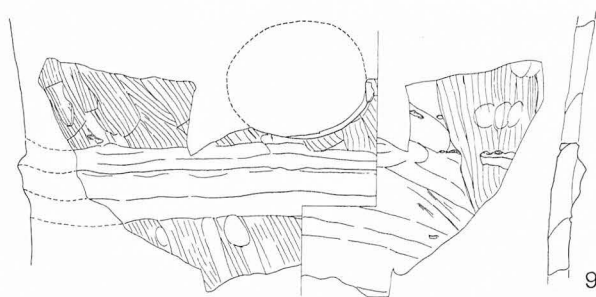


0 20cm

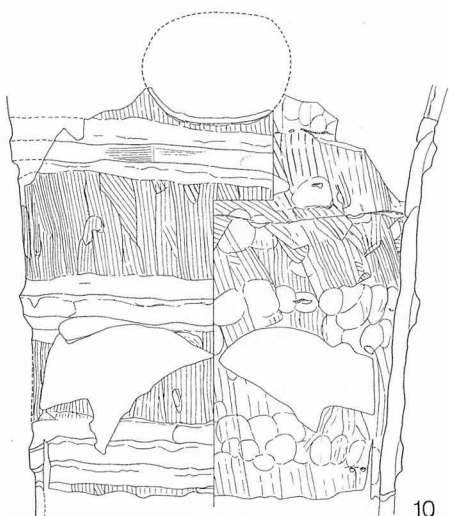
第45図 円筒埴輪実測図(1)



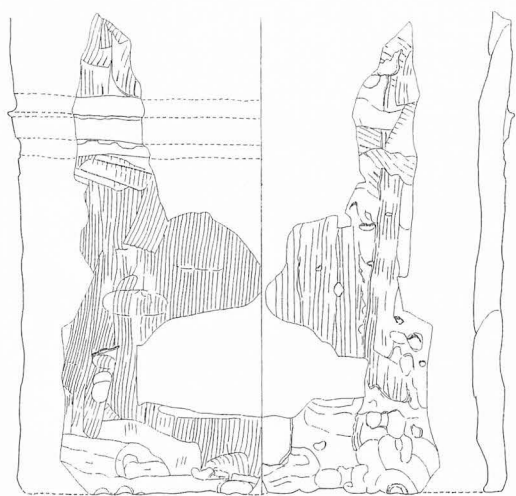
8



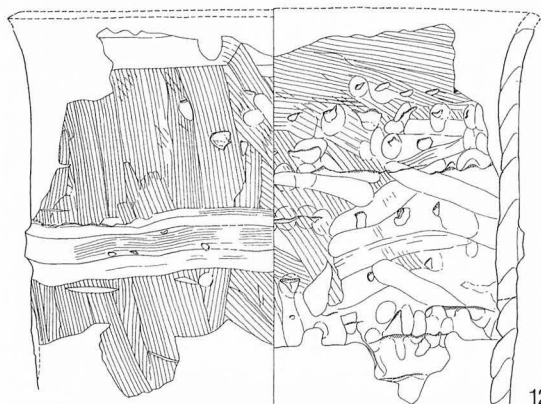
9



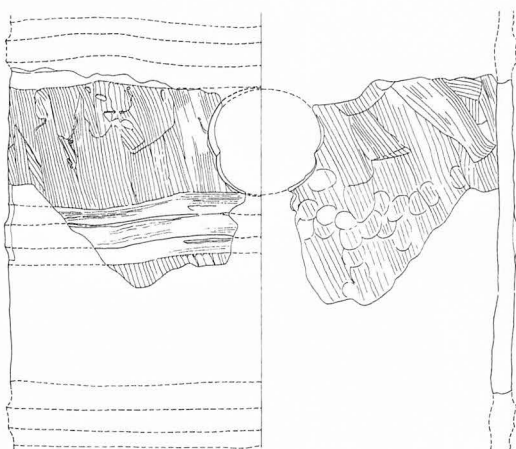
10



11



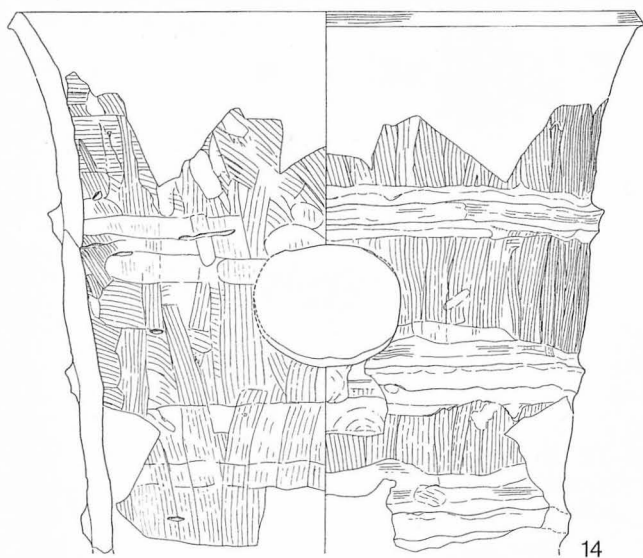
12



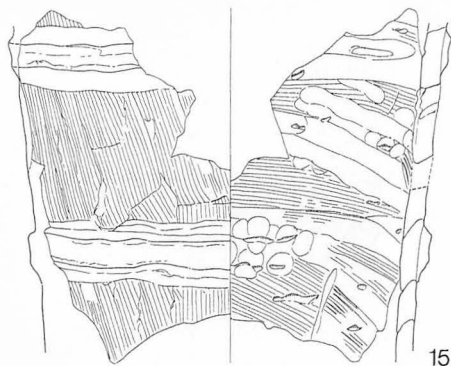
13

0 20cm

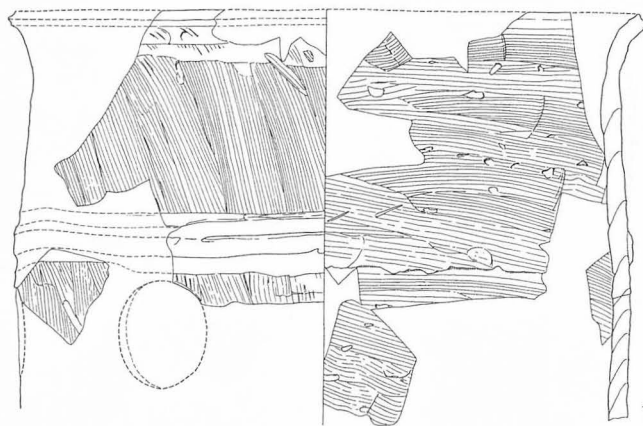
第46図 円筒埴輪実測図(2)



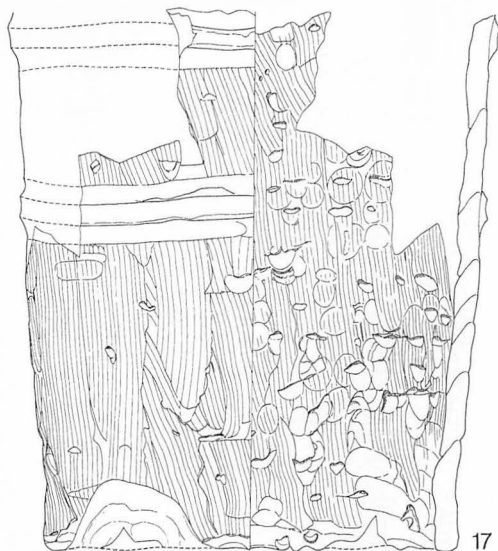
14



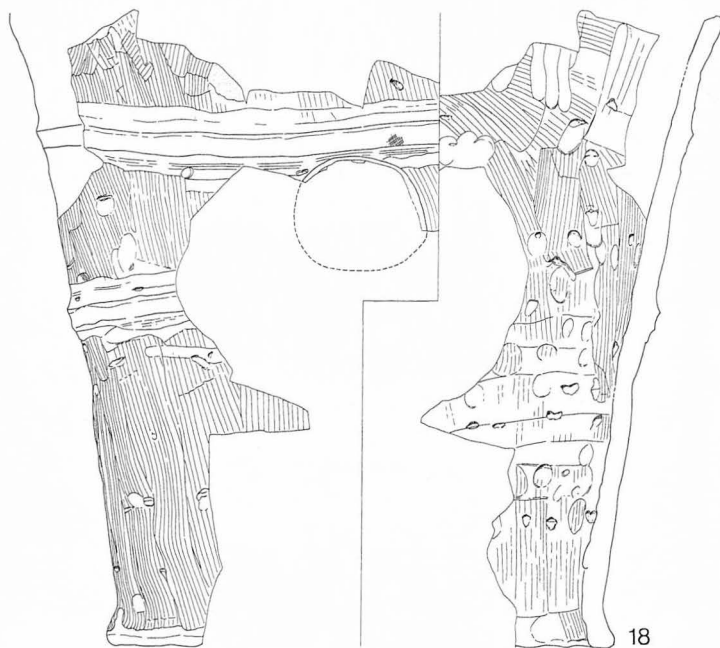
15



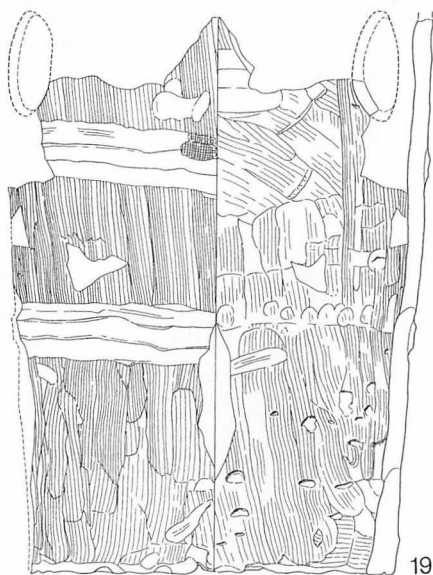
16



17



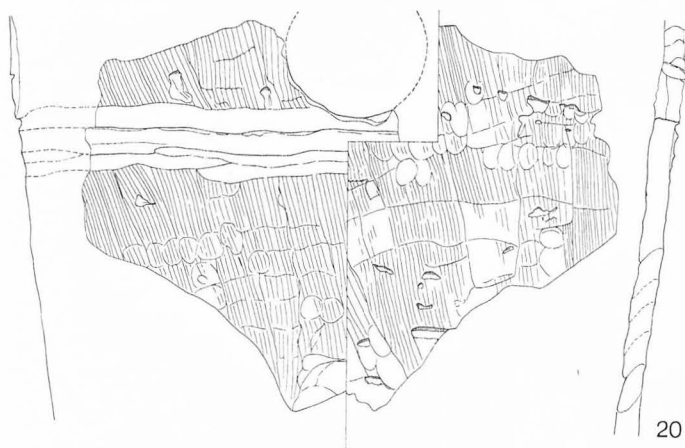
18



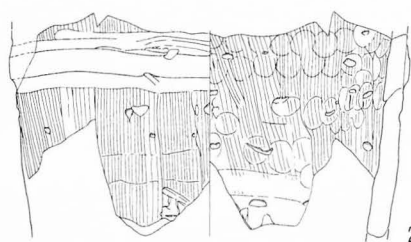
19

0 20cm

第47図 円筒埴輪実測図(3)



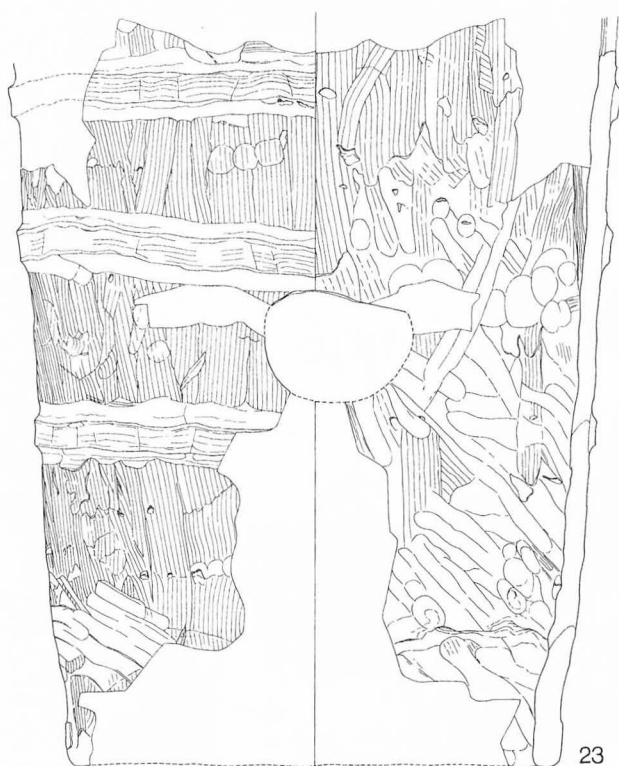
20



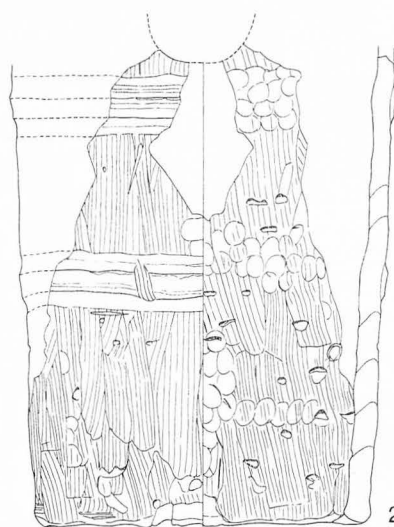
21



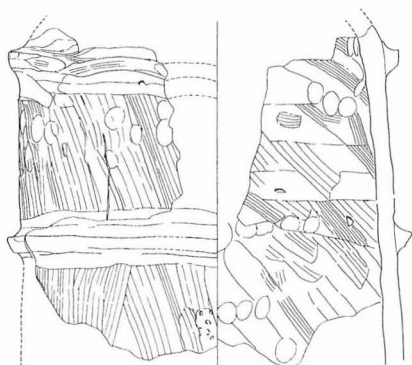
22



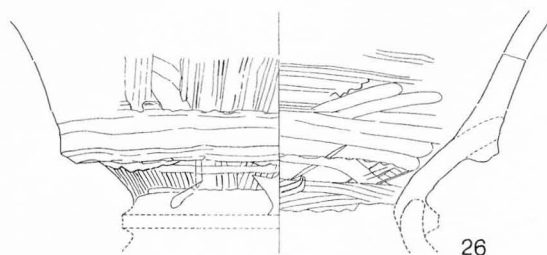
23



24



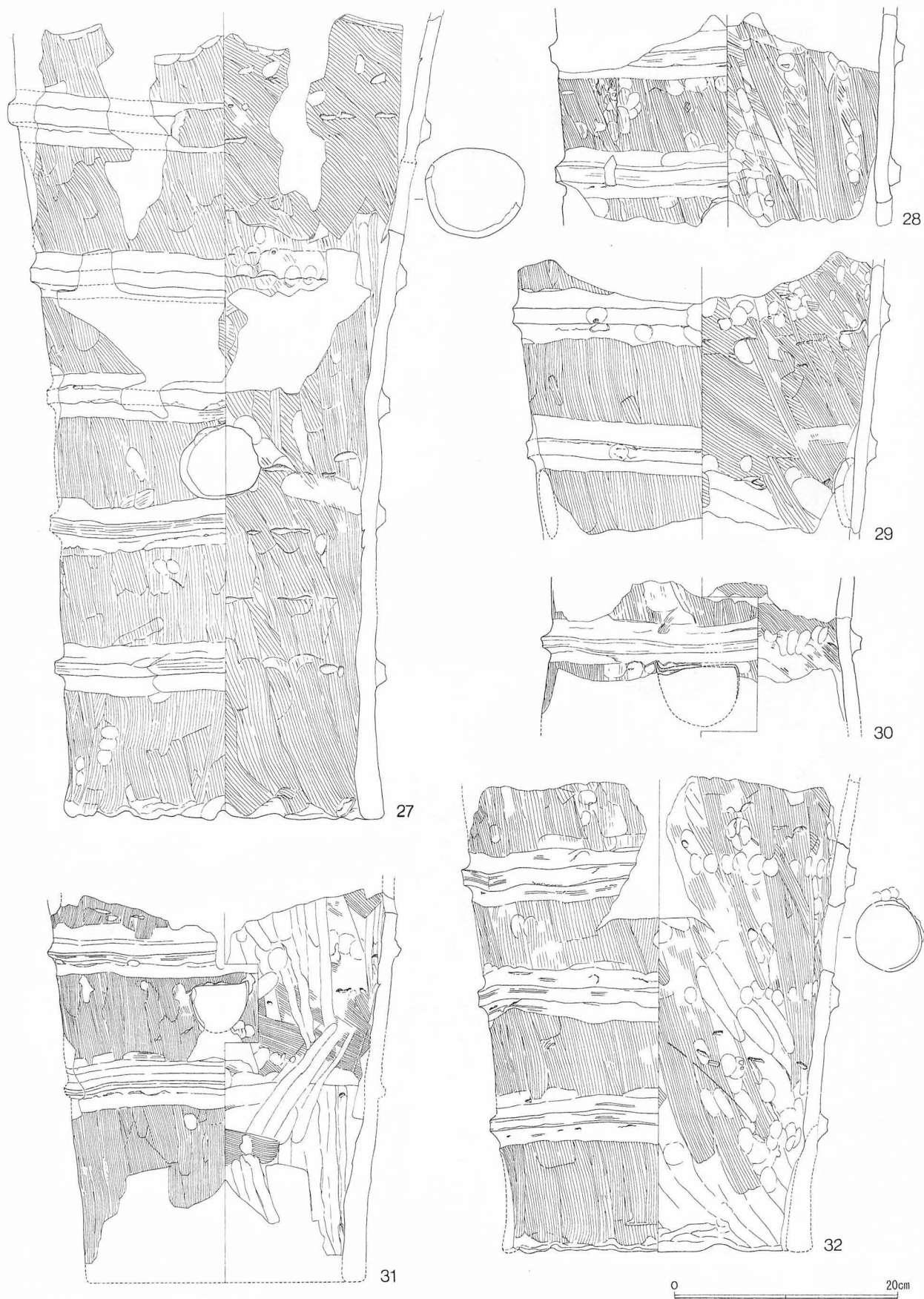
25



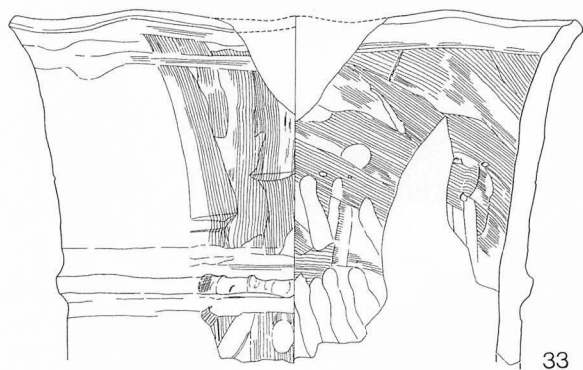
26

0 20cm

第48図 円筒埴輪実測図(4)



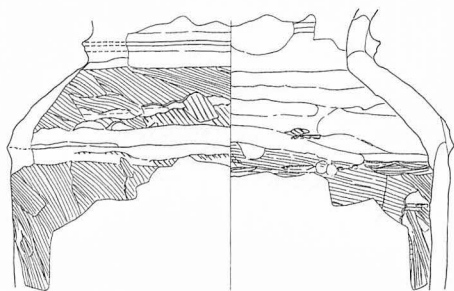
第49図 円筒埴輪実測図(5)



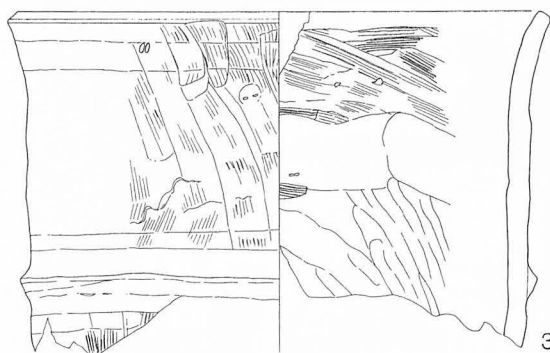
33



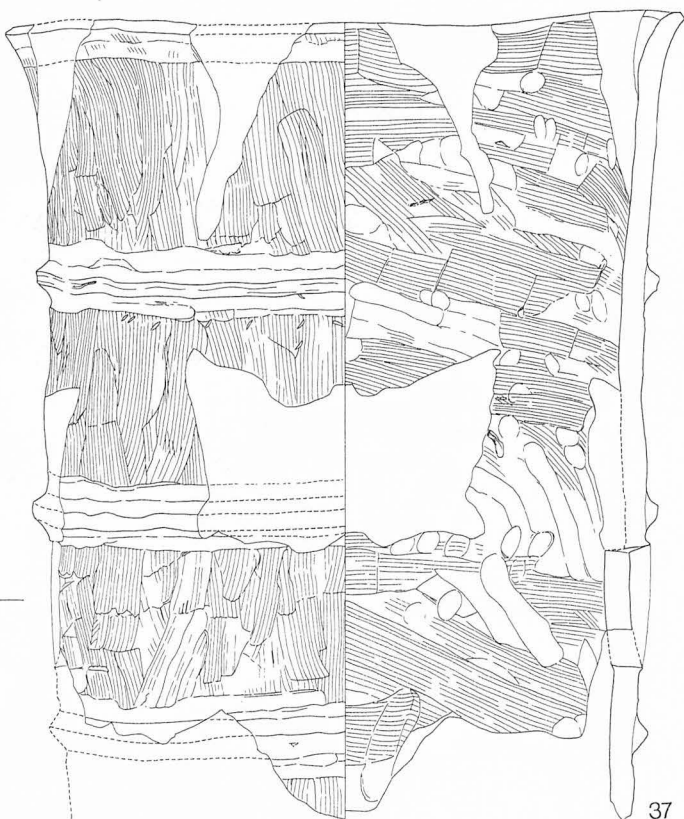
35



34



36



37

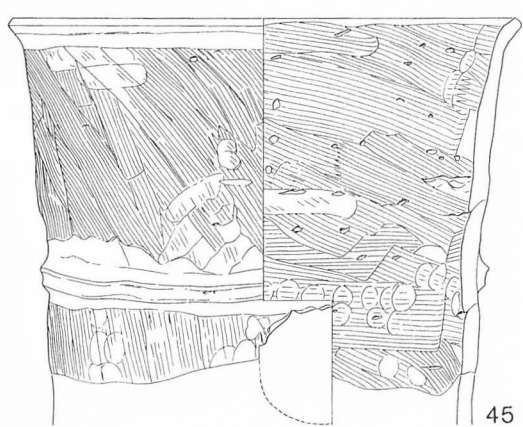
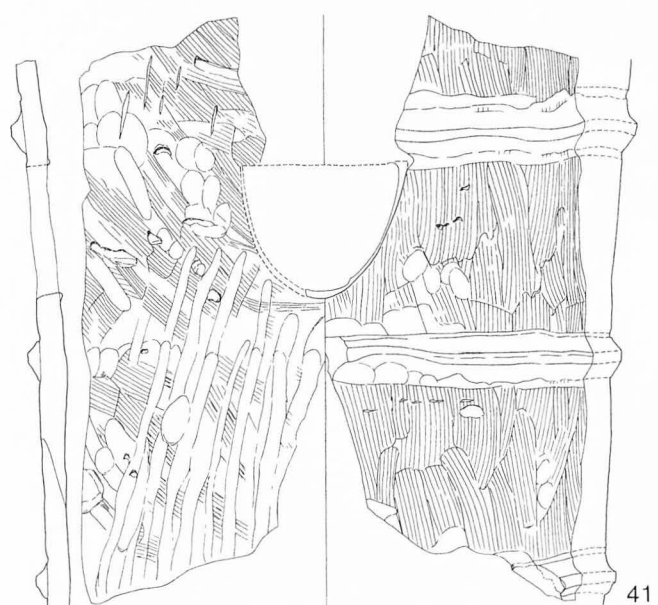
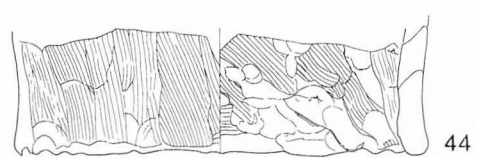
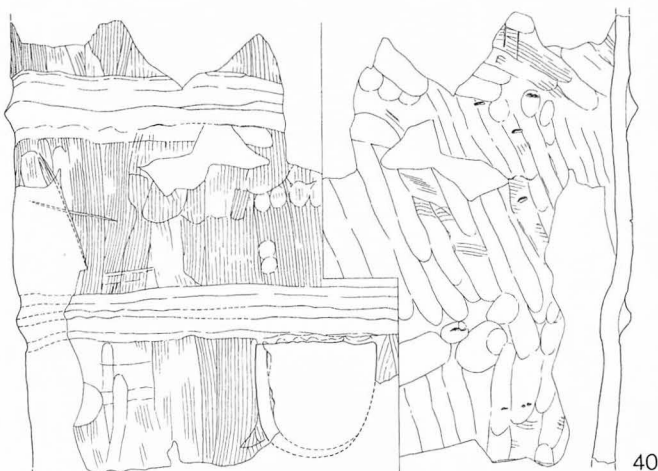
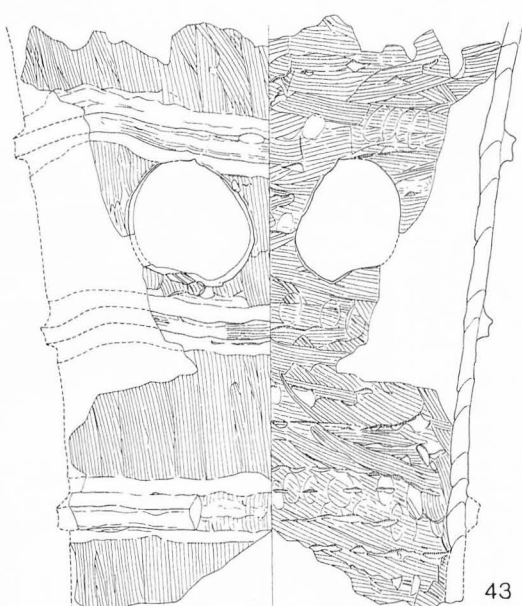
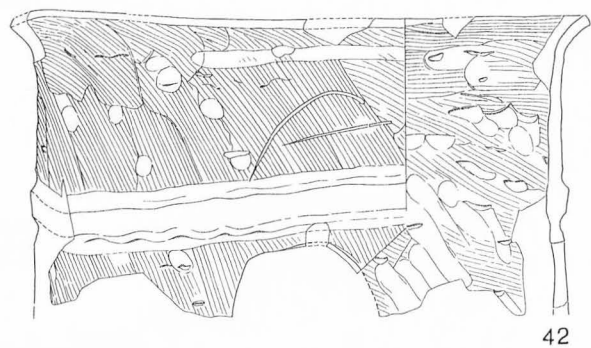
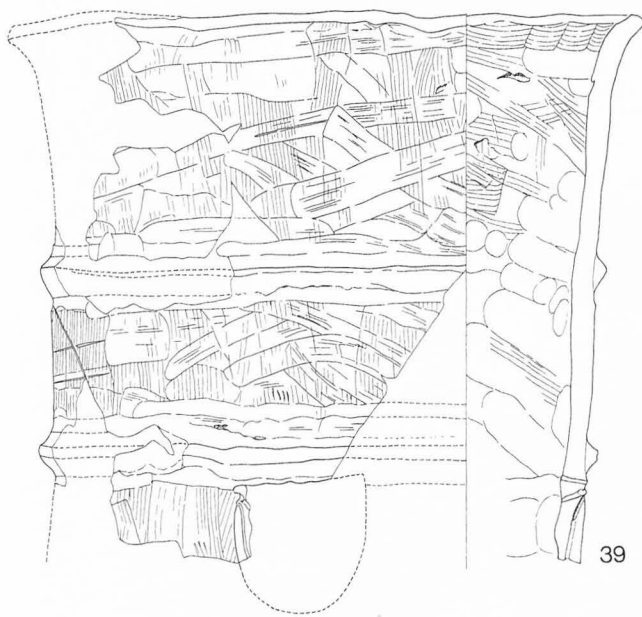
0 20cm

第50図 円筒埴輪実測図(6)



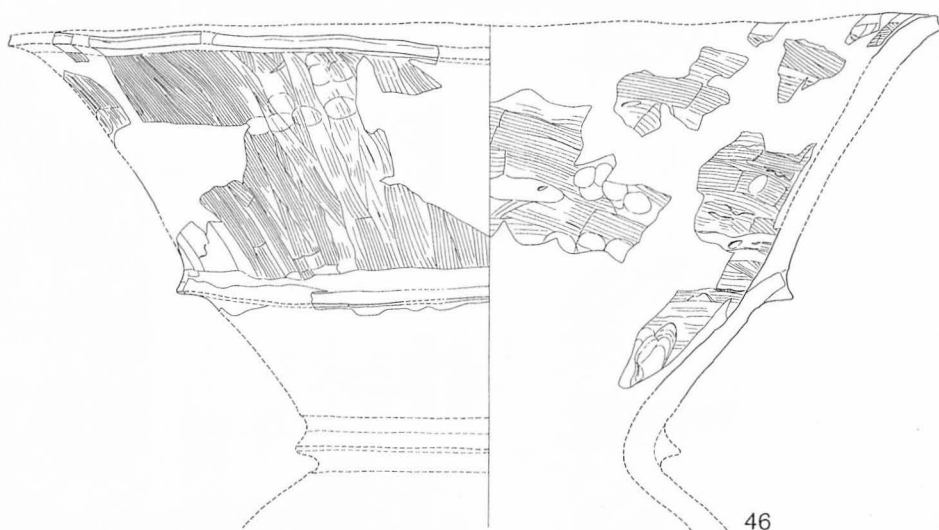
0 20cm

第51図 円筒埴輪実測図(7)

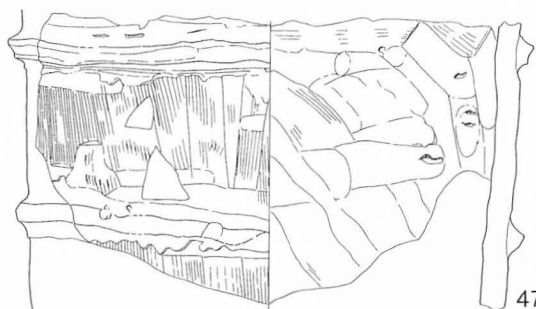


0 20cm

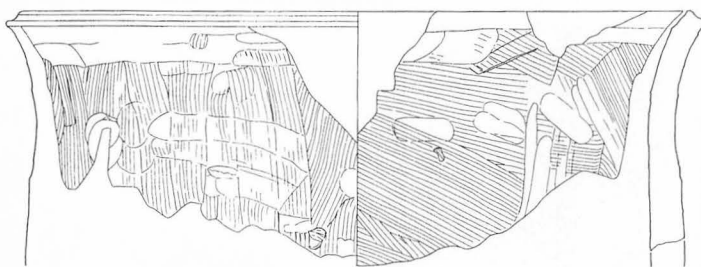
第52図 円筒埴輪実測図(8)



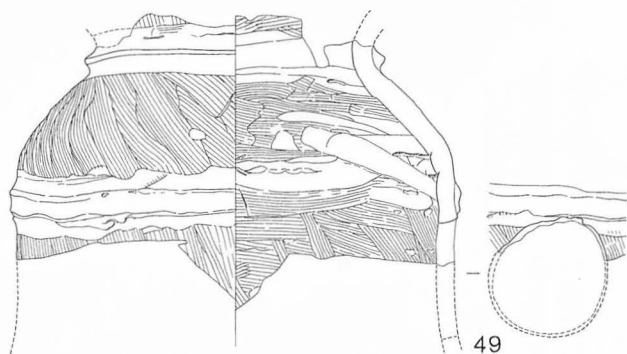
46



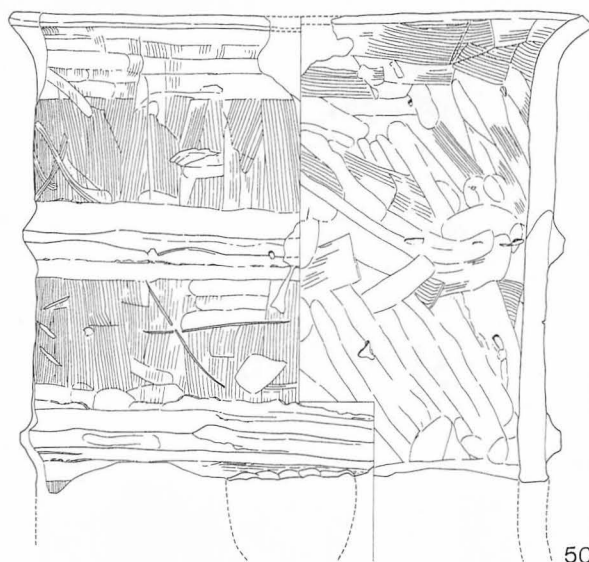
47



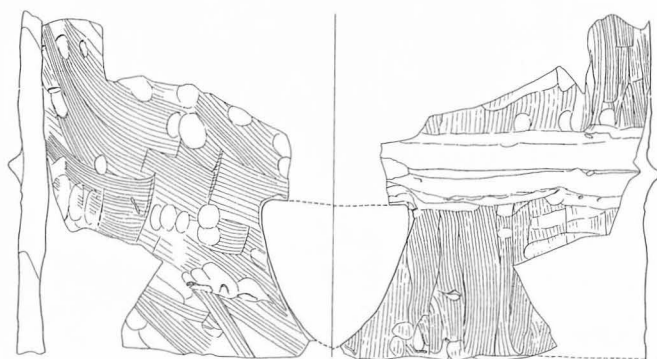
48



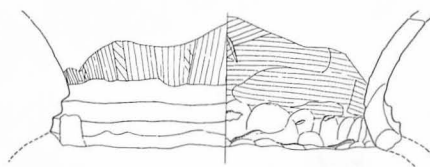
49



50



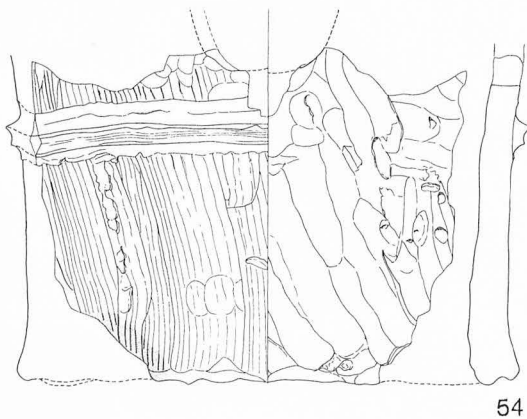
51



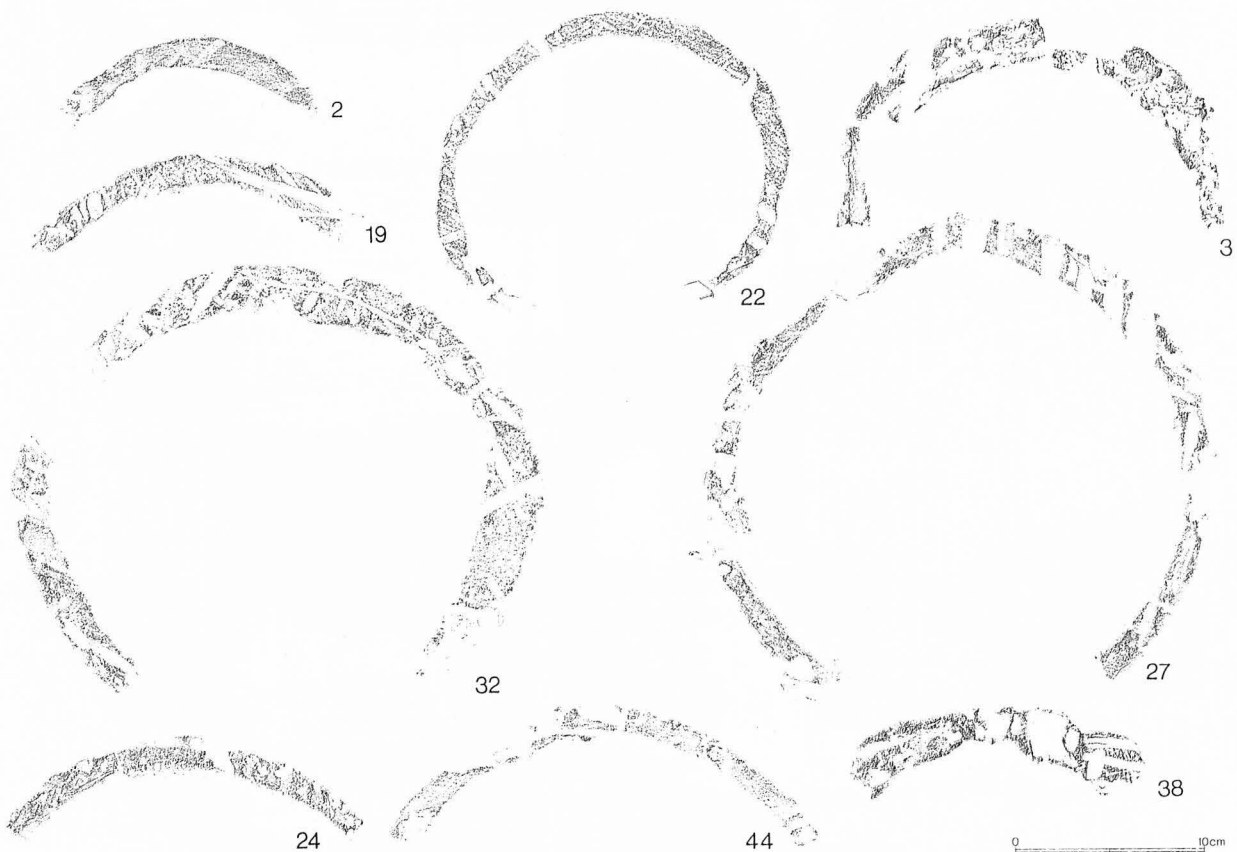
52

0 20cm

第53図 円筒埴輪実測図(9)



0 20cm



第54図 円筒埴輪実測図(10)・底面拓影図

凡例

- 1. 胎土欄には含有する砂礫の量と肉眼で確認できた鉱物名を略号で記載した。角(角閃石)・チ(チャート)・石(石英)・長(長石)・凝(凝灰岩)・酸(酸化鉄粒)・黒(黑色粒)・輝(輝石)・パ(パミス)
- 2. 色調は外面と内面で異なる場合は外面・内面の順に記載し、器肉については肉を頭に付した。
- 3. 外面・内面調整はその順序で記載し、ハケメの本数を(確認本数/確認幅)で付記した。
- 4. 凸帯は断面の形状を記載した。
- 5. 法量・備考欄の%は残存率、重量は計量値を記載した。

第8表 稲荷山古墳出土円筒埴輪(実測図) 観察表

番号	出土位置	種別	胎土	焼成・色調	外面・内面調整	凸帯	透孔	法量・備考	分類
1	04西中堤	円筒胴部	細砂やや多 角・チ・石・長・凝・酸	良好・堅緻 淡灰褐色 淡褐色 肉暗灰色	タテハケ(10/3.5) 上部ナナメハケ (11/3.1)部分的指ナデ 下部主に指ナデ	三角形及び 台形	最上段 半円形か	復原径34cm(40%残存) 厚手・中型 段幅10~13cm 2.1kg	A3類
2	09B6G	円筒底部	細砂少量 チ・石・長・角・凝・酸	良好・堅緻 橙褐色 暗灰褐色 灰褐色	タテハケ(11/2.2) ナナメハケ(12/2.5)	M形		底部径20cm(70%) 小型・形象台部か 基部内側に木状圧痕	B類
3	09B12G	円筒底部	砂礫粗砂多量 チ・石・角・凝・酸・黒	良好 少し粗い 淡褐色	タテハケ(7/2.1) ナナメハケ(9/2.5)			底部径23cm(50%) 小型・基部技法 端部を重ねて接合・0.7kg	A類 (形象)
4	09C12G	円筒口縁部	粗礫粗砂やや多 チ・石・酸・凝	軟質 粉っぽい くすんだ橙褐色 灰褐色	タテハケ(9/2.8) 口縁部ナナメハケ 斜位・横位ユビナデ 部分的ナナメハケ (15/4.5)	M形	上から2 段目 円形	口径40cm(40%) 幅広いヨコナデ 端部内側に段形成 段幅約12cm 1.5kg	D1類
5	09C12G	円筒口縁部	細砂少量 石・チ・酸	良好・堅緻 還元がかかる 淡黄褐色・灰色 灰褐色	タテハケ(13/2.8) ヨコハケ(12/2.5)	M形		口径34cm(25%) 小型・段幅約10cm 接合単位二箇所あり 0.8kg	C2類
6	09C12G	円筒口縁部	粗砂やや多 チ・石・酸・長・角・凝	普通 下半部やや軟質 淡黄褐色 上半部やや硬質 明赤褐色	タテハケ(15/3.7) 口縁部外面のみナナメハケ タテハケ(15/3.7) 中間部ナナメハケ(〃) 口縁部ヨコハケ(〃)	台形	上から4 段目 円形	口径35cm(40%) 大型 段幅11~13cm 5条凸帯の可能性が色濃い 6.5kg	D2類
7	09C12G	円筒胴部	小礫粗砂多量 石・チ・酸・凝	良好・内側堅緻 外側粗っぽい くすんだ橙褐色	タテハケ(11/2.6) ナナメハケ(11/2.4)	M形		口径29cm(30%) 中型・内面に接合痕残存 0.5kg	D3類
8	09C12G	円筒胴部	小礫細砂少量 チ・石・長・輝・酸	良好・堅緻 淡灰褐色 オリーブ灰色	タテハケ(17/4.3) 強いナナメハケ(19/4.4)	M形	最下段・ 上段直交 円形	復原径30cm(40%) 中型・段幅10~12cm 内面に指押さえ痕・1.4kg	C2類
9	09C12G	円筒胴部	細砂粗砂やや多 チ・石・長・酸・凝	普通 くすんだ橙褐色	ナナメハケ(10/2.9) ナナメハケ(8/2.7)	M形	円形	大型 厚手・重量感あり 内側に粘土紐接合痕 1.3kg(40%)	D1類
10	09C12G	円筒胴部	細砂・粗砂やや多 チ・石・酸・凝・角	極めて良好 硬質堅緻 くすんだ橙褐色	タテハケ(10/2.3) 一部にナナメハケ 下半部タテハケ(13/5.3) 上半部ナナメハケ (26/7.7)	M形	最上段梢 円形	最大径27cm(40%) 薄手硬質・大型 段幅8~9cm 貼付部は器肉が内側に凹む 1.3kg	C2類
11	09C12G	円筒低部	粗砂やや多 チ・石・長・角・凝・酸	普通 少し粉っぽい 淡黄褐色	タテハケ(12/3.2) 基底部斜位指ナデ その他タテハケ(8/2.0)	低平		底部径30cm 厚手・雑 基底部は薄い・0.8kg	D2類
12	09E8G	円筒口縁部	小礫粗砂多量 石・チ・長・角・凝・輝	良好・堅緻 表面は粉っぽい くすんだ淡橙褐色	タテハケ(18/4.8) 及びナナメハケ交互 ナナメハケ(15/4.4)	M形	下の段 円形	口径35.5cm(30%) 内面調整雑 1.5kg	D2類
13	09E8G	円筒胴部	細砂少量 チ・石・長・酸	良好・堅緻 くすんだ淡黄灰色 灰褐色	ナナメハケ(18/2.9) ナナメハケ(20/3.1)	M形	円形	復原径34cm(40%) 中型・段幅9~11cm 水平でなくうねりあり ヘラ切離し・1.6kg	C1類
14	09E12G	円筒口縁部	細礫粗砂やや多 チ・凝・酸・石・角・輝	還元 やや軟質 灰褐色	タテハケ(10/2.8) 2次調整タテハケ ナナメハケ後タテハケ 口縁部付近ヨコハケ (15/4.4)	M形	上から 2段目 横長円形	口径42cm(50%) 厚手大型・凸帯幅10~8cm 口縁部下位凸帯との接地点 にU字形窯印一部残存 7.0kg	B2類

1 5	09E12G	円筒 胴部	小礫粗砂多量 チ・石・長・酸・ 角・輝	良好 粉っぽい 淡茶褐色	ナナメハケ(17/4.2) ナナメハケ(14/2.5)	M形	円形	小型・段幅約11cm うねっており水平でない 復原径30cm (30%) 0.7kg	C 2 類
1 6	09F12G	円筒 口縁部	細礫粗砂やや 多 石・チ・酸	還元・良好・堅 緻 灰褐色～赤灰色 灰黄色 暗灰褐色	ナナメハケ (12/2.8) ヨコハケ (12/2.4) 口縁部ヨコハケ		上から 2 段目 円形	口径32cm (25%) 大型・寸胴 口縁部外反 0.9kg	D 1 類
1 7	09F12G	円筒 底部	細礫粗砂やや 多 石・チ・酸・白・ パ・角・輝	良好 極めて堅緻 暗茶褐色	タテハケ (16/5.2) タテハケ(16/4.0)	M形		底部径28cm (25%) 大型・段幅約10cm 第1 段目長い 生出塚産の可能性・1.6kg	D 2 類
1 8	09F12G	円筒 底部	粗砂少量 石・チ・長・角・ 凝	良好 極めて堅緻 暗赤褐色	ナナメハケ (12/3.8) 2 段目までタテハケ (20/4.2) 3 段目ナナメハケ	M形	第2 段 円形	底部径32cm (40%) 雑・段幅8～11cm 大型 7.1kg	D 1 類
1 9	09F12G	円筒 底部	細砂少量 チ・石・長・角・ 凝・酸	良好 極めて堅緻 くすんだ赤褐色	タテハケ (13/2.2) (16/4.8) の2 種 タテハケ (18/3.0)	M形	第3 段 円形	底部径22cm (30%) 小型・段幅10～11cm 焼成と凸帯の特徴が生出土 産のものと類似・2.3kg	D 3 類
2 0	09F12G	円筒 胴部	小礫粗砂やや 多 石・チ・酸・凝	良好 極めて堅緻 内面粉っぽい 暗赤茶褐色 淡黄褐色	横位ユビナデ後 ナナメハケ(9/2.7) 横位ユビナデ後 ナナメハケ (14/4.3)	M形	第2 段 円形	復原径約50cm (50%) 超大型 1.2kg	D 1 類
2 1	09F12G	円筒 胴部	粗砂少量 チ・石・長・酸・ 凝	良好 外面粉っぽい 淡赤褐色	タテハケ(23/4.4) タテハケ(11/3.5)			復原径約27cm (30%) 小型 0.6kg	D 3 類
2 2	09F12G	円筒 低部	精選 微細砂少量 チ・石・角・長・ 凝	極めて良好 硬質 淡赤褐色	タテハケ(11/2.9) タテハケ(11/3.0)	M形	円形	底部径20cm (80%) 小型・形象台部か 段幅約8 cm・2.3kg 第3 段まで残存	D 3 類
2 3	09F12G	円筒 低部	粗砂やや多 チ・石・角・白・ パ	極めて良好 硬質 赤茶褐色	タテハケ(11/3.1) タテハケ(12/4.0)	台形	第2 段・ 第4 段 直交 円形	底部径33cm・超大型 段幅9～11cm 第3 段まで残存 6.7kg	D 1 類
2 4	09F12G	円筒 低部	粗砂少量 石・チ・酸・凝	良好・堅緻 暗赤褐色	タテハケ(8/2.1) タテハケ(10/2.3)	M形	第3 段 円形	底部径22cm (25%) 小型・突帯幅約10cm 第3 段まで残存・凸帯部内 面指押さえ痕残存・1.3kg	D 3 類
2 5	09K15G	朝顔 肩部～ 口縁部	細砂少量 チ・石・凝・角	良好・堅緻 淡褐色 肉灰褐色	タテ及びナナメハケ (12/4.3) ナナメハケ(7/2.7) 後横位ユビナデ	台形		頸部径約26cm (70%) 小型朝顔 段幅10～11cm 3.2kg	A 4 類 朝
2 6	09L15G	朝顔 口縁～ 頸部	細砂少量 凝・チ・角・長・ 酸	良好・堅緻 淡褐色 肉灰褐色	タテハケ(9/2.4) ヨコハケ(15/2.5)			頸部径約20cm (50%) 頸部と口縁段部に乾燥単位 あり・1.1kg	A 4 類 朝
2 7	09M13G	円筒 低部	粗砂少量 チ・凝・角・長	良好 くすんだ橙褐色	タテハケ 第5 段以上ナナメハケ (13/2.7) ナナメハケ(7/3.6)	台形	円形	大型 外面第二段付近に対向し暗 灰色の黒斑風部位あり 12.3kg	B 2 類
2 8	09M13G	円筒 胴部	小礫粗砂やや 多 チ・石・凝・酸・ 長・角	普通 少し粉っぽい 淡赤褐色 肉赤灰色	タテハケ (11/2.2) ナナメハケ(10/1.8)	台形	円形	大型円筒・段幅約9 cm ハケ調整が2 次にあたる (30%) 0.8kg	B 2 類
2 9	09M13G	円筒 胴部	細礫粗砂少量 チ・石・酸・凝	良好 表面粉っぽい くすんだ橙褐色	タテハケ(18/4.0) ナナメハケ(13/2.8)	M形	円形	中型円筒・径約32cm 段幅約10cm (30%) 1.3kg	C 1 類
3 0	09M14G	円筒 胴部	細砂少量 チ・石・凝・酸・ 長・角	軟質 粉っぽい 淡黄白色	タテハケ(11/1.7) ナナメハケ(17/2.7)		半円形	小型円筒・径約30cm 外面に赤彩痕 (45%) 0.6kg	A 4 類
3 1	09M14G	円筒 低部	細砂少量 長・石・角・凝・ 酸	良好 極めて堅緻 淡褐色	タテハケ(35/3.3) ナナメハケ(19/3.2)	台形	第2・3 段直交 半円形	段幅約11cm・外面基底部付 近に灰黒色斑一箇所あり (50%)・1.9kg	A 4 類
3 2	09M13G	円筒 低部	粗砂やや多 石・チ・長・酸・ 角	良好・堅緻 明赤褐色 肉灰茶褐色	タテハケ(18/3.8) ナナメハケ(12/2.8)	台形	第3 段 円形	第1 段75%・第2 段以上は 25%・低部から4 段まで残 存・刀子穿孔後上部ユビナ デ・段幅9～10cm	B 2 類

3 3	09M13G	円筒 口縁部	細砂少量 礫稀 チ・酸・凝・石・ 長・角	普通 やや粉っぽい 黄褐色 肉灰黒色	タテハケ(16/2.5) ナナメハケ(16/2.9)	台形		口径38cm (50%) 中型・赤彩痕 口縁部が歪んで波打つ 1.9kg	A 4 類
3 4	09M14G	朝顔 肩部～ 頸部	細礫粗砂やや 多 チ・石・長・凝・ 酸	普通 少し粉っぽい 橙褐色	ナナメハケ(11/2.3) ナナメハケ(14/2.9) 肩部横位ユビナデ	M形		肩部幅約30cm (25%) 小型朝顔 乾燥単位二箇所 0.5kg	C 2 類 朝
3 5	11M14G	円筒 胴部	精選細砂少量 石・角・長・酸・ チ・凝	良好 表面粉っぽい 黄白色 肉暗灰色	タテハケ (19/3.7) (40/3.1)の2種 タテハケ(22/3.3)	台形	第2段 第4段 半円形	底部から4段目の一部まで 残存・一段ずつ形成と乾燥 を繰り返したと推定・段幅 約11cm (60%) ・6.4kg	A 3 類
3 6	11N16G	円筒 口縁部	細砂やや多 チ・酸・石・凝・ 角	良好・堅緻 黄白色 肉淡オリーブ灰色	タテハケ(8/1.9) ヨコハケ(7/1.3)	三角		中型・最大径幅36cm (30%) 外面一部に 赤彩痕 1.0kg	A 4 類
3 7	11N16、 17G	円筒 口縁部	小礫粗砂やや 多 チ・角・酸・凝・ 石・長	良好・堅緻 表面粉っぽい 淡黄灰白色	タテハケ(11/2.3) ヨコハケ及び緩いナナメ ハケ (15/3.7)	台形 三角形	上から 3段目 半円形	最大径46cm 超大型 口縁部を含む4段残存	A 2 類
3 8	11N16G	朝顔 復原 完形品	粗砂やや多 凝・チ・石・酸・ 角・長	良好 くすんだ橙褐色	ナナメハケ(10/2.3) 口縁部上段のみA種ヨコ ハケ・1～4段目タテハ ケ(12/3.0)・4段目上段 部以上ナナメハケ	M形	3段目・ 6段目直 交 円形	器高106.9cm・口径55cm 低径26.5cm 段幅10～13cm 6段目の透孔の方が大きい 19.2kg	C 1 類 朝
3 9	11N16G	円筒 口縁部	細砂やや多 チ・石・角・長・ 酸・凝	やや軟質 黄色味を帯びた 乳白色	タテハケ(10/2.5) ナナメハケ後斜位ナデ 口縁部付近のみヨコハケ (5/1.9)	上 三 角 下 台形	上から 3段目 半円形	口径42cm (70%) ・大型 段幅約11cm ・上から2段目 に×状ヘラ記号・保存状態 のよい面にササラ状刷毛に よる赤彩・8.4kg	A 3 類
4 0	11N16G	円筒 胴部	粗砂少量 チ・石・長・角・ 凝・酸	やや軟質 粉っぽい 黄色味を帯びた 乳白色	タテハケ(8/1.6) ナナメハケ(6/1.0)後 斜位指ナデ	上三角 下台形	最下段 半円形	復原径41cm (40%) 大型・段幅約13cm・透孔の 上の段に×状ヘラ記号あり ・外面全面にわたる赤彩 痕	A 1 か 2 類
4 1	11N16G	円筒 胴部	細砂やや多 チ・長・石・角・ 酸・凝	普通・粉っぽい 黄色味を帯びた 乳白色 乳白色 肉灰褐色	タテハケ(9/2.7) ナナメハケ(16/3.5)	台形	中央段 半円形	径41cm (20%) 大型・段幅12～14cm 最上位凸帯をまたぐ上下に 赤彩痕 1.8kg	A 1 か 2 類
4 2	11 1区	円筒 口縁部	細礫やや多 チ・石・酸	軟質 粉っぽい 淡褐色	ナナメハケ(13/3.6) 斜位指ナデ後 ナナメハケ(11/2.7)	台形	上から 2段目 円形	口径39cm (30%) 中型・薄手・内外に接合痕 口縁部外面にヘラ記号∩ 1.5kg	C 1 類
4 3	11 1区	円筒 胴部			タテハケ(10/2.6) ナナメハケ(10/2.0)	M形	下から 3段目 円形	最大34cm・段幅10～13cm 内面接合痕ほぼ残存 2.5kg	B 2 類
4 4	11 3区	円筒 底部	粗砂やや多 凝・チ・酸・長	軟質 著しく粉っぽい 淡橙褐色 暗オリーブ灰色 肉も同	タテハケ(9/2.0) ナナメハケ(8/1.8)			底部径28cm (30%) 0.4kg	B 2 類
4 5	11 3区	円筒 口縁部	粗砂多量 チ・石・長・凝・	軟質・粉っぽい 橙褐色 肉茶褐色	下段タテハケ・上段ナナ メハケ (16/3.3) ナナメハケ (19/4.3)	M形	上から 2段目 不正円形	口径34.0cm (50%) 凸帯の少し上に乾燥単位 2.2kg	C 2 類
4 6	11 1区	朝顔 口縁部	細砂少量 精選 チ・酸・凝・角	良好・堅緻 くすんだ赤褐色	ナナメハケ・タテハケ交 互(11/2.4) 頸部ヨコハケ・段部ナナ メハケ(13/2.6)	三角形		口径62cm(70%) 大型朝顔形円筒 口縁段部A技法 7.5kg	B 1 類 朝
4 7	11 西側内堀	円筒 胴部	粗砂やや多 チ・石・角・酸・ 凝	軟質 粉っぽい 淡オリーブ灰色 全体的に白っぽい	タテハケ(13/3.2) ナナメハケ	台形		最大35cm (40%) 中型 段幅9～11cm 赤彩残存	A 3 類
4 8	11 西側内堀	円筒 口縁部	小礫粗砂やや 多 チ・凝・石・長・ 角・酸	軟質・粉っぽい 黄色味を帯びた 乳白色 肉黒色	タテハケ(12/2.8) ナナメハケ (30/6.6)			口径46.5cm (25%) 大型・厚手 内面丁寧に接合痕ほぼなし 幅広の工具使用・1.0kg	A 1 か 2 類

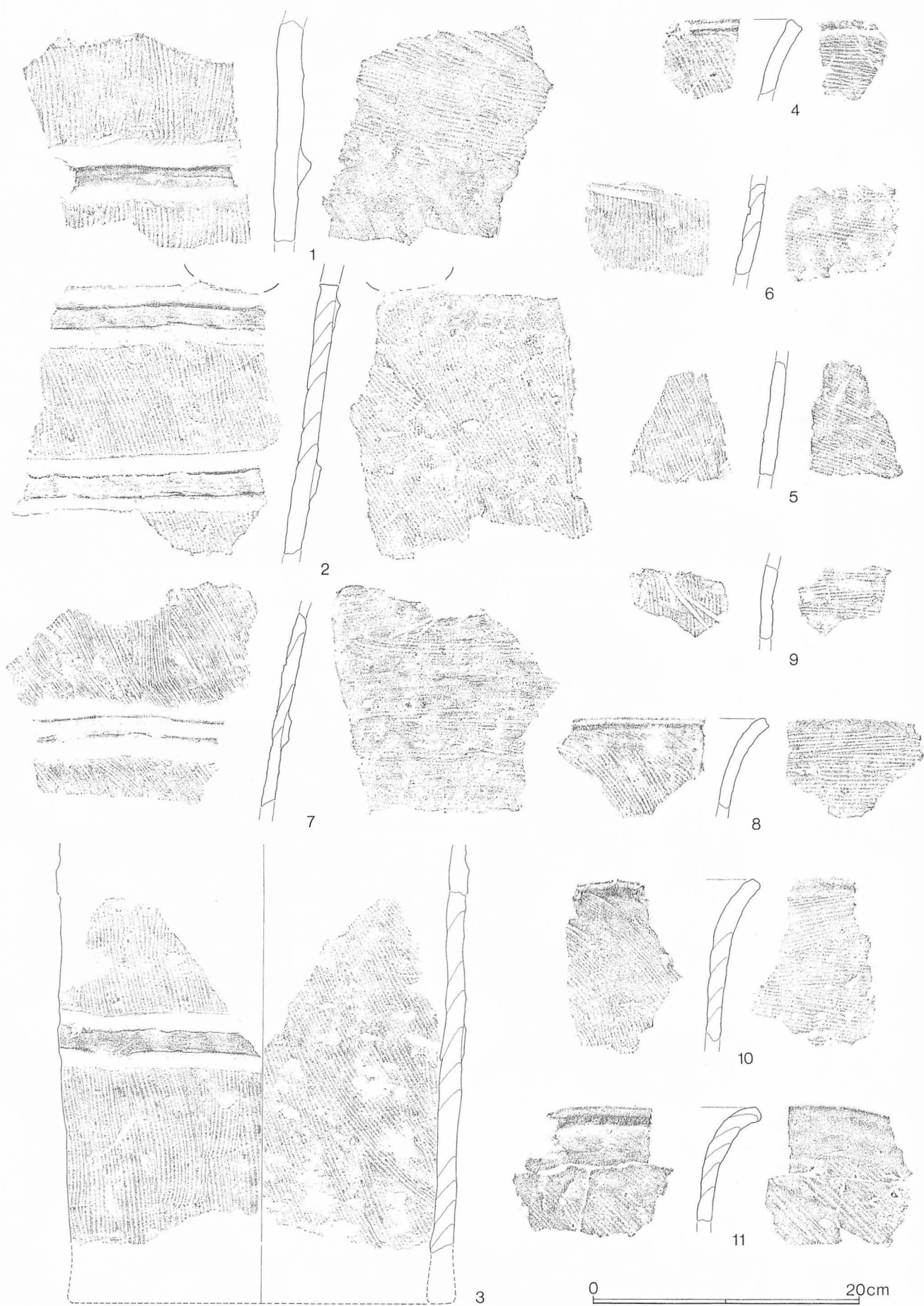
4 9	11 4区	朝顔 肩部～ 頸部	細砂少量 チ・凝・石・長・ 酸・角	くすんだ橙褐色 肉灰褐色	ナナメハケ (11/2. 4) ナナメハケ (8/2. 4) 肩部ヨコハケ	肩部下M 形 頸部 三角形	円筒部 最上段 円形	最大29cm (60%) 中型赤色系朝顔形円筒 透孔上部に指掛け痕 3. 0kg	C 2 類 朝
5 0	11 西側内堀	円筒 口縁部	細砂少量 チ・石・角・長・ 凝・酸	良好・堅緻 黄色味を帯びた 灰白色 肉黒色	タデハケ (13/2. 8) ヨコハケ (10/1. 9)	台形	上から 3 段目 半円形	口径39cm (35%) やや厚手・中型 外面全面に暗赤色彩色 上から2 段目に×状ヘラ記 号・3. 1kg	A 3 類
5 1	11 西側内堀	円筒 胴部	細礫粗砂やや 多 チ・角・石・酸・ 凝	やや軟質 粉っぽい 淡黄灰色 肉黒色	タデハケ (15/2. 9) ユビナデ後 ナナメハケ (17/3. 6)	台形	下の段 半円形	径43. 5cm (25%) 大型 赤彩の痕跡微かに残存 0. 9kg	A 1 類
5 2	15 工事	朝顔 頸部	小礫粗砂やや 多 チ・石・長・輝・ 酸	良好・堅緻 赤茶褐色	ナナメハケ後 タデハケ (7/2. 1) ヨコハケ (8/2. 4)	M形		40%・0. 4kg	D 2 類 朝
5 3	11 西側内堀	円筒 口縁部	小礫粗砂多 チ・石・長・凝・ 酸	やや軟質 粉っぽい 淡乳白色 肉黒色	タデハケ (16/4. 0) ナナメハケ (9/2. 2)	台形	3・4 段 目 半円形	外面全面に赤茶褐色の彩色 痕残存 (50%) 10. 0kg	A 1 類
5 4	14 試掘	円筒 低部	精選 細砂少量 チ・石・長・凝・ 酸	良好・堅緻 黄色味を帯びた 乳白色 肉黒色	タデハケ (9/4. 5) ユビナデ	M形	第2 段 半円形	30% 1. 9kg	A 3 類

立ち上がり部より少し内側の堀底付近からはこのほかの類型であるA4類の3条凸帯円筒とC1類の朝顔形円筒とが出土しており、埴輪列中にこれらも加わっていた可能性が高い。なお、左側の内堀覆土は水堀を復原した際に失われているので、当初のA類からなる埴輪列が崩落した後に、どのような埴輪が再設置されたか不明である。C1類の朝顔形埴輪はそのうちの1個体となろう。

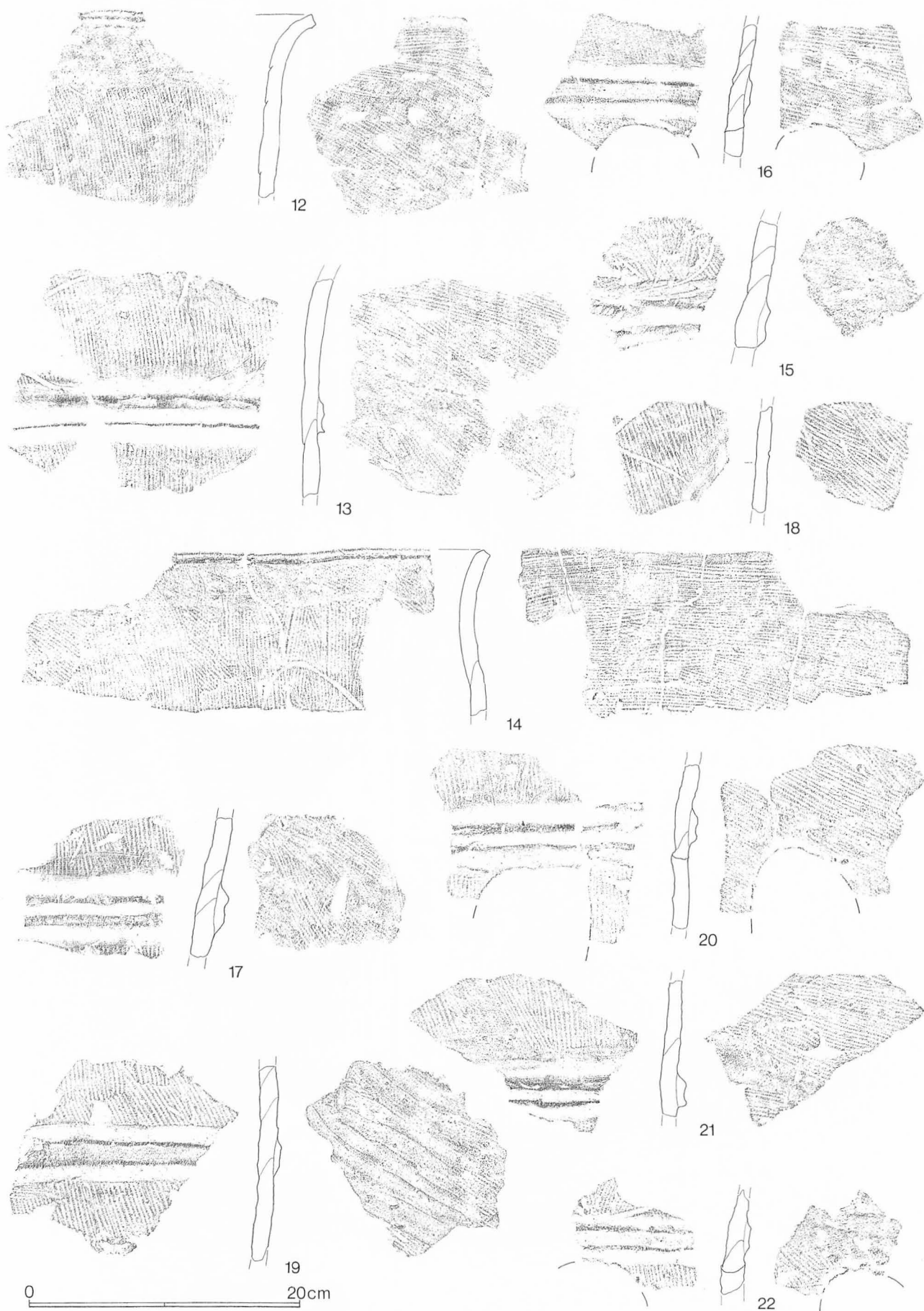
②後円部東側の墳丘は地滑りを起こしており、墳丘に接する内堀と外堀はF.A. 降下前に最初の堀底浚いが行われたと推測された。墳丘裾付近から出土した円筒埴輪はD1類4個体、D2類1個体、D3類4個体で、D類のみで構成されていた。これは墳丘に最終的に設置された円筒埴輪がD類であったことを示している。墳丘基壇部、中段、墳頂部の合計3埴輪列のものが混在しているとみられる。

③中堤の右手前隅角付近では外側の埴輪列にA4類、B1類朝顔形円筒、C1類、D1～3類が、内側の埴輪列にはA4類とB2類存在したと見られる。また造出し付近ではA3類・A4類・B2類・C1類・C2類朝顔が混在し、後円部右側中堤ではB2類・C2類・D1類・D2類・D3類が混在していた。

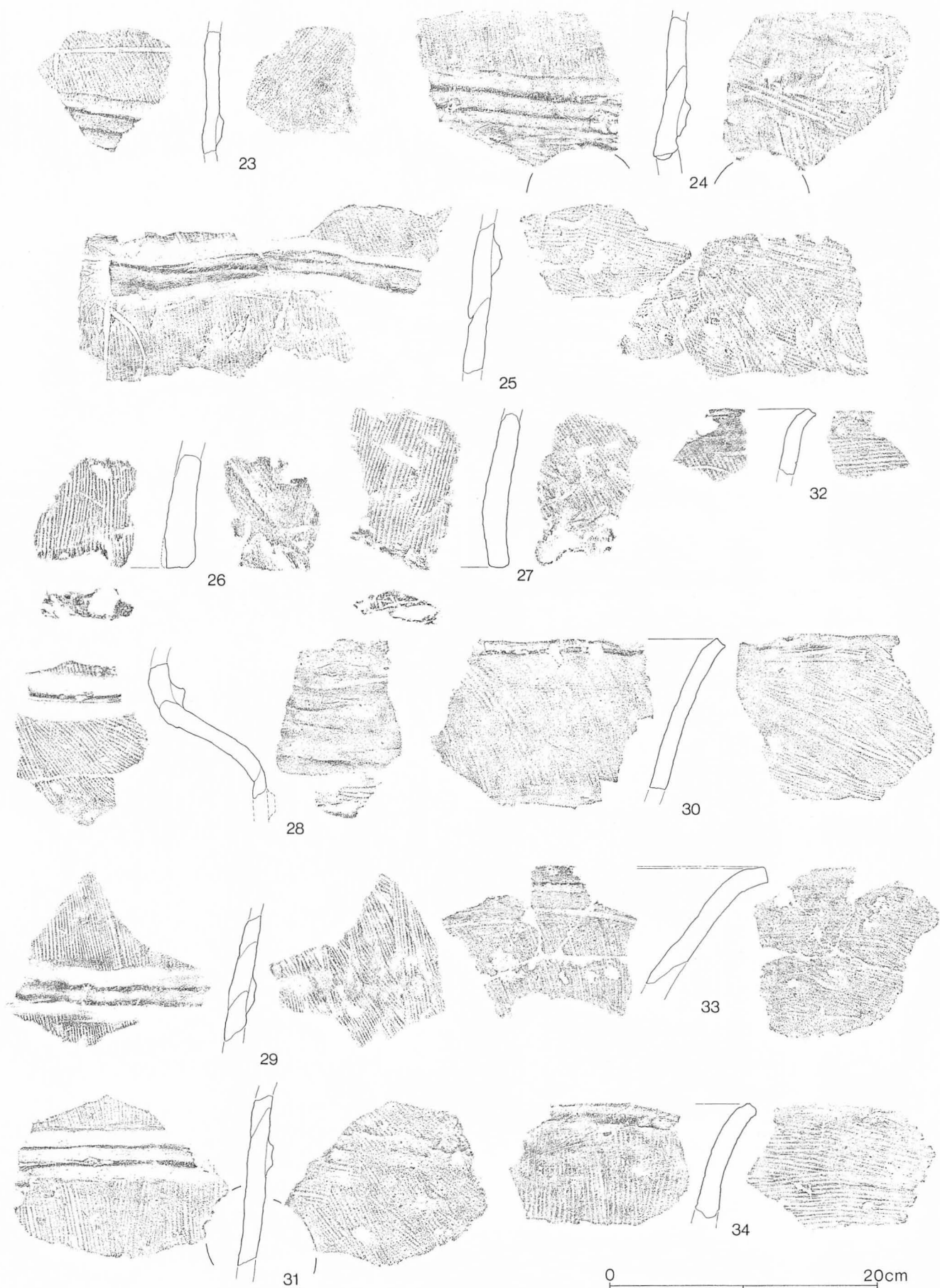
④これらの事実を総合すると、稲荷山古墳の円筒埴輪は当初A類が設置され、最終段階にはD類が再設置されている場所が存在すること。B・C類の設置時期はA類とD類の間に位置することが推測できる。また、B類はF.A.層の下から出土している。



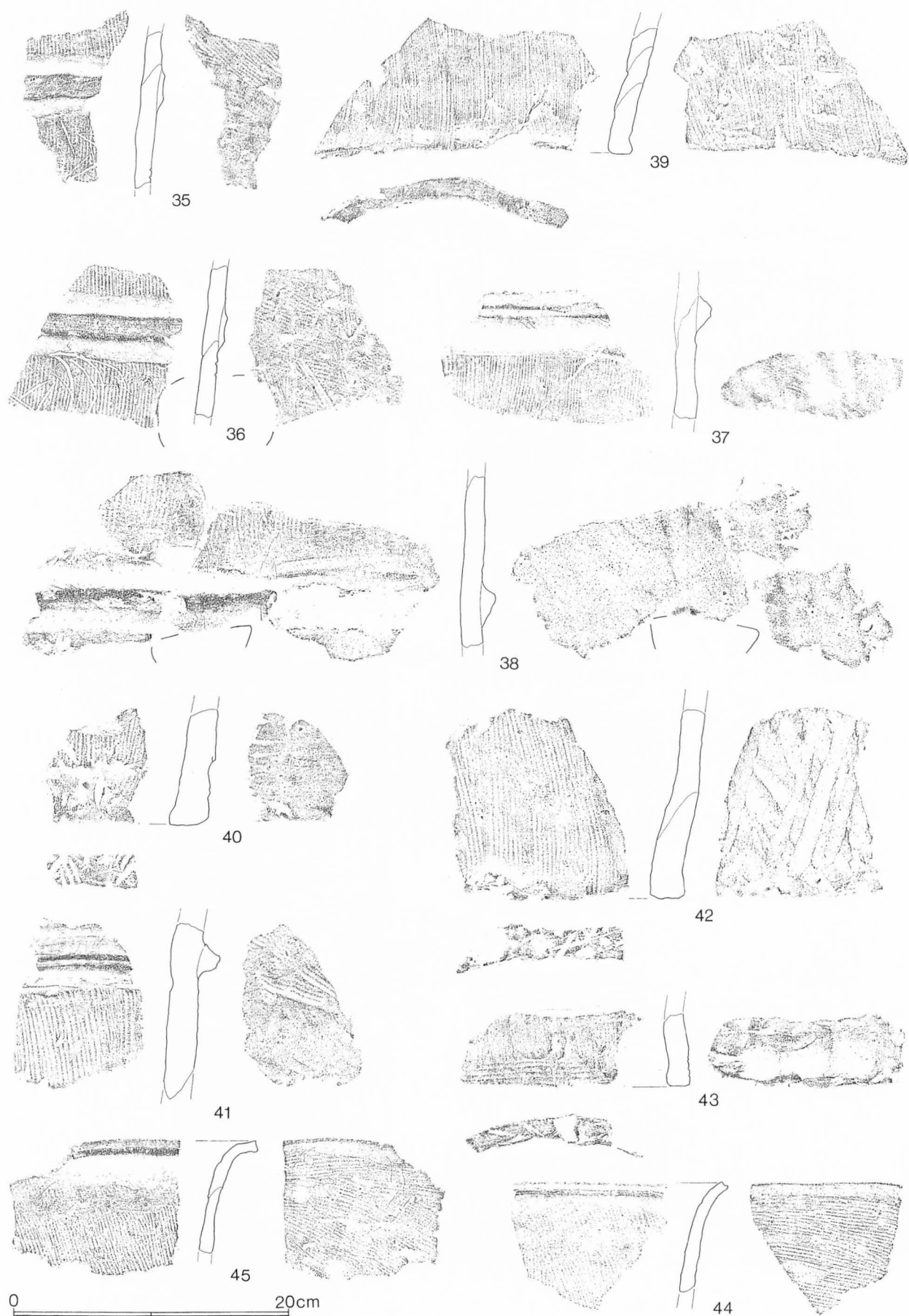
第55図 円筒埴輪拓影図(1)



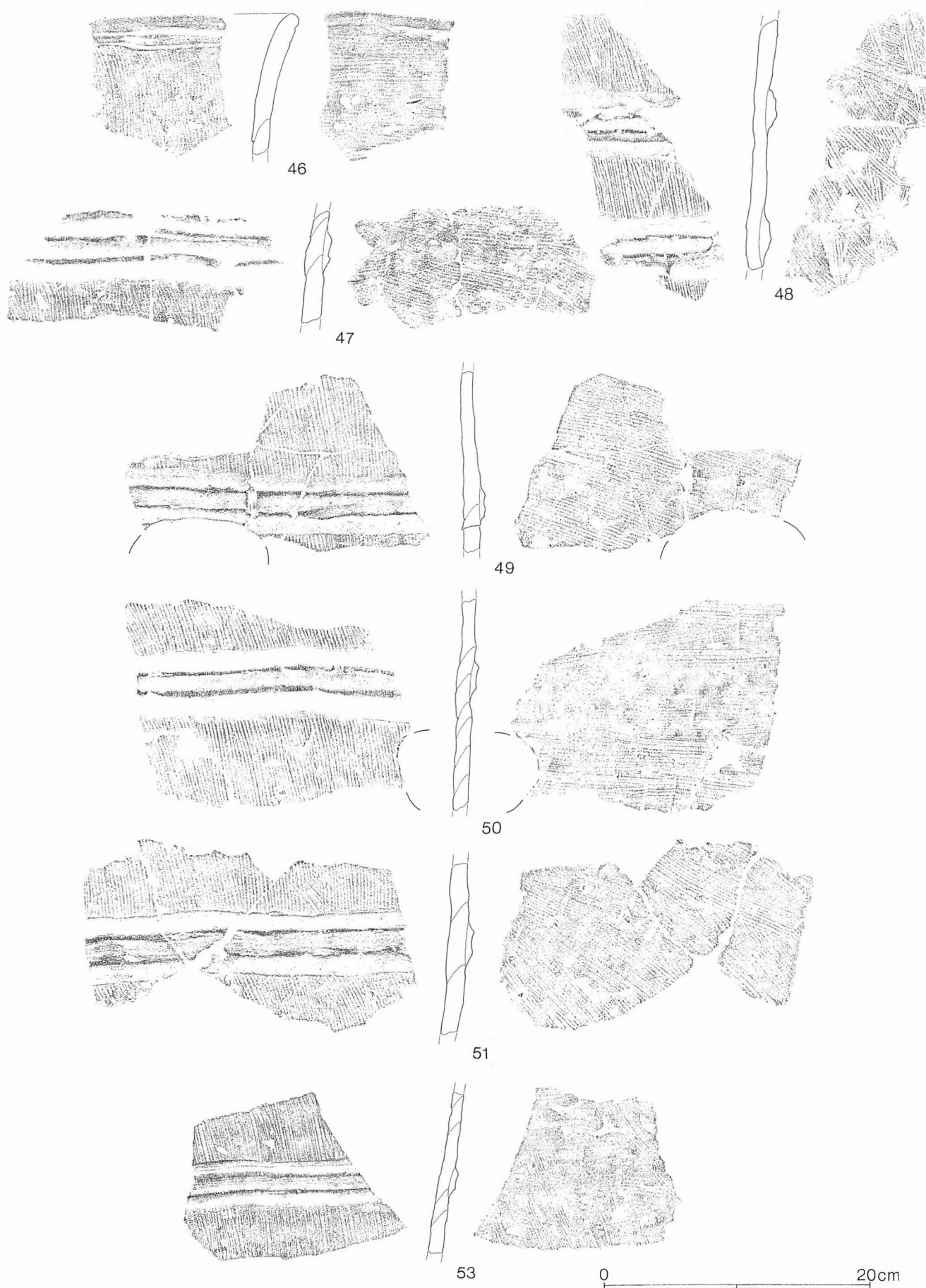
第56図 円筒埴輪拓影図(2)



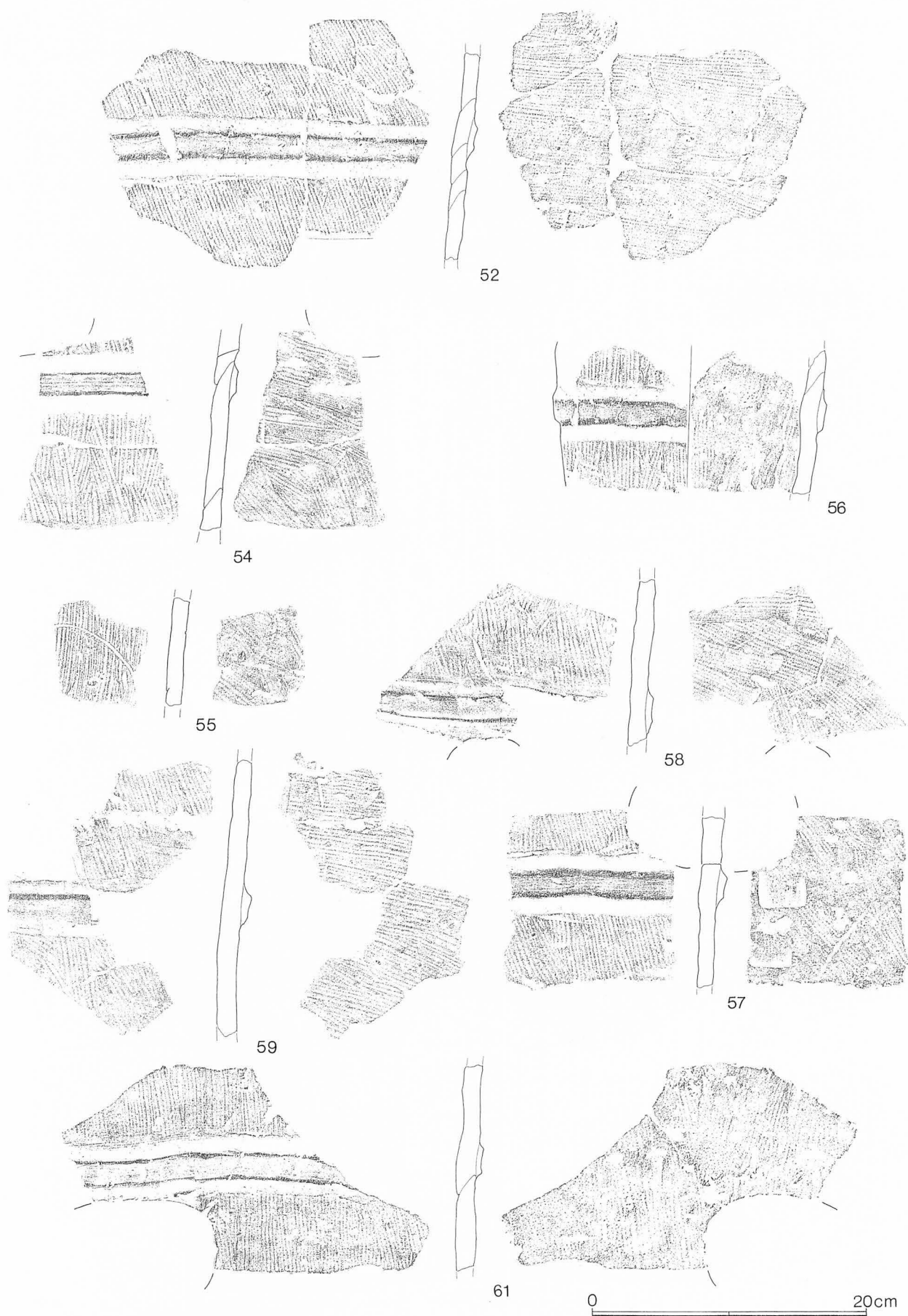
第57図 円筒埴輪拓影図(3)



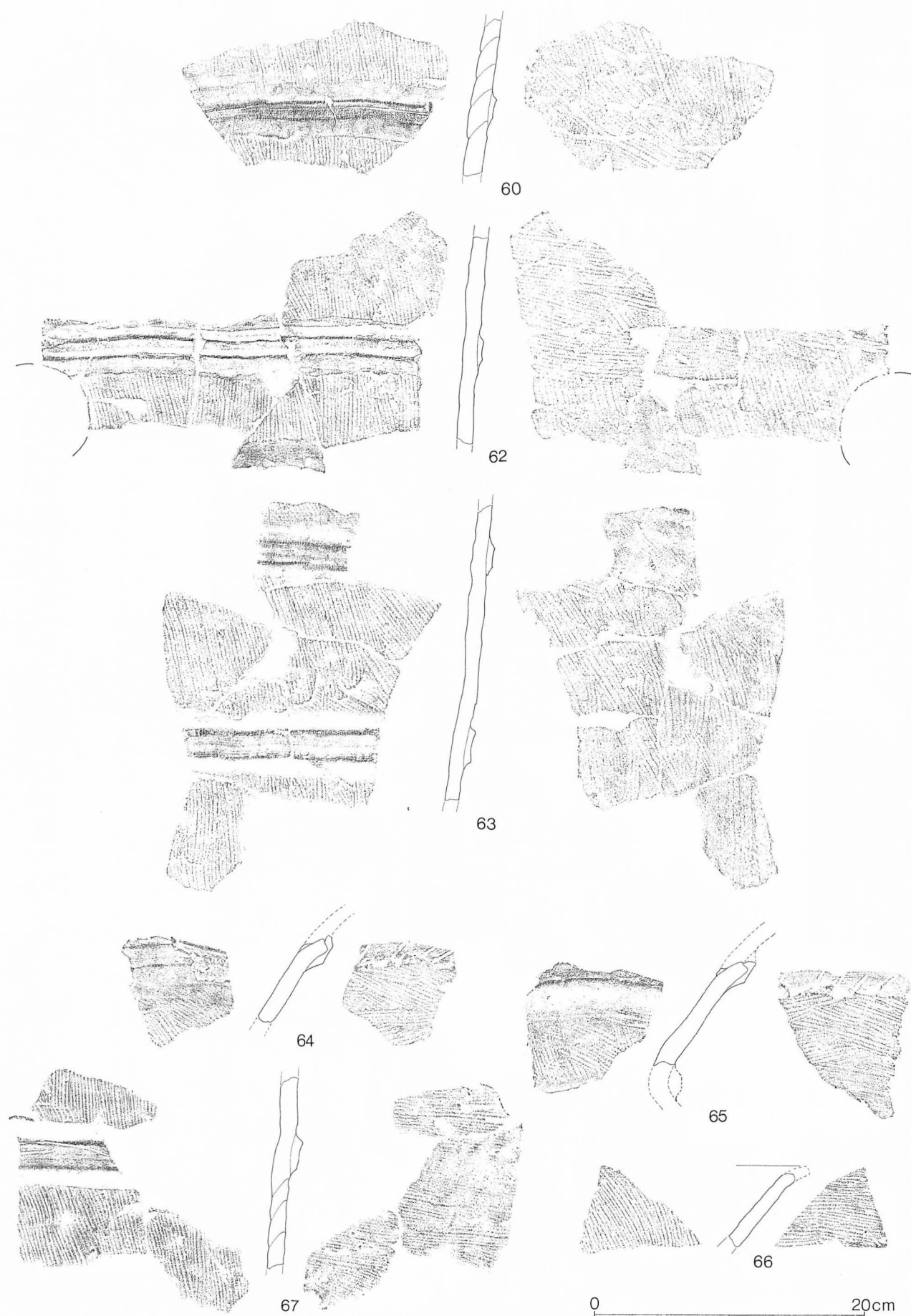
第58図 円筒埴輪拓影図(4)



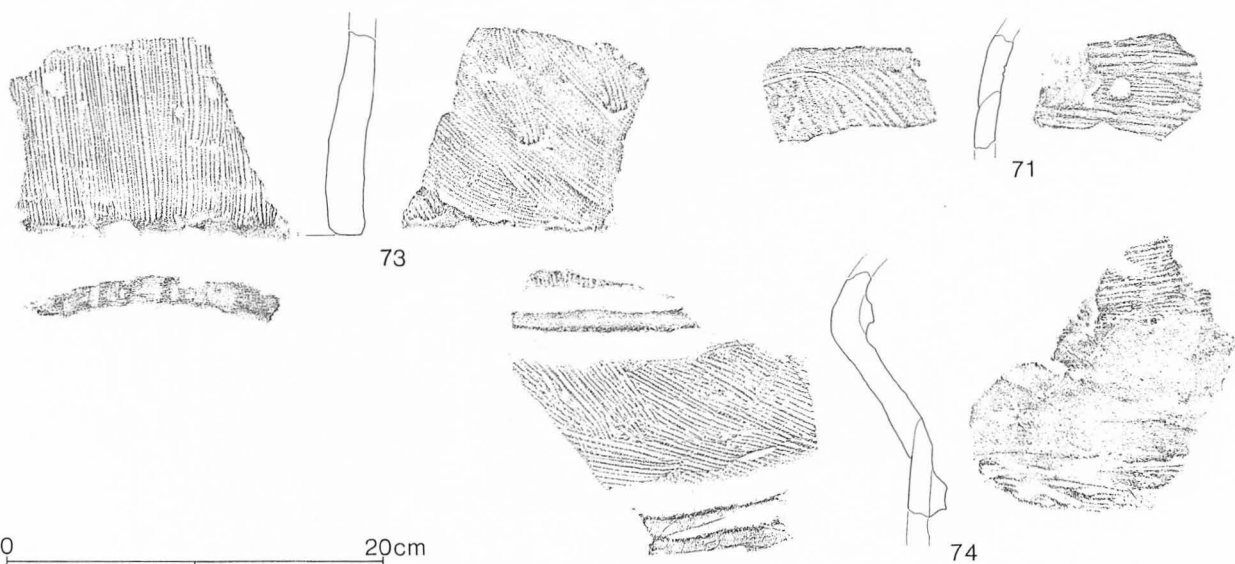
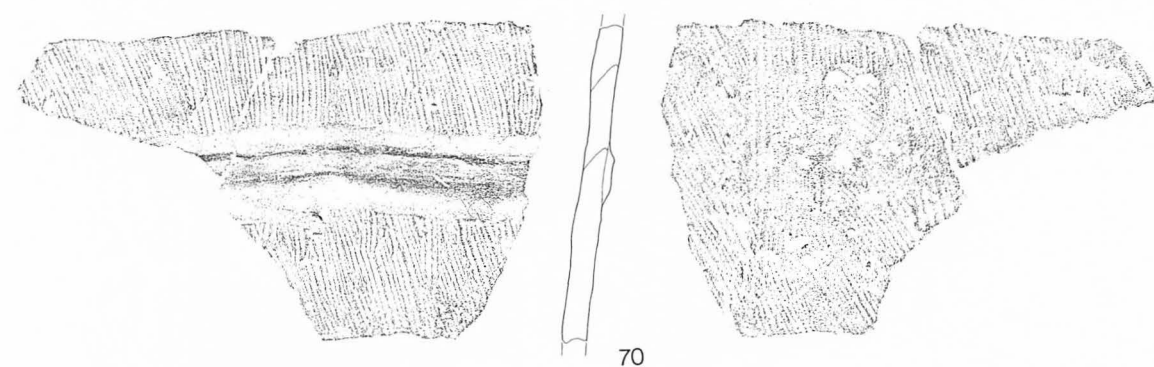
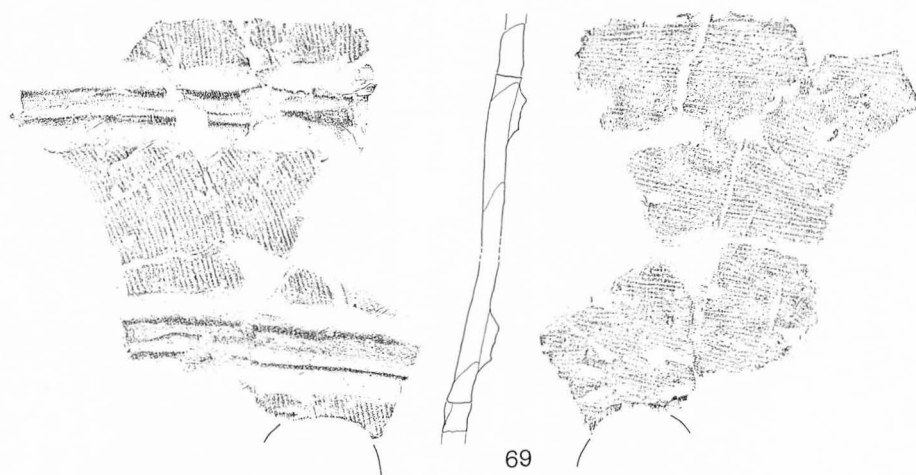
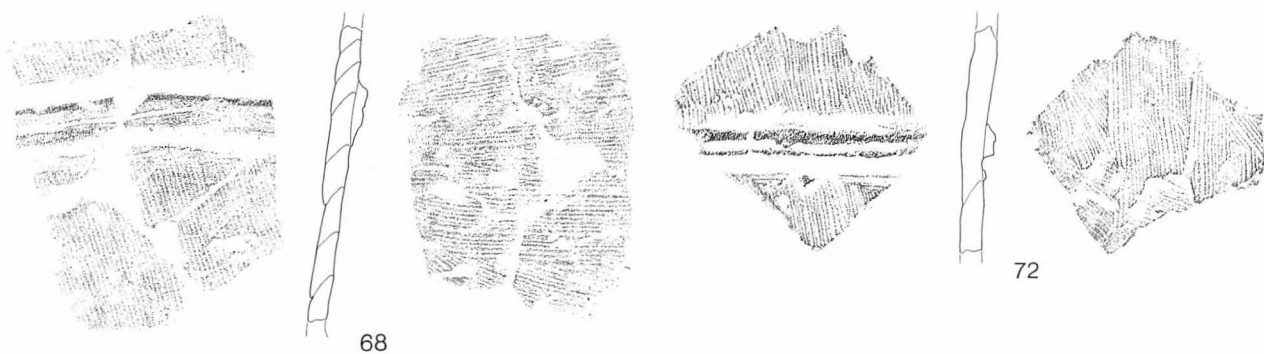
第59図 円筒埴輪拓影図(5)



第60図 円筒埴輪拓影図(6)

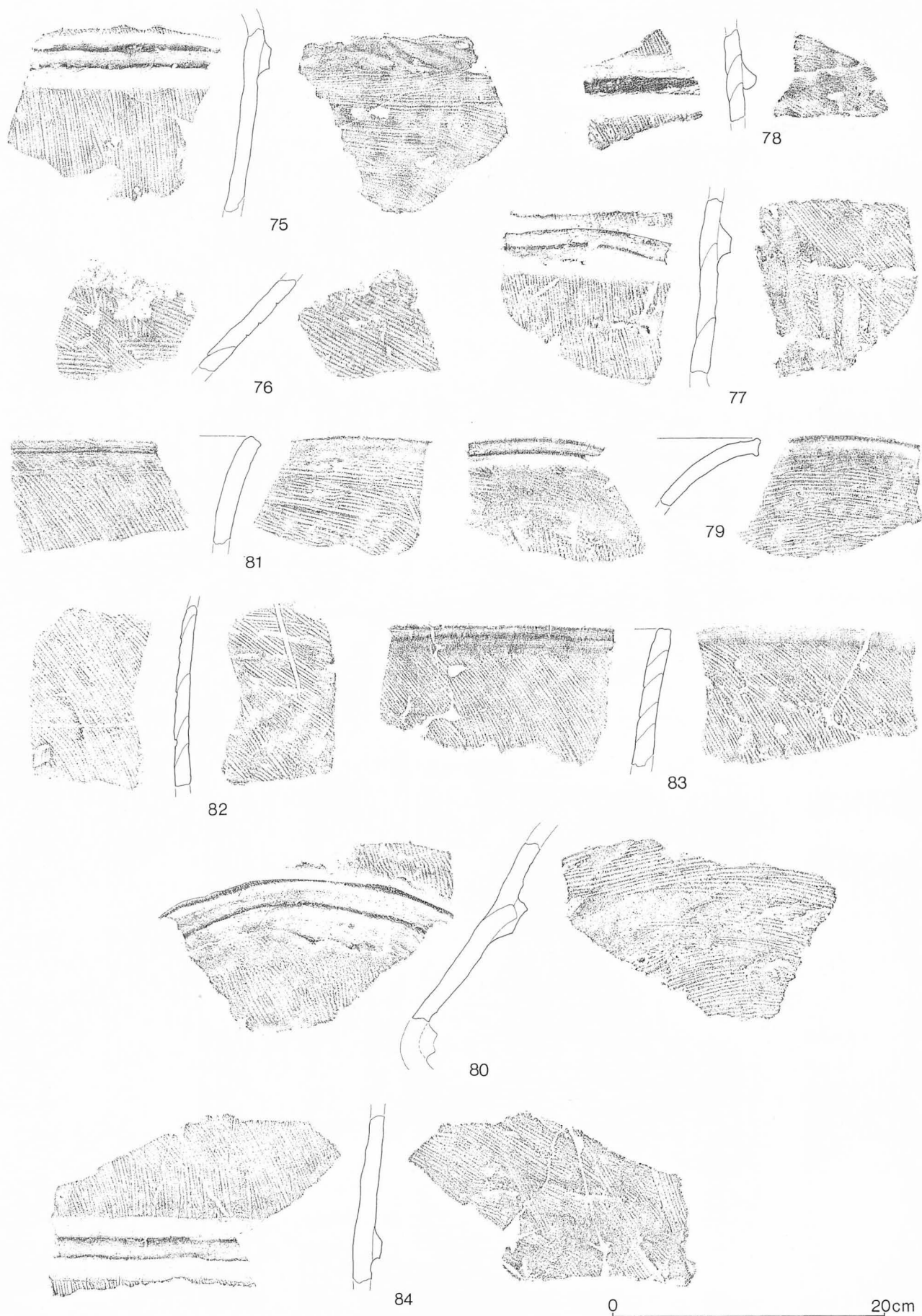


第61図 円筒埴輪拓影図(7)

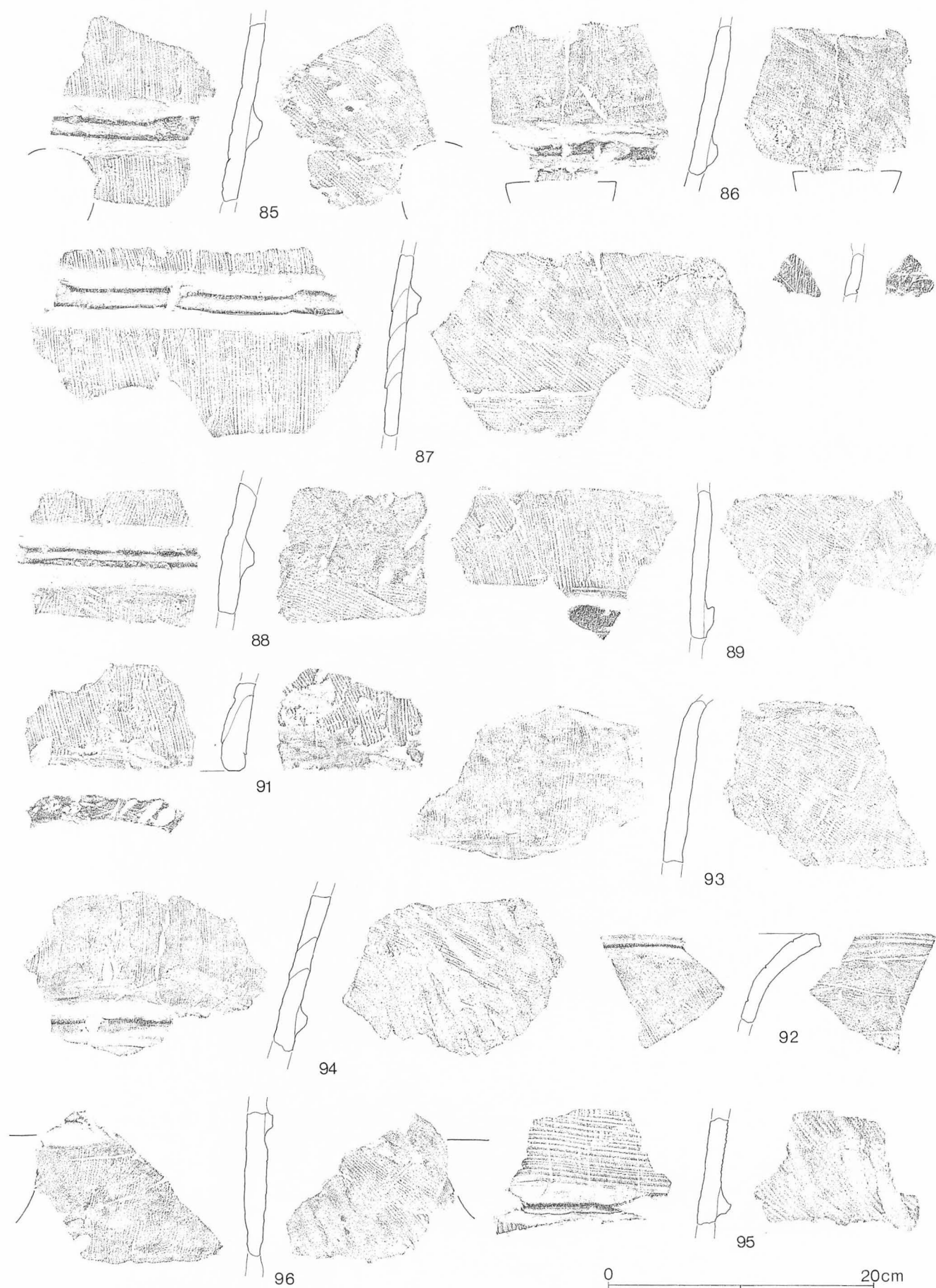


0 20cm

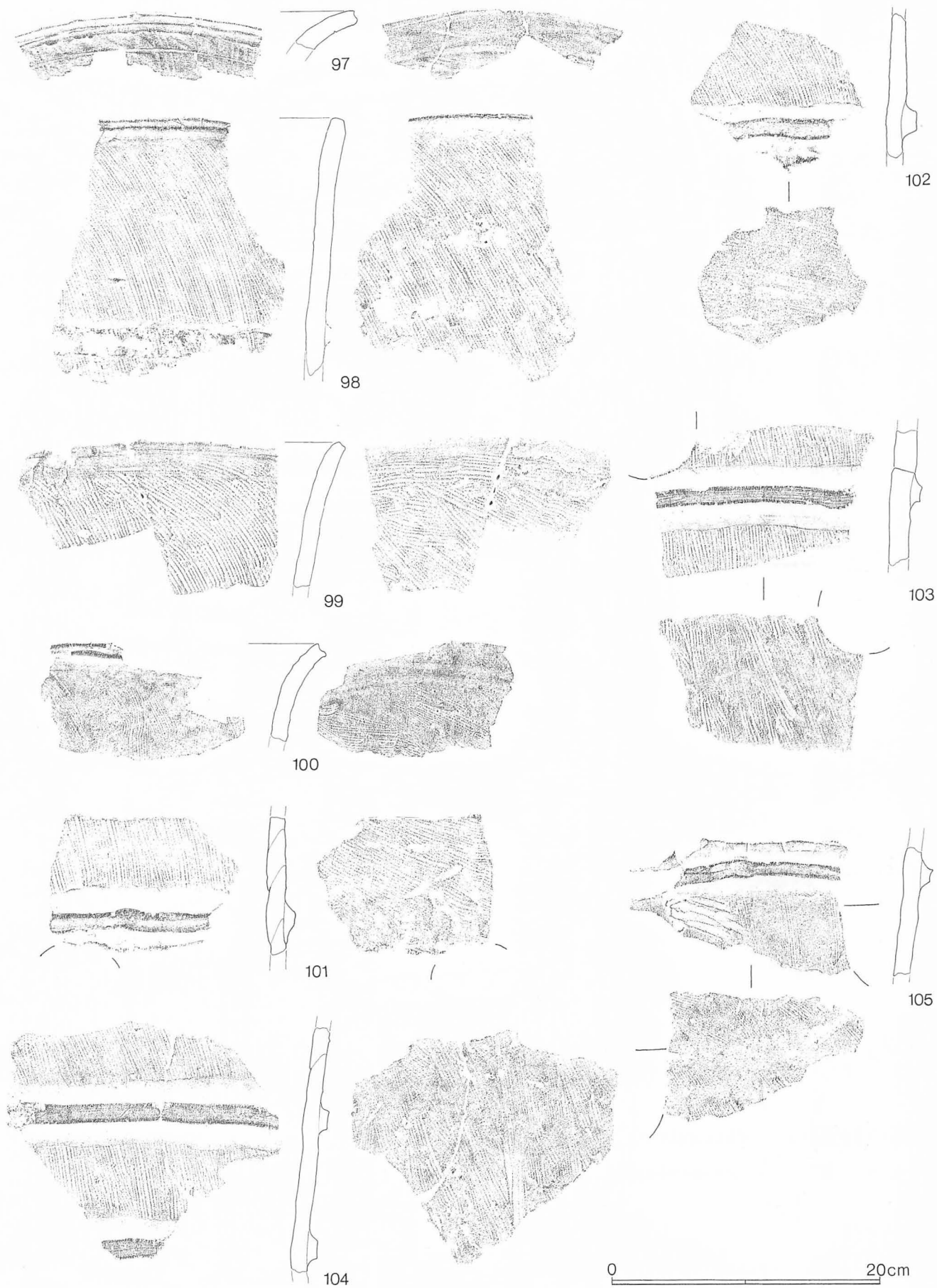
第62図 円筒埴輪拓影図(8)



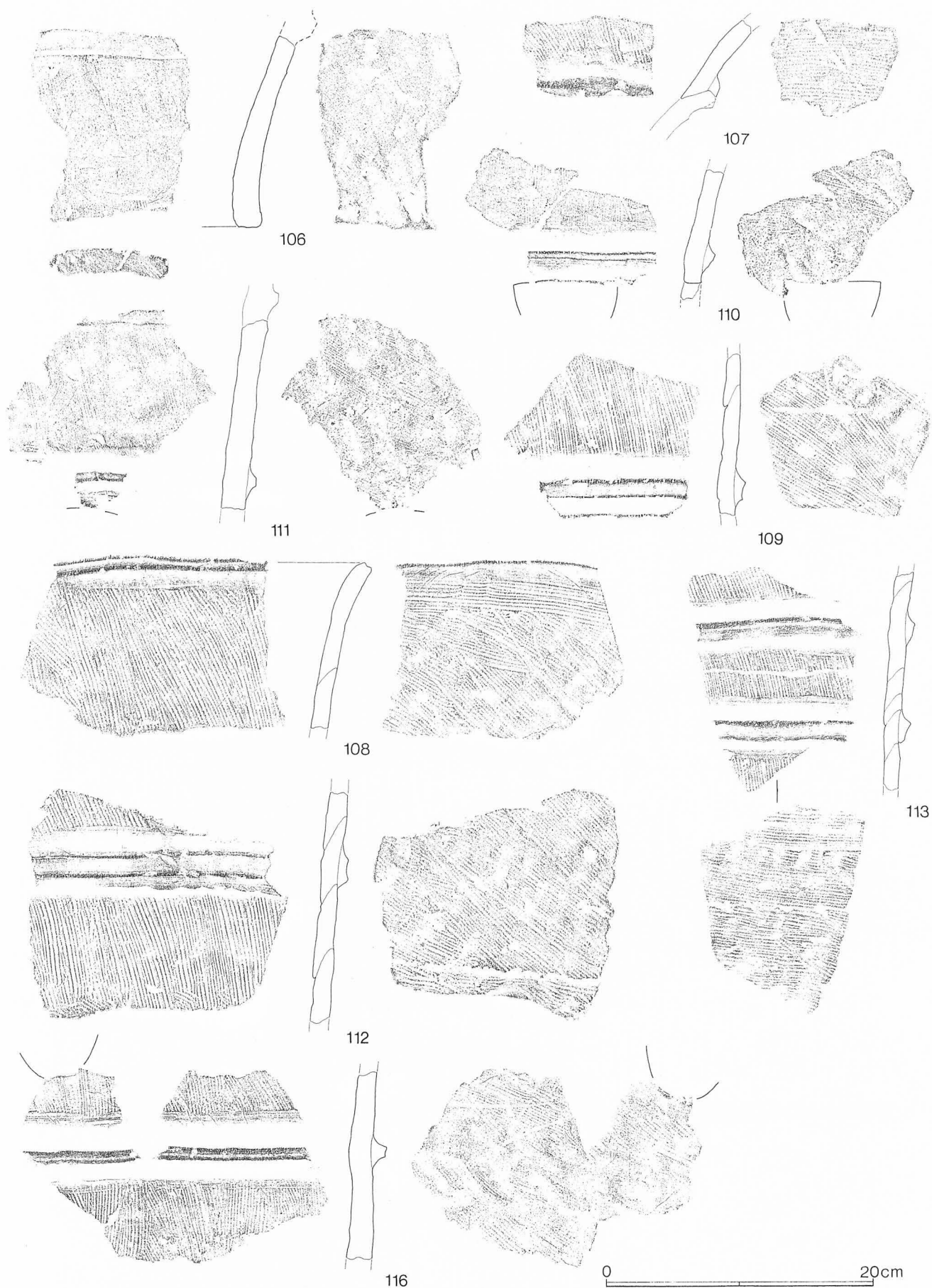
第63図 円筒埴輪拓影図(9)



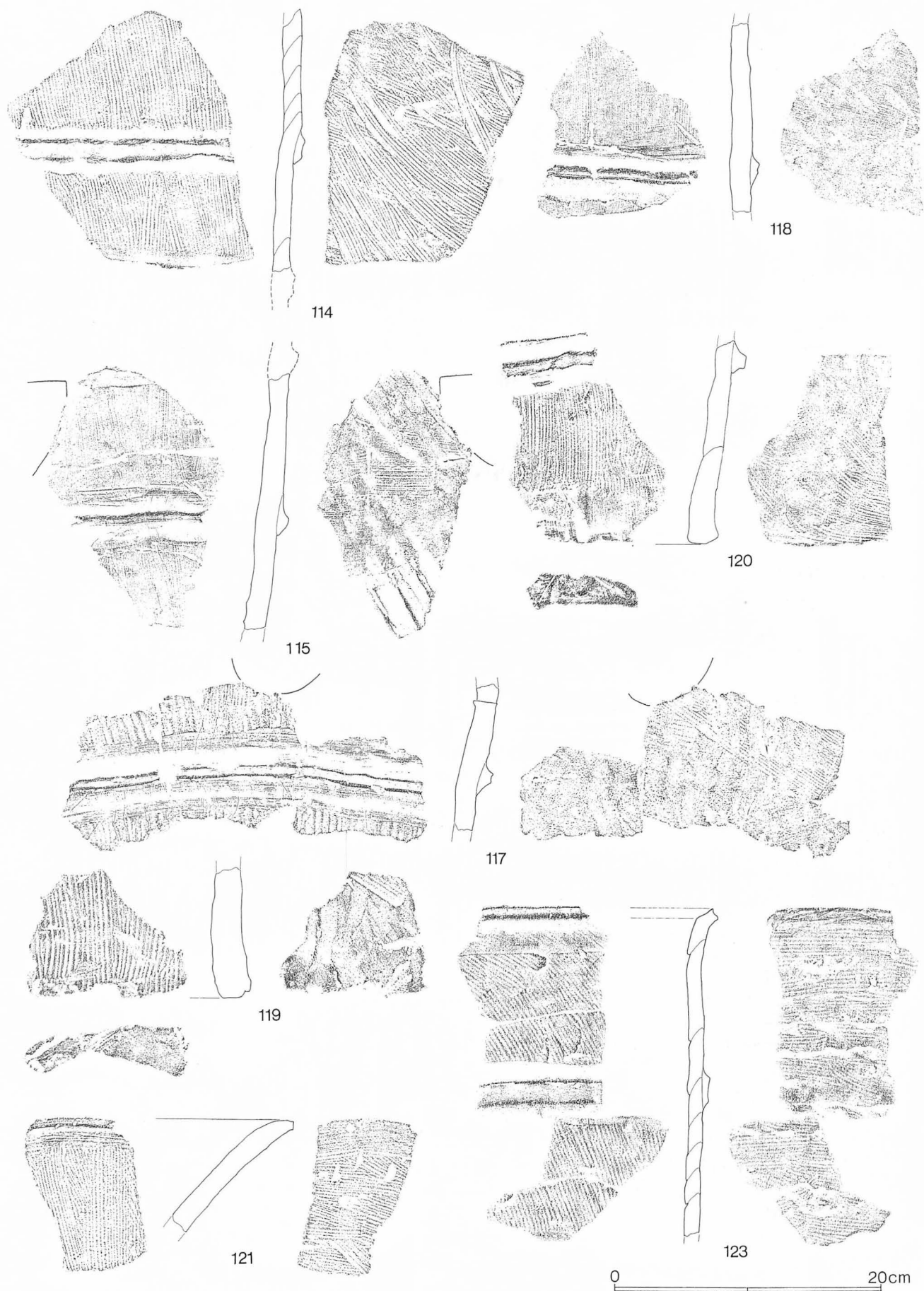
第64図 円筒埴輪拓影図(10)



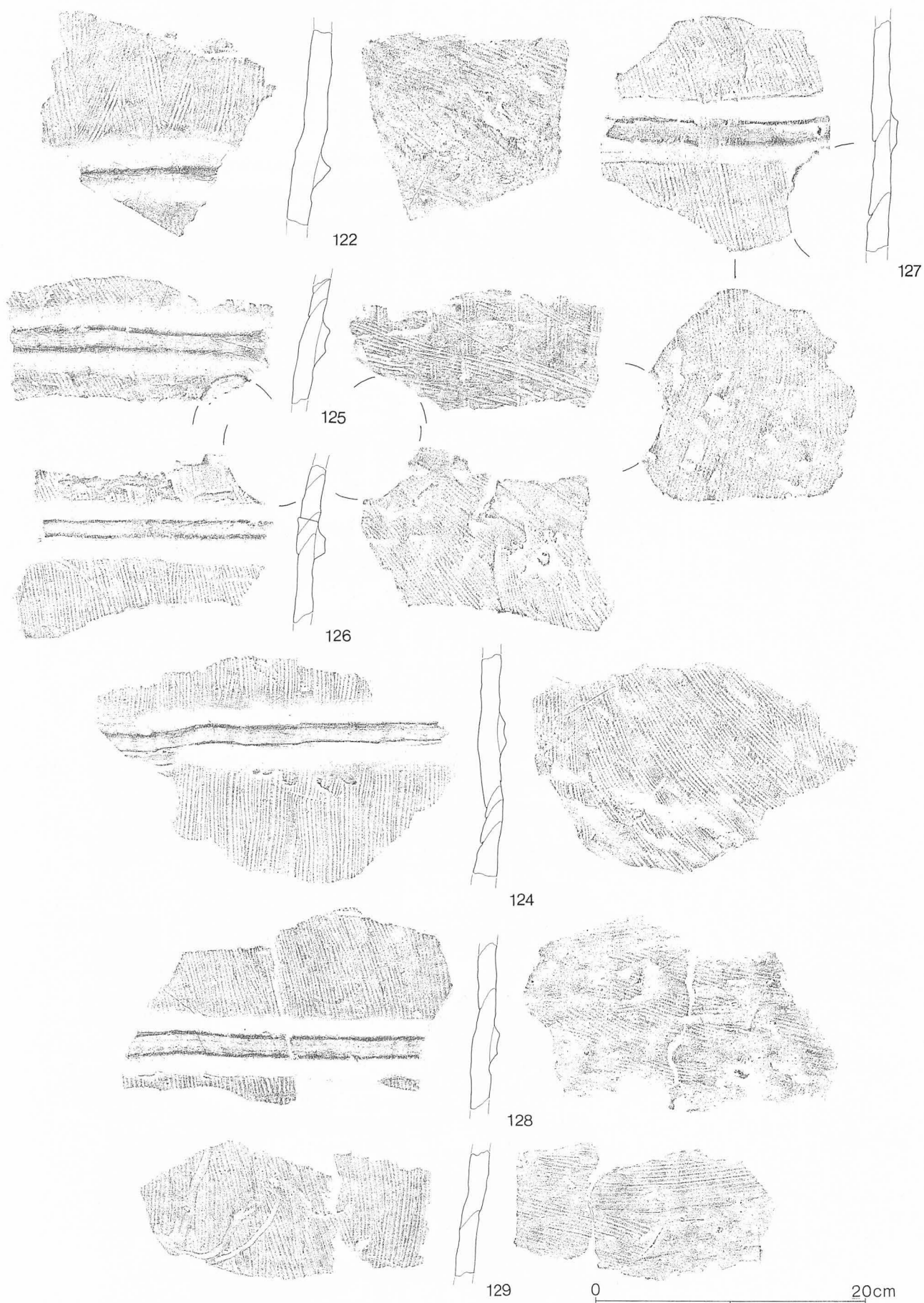
第65図 円筒埴輪拓影図(11)



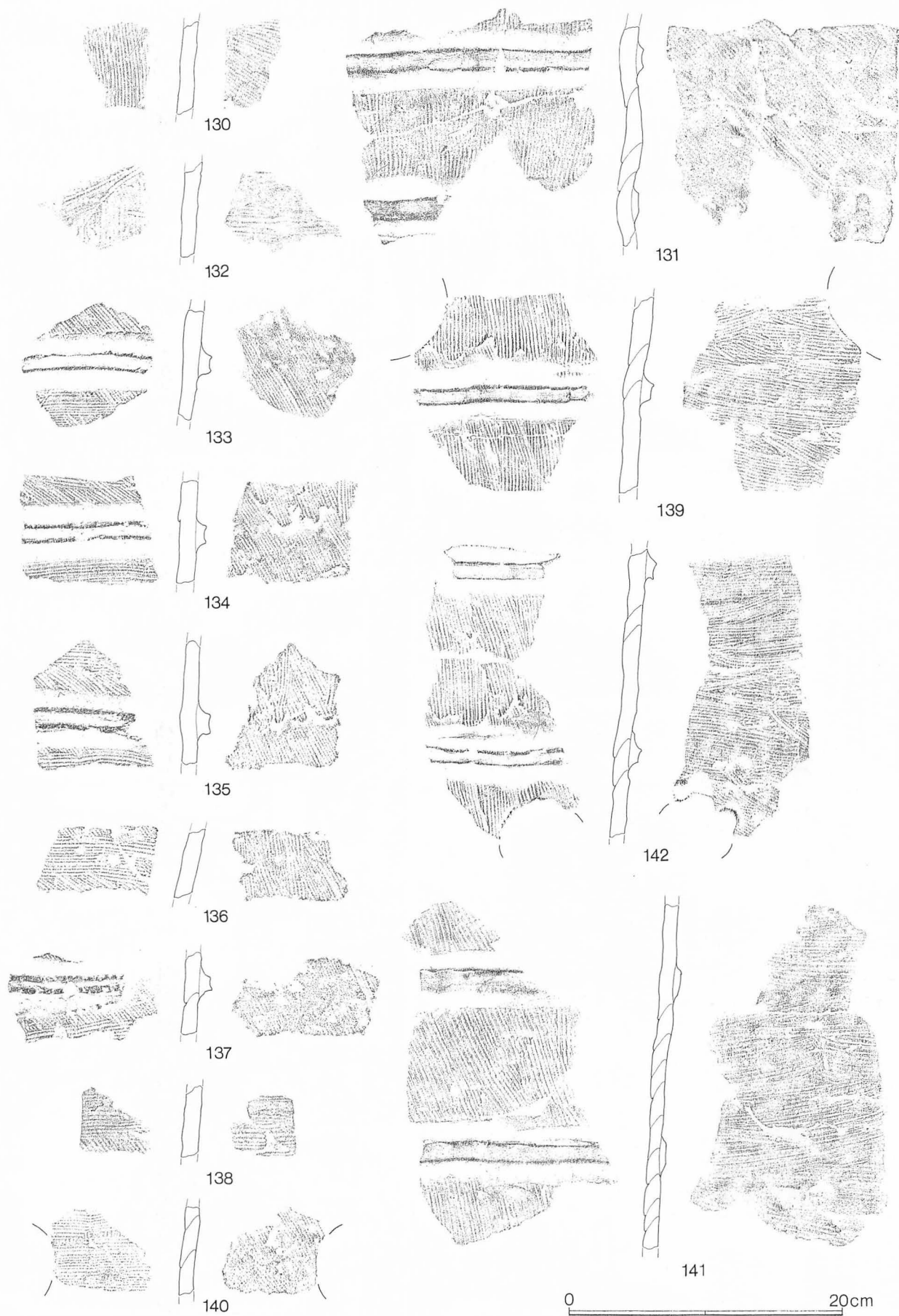
第66図 円筒埴輪拓影図(12)



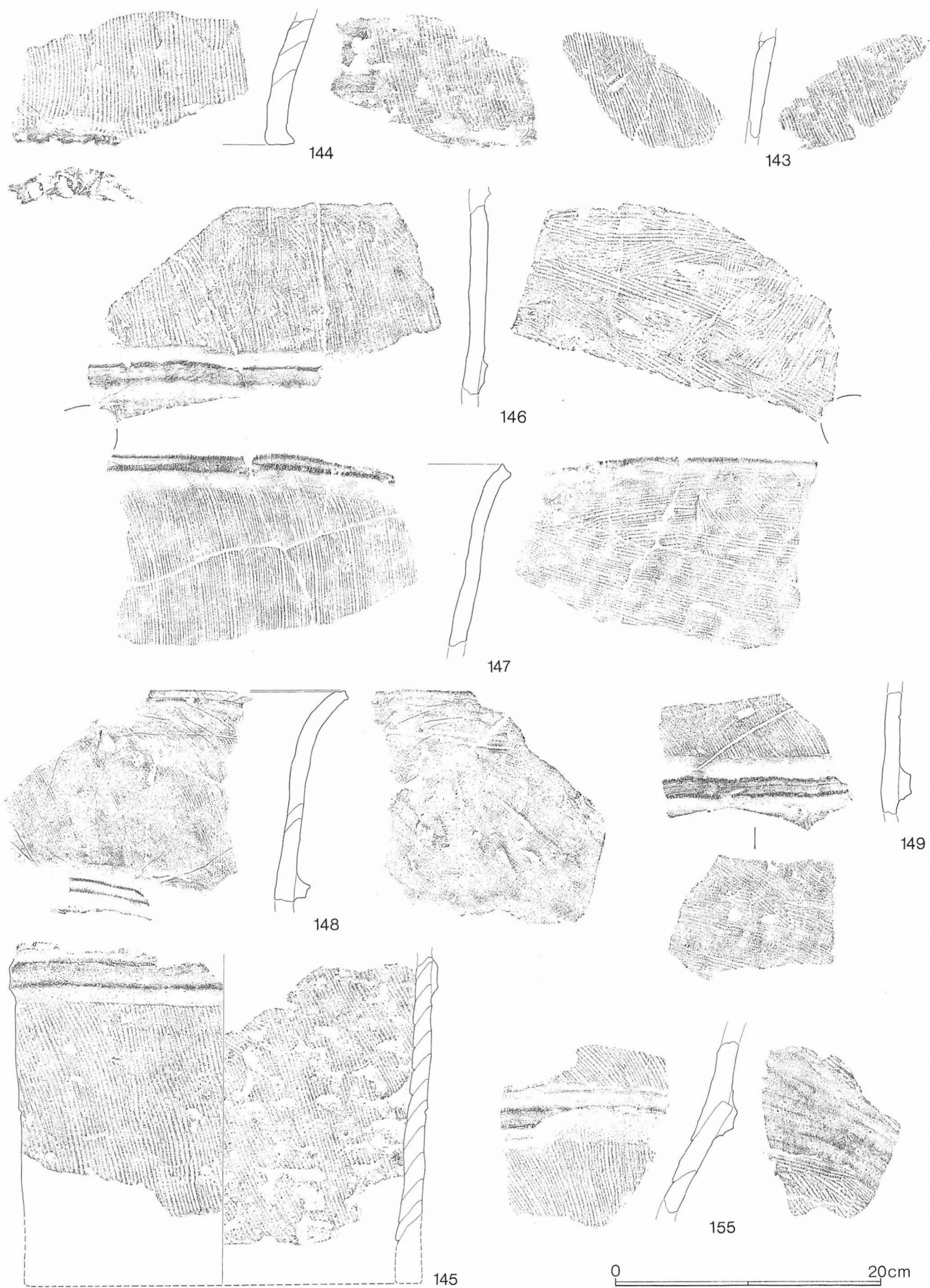
第67図 円筒埴輪拓影図(13)



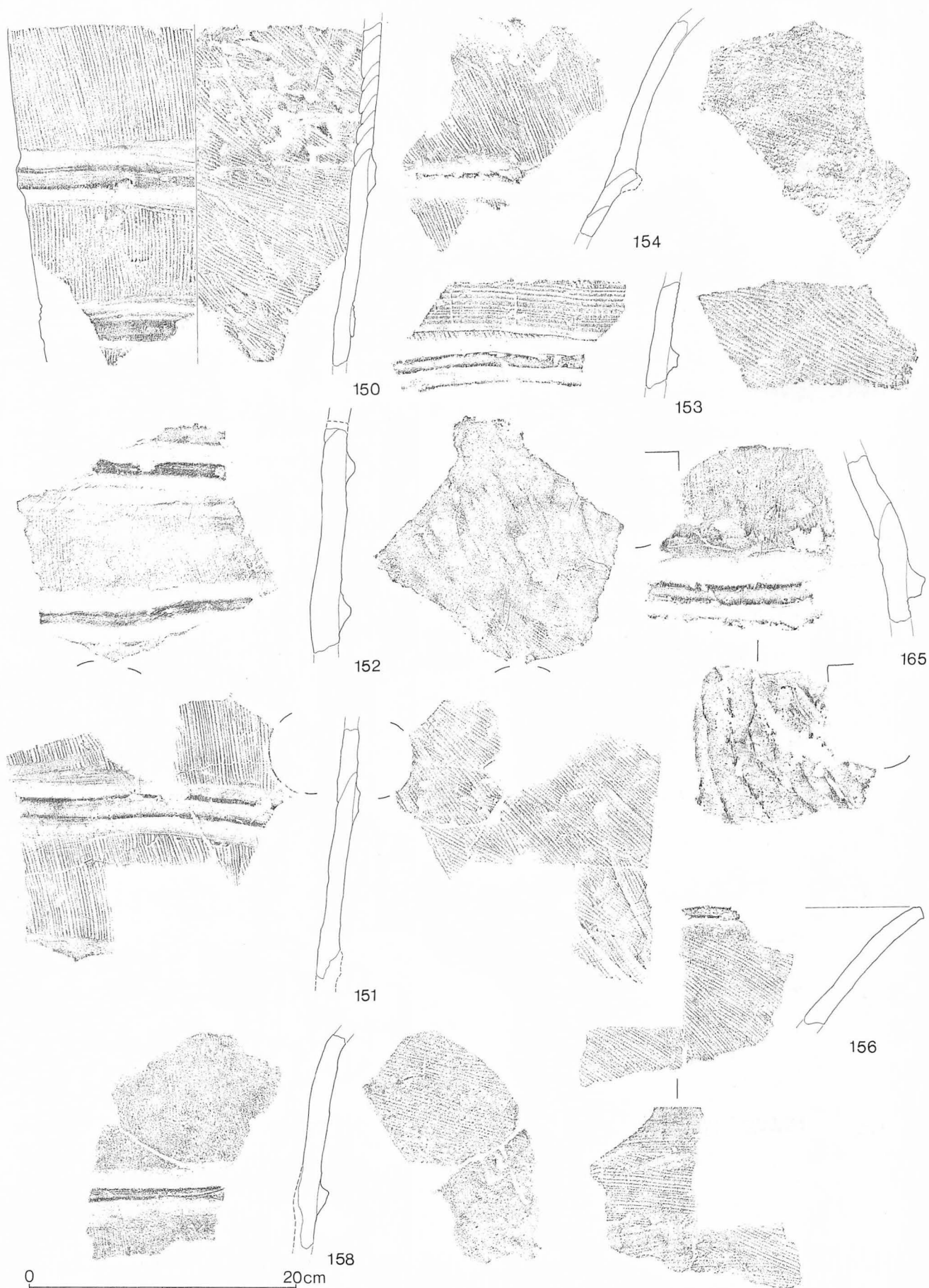
第68図 円筒埴輪拓影図(14)



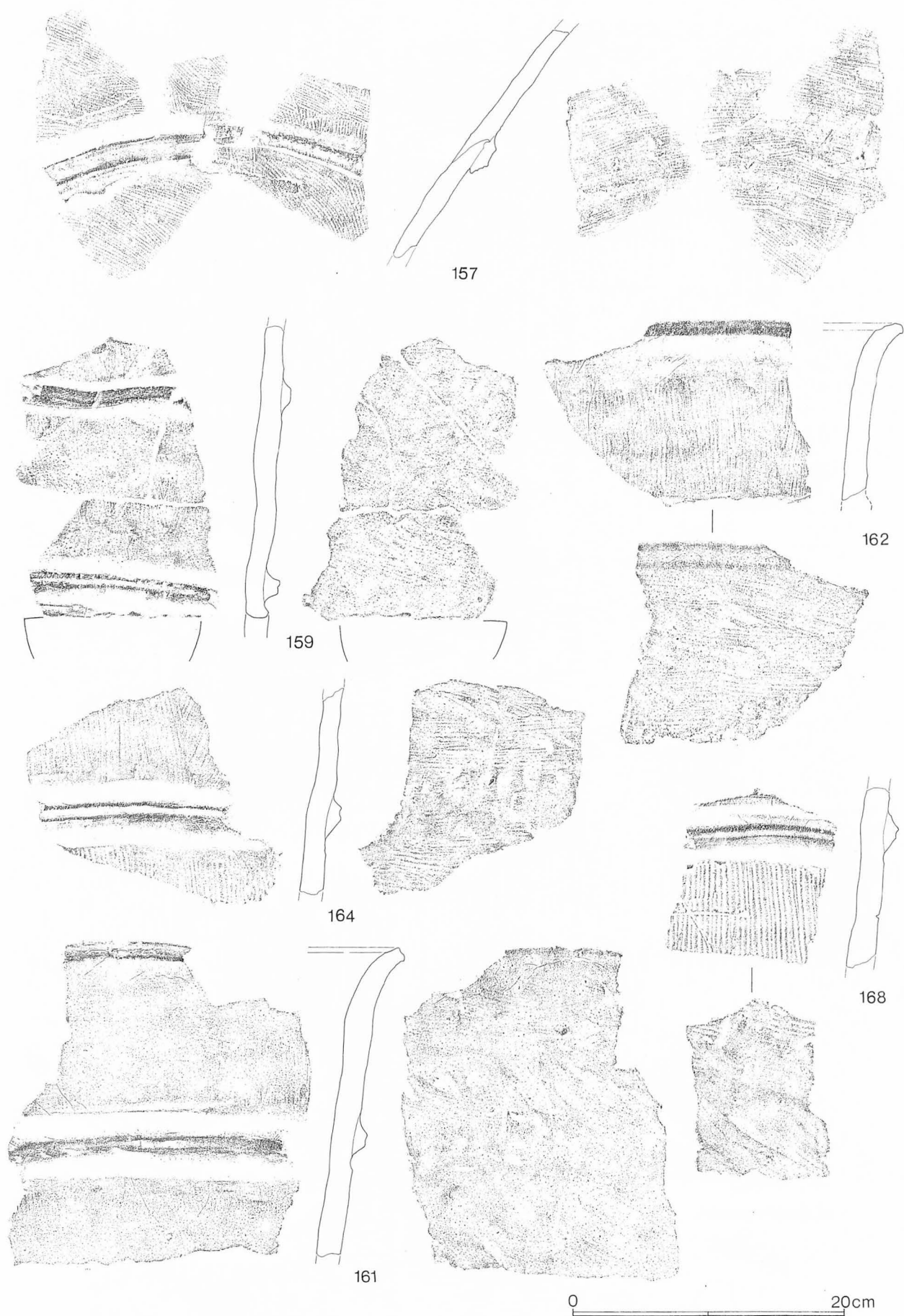
第69図 円筒埴輪拓影図(15)



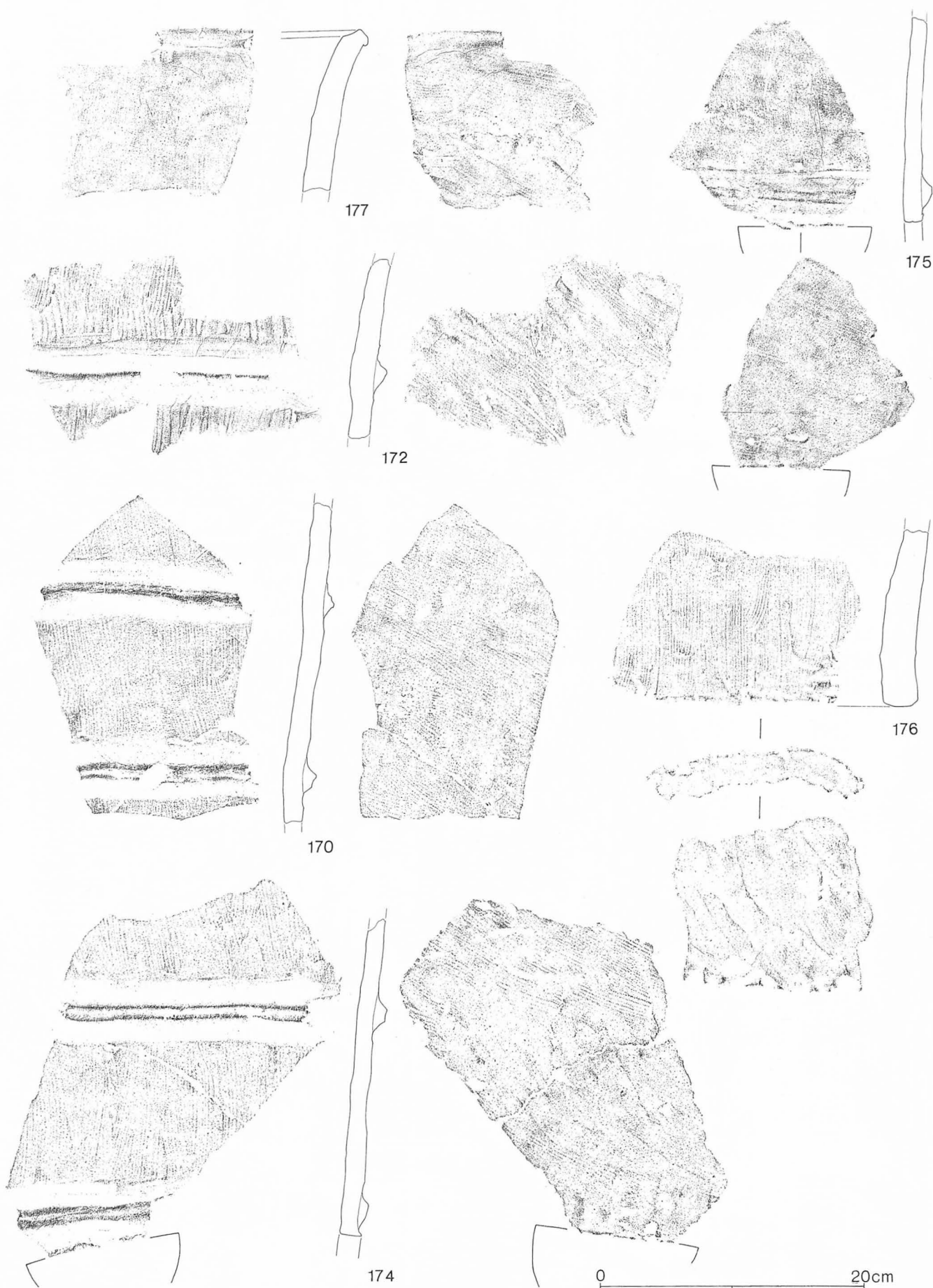
第70図 円筒埴輪拓影図(16)



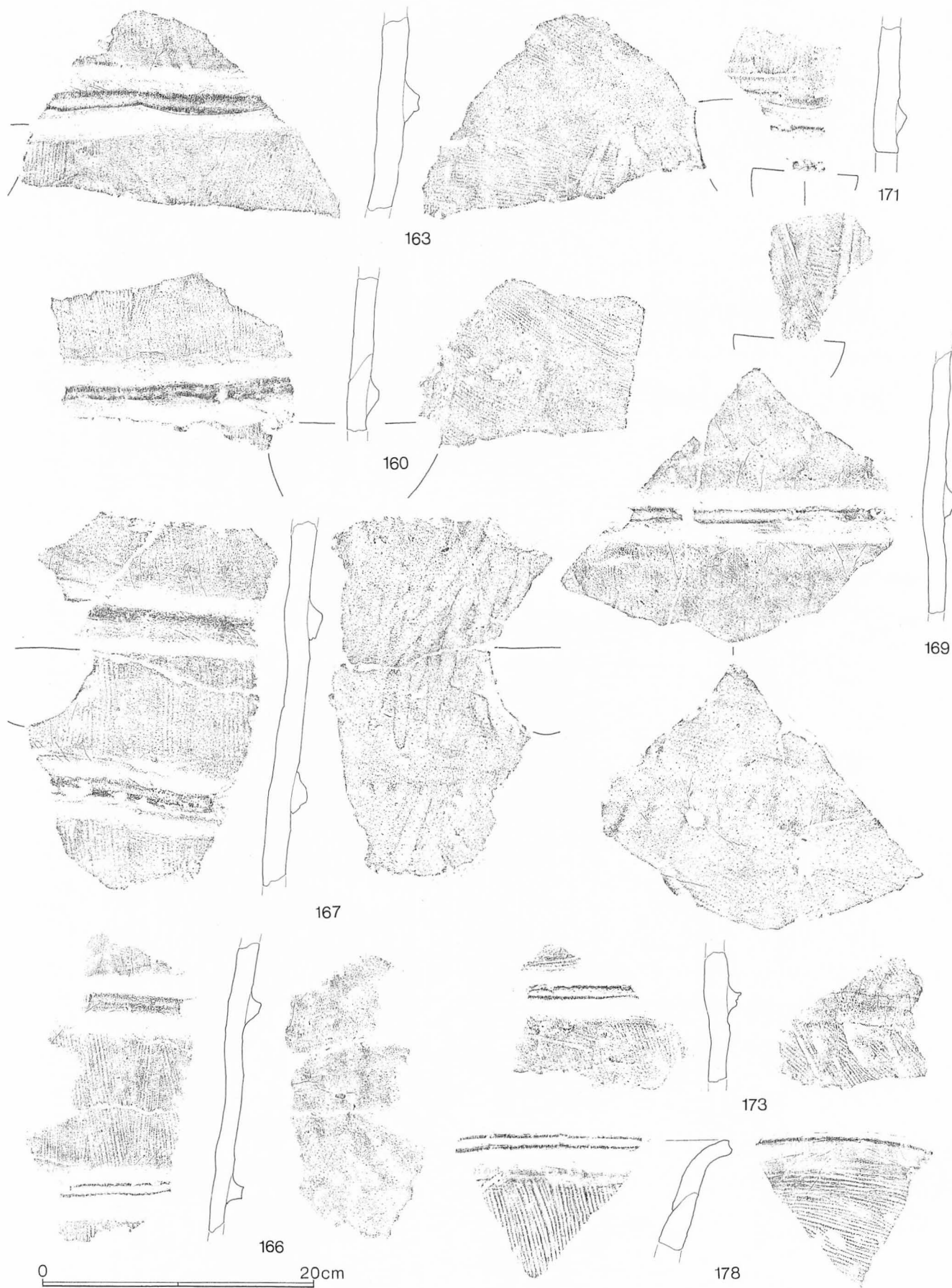
第71図 円筒埴輪拓影図(17)



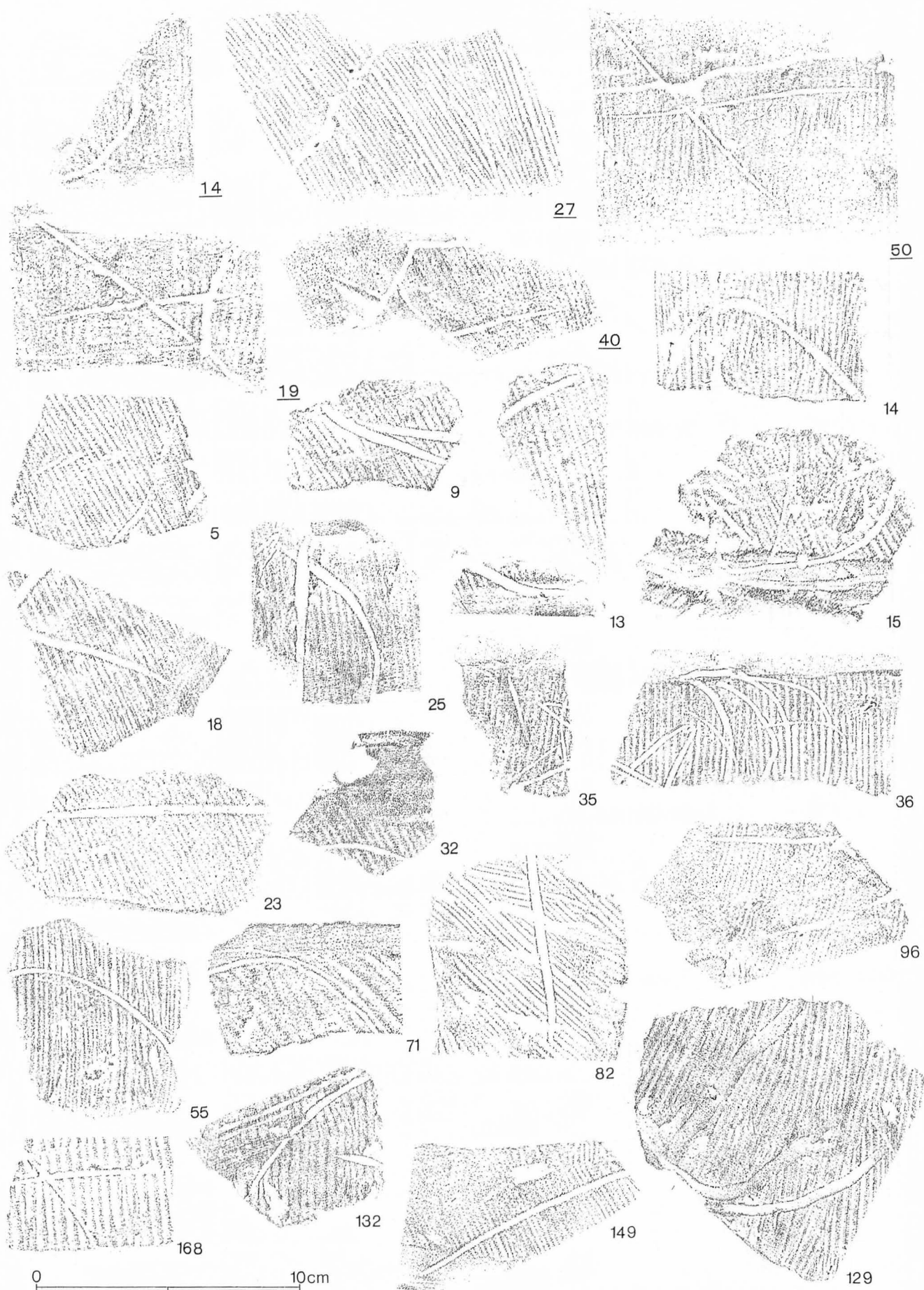
第72図 円筒埴輪拓影図(18)



第73图 円筒埴輪拓影図(19)



第74図 円筒埴輪拓影図(20)



第75図 円筒埴輪ヘラ記号拓影図

第9表 稲荷山古墳出土円筒埴輪（拓影図）観察表

番号	出土位置	種別	胎土	焼成	色調	外面・内面調整	凸帯	透孔	備考	分類
1	07造出外	円筒 胴部	礫粗砂少量 凝・チ・石・角・ 長・酸	良好 少し粉っ ぽい	乳白色 肉灰黒色	タテハケ(9/2.7) 下部斜位ユビナデ 上部ヨコハケ(11/3.6)	台形a 強		厚手・胎土精選・外 面赤彩痕跡・復原径 34.0cm(15%)	A類
2	07内堀外 一括	円筒 胴部	礫粗砂やや多 石・チ・酸・凝	良好 堅緻	橙褐色	ナナメハケ(14/4.0) 急ナナメハケ(13/3.5) 粘土紐痕を残す	M形a くずれ 弱	円形	凸帯のヨコナデは人 差指から中指の3指 を用いる 復原径30.0cm(19%)	D類
3	07内堀外 一括	円筒第 1～2段	礫粗砂多量 チ・石・酸・凝	良好 堅緻	くすんだ赤 茶褐色	タテハケ(13/3.8) 急ナナメハケ(10/2.5) 粘土紐痕を残す	M形a 極弱		第1段が第2段に比 して長い 底径29.4cm(20%)	D類
4	09B⑩21	円筒 口縁部	粗砂やや多 石・チ・酸・凝・ 角	良好	茶褐色	ナナメハケ(15/5.1) 後タテハケ(5/1.1) ヨコハケ(7/1.9)			緩外反 端部四角く収める	D類
5	09B⑩28	円筒 胴部	粗砂やや多 石・チ・角・長・ 酸	普通	くすんだ赤 茶褐色	ナナメハケ(12/2.8) ナナメハケ(12/3.2)			外面ヘラ記号	不明
6	09B⑩17	円筒 胴部	粗砂やや多 チ・酸・石・凝・ 角	普通 粉っぽい	くすんだ淡 黄褐色	タテハケ(13/4.1) ナナメハケ(13/3.1)			粘土紐接合痕を残す	D類
7	09C⑥15	円筒 胴部	礫粗砂やや多 石・チ・酸・凝	良好 堅緻	淡橙褐色	タテハケ(7/1.4) ヨコハケ(13/2.8)	M形a 弱		凸帯部の復原径32.0 cm(15%)	C1類
8	09C⑩19	円筒 口縁部	粗砂やや多 チ・酸・凝・石	普通 内側還元	淡橙褐色 暗灰色	ナナメハケ(8/2.2) ヨコハケ(13/3.4)			外反 端部四角く収める	C類
9	09C⑩19	円筒 口縁部	礫粗砂やや多 チ・石・酸・凝	良好	くすんだ淡 黄褐色 肉灰褐色	タテハケ(11/4.1) ヨコハケ(8/2.3)			外面三日月形ヘラ記 号	C類
10	09C⑩39	円筒 口縁部	礫粗砂やや多 チ・石・酸	良好 堅緻	淡褐色 黄白色	ナナメハケ(12/3.1) ナナメハケ(7/2.0) 口縁部ヨコハケ			口縁外面のヨコナデ を伴わない	D2類
11	09C ⑩181+380 + 359	円筒 口縁部	礫粗砂多量 チ・石・角・凝・ 長・酸	普通 粉っぽい	くすんだ淡 褐色(表面 1mm)肉赤 褐色	ナナメハケ(7/2.1) ナナメハケ(10/3.1) 口縁部ヨコナデとくに 内面幅広			外反 端部丸く収める 胎土円礫	D2類
12	09C⑩183	円筒 口縁部	礫粗砂多量 石・チ・片岩	良好 堅緻	くすんだ淡 赤褐色	タテハケ(10/2.4) ナナメハケ(13/2.5) 粘土紐痕を残す 口縁端部ヨコナデ			小型円筒 屈曲して開く 端部四角く収める 口径35.0cm(20%)	D2類
13	09C⑩354+ 19	円筒 口縁部	礫を多量 チ・石・酸	良好 堅緻	淡黄褐色 淡褐色 肉灰褐色	タテハケ(9/2.5) ナナメハケ(10/2.4) 口縁部ヨコハケ	M形b くず れ・中		外面コヘラ記号 復原径28.0cm (22%)	D3類
14	09C⑩146+ 18+24+209	円筒 口縁部	礫粗砂やや多 石・チ・凝・酸	良好 堅緻 内面還元	暗橙褐色 くすんだ黄 褐色 肉灰褐色	ナナメハケとタテハケ 交互(18/4.2) ヨコハケ(10/2.2)			窄んでから弱外反 端部四角く収める 外面コヘラ記号 口径40.0cm(25%)	C2類
15	09C⑩109	円筒 胴部	礫粗砂やや多 石・凝・チ	良好	淡茶褐色	ナナメハケ(16/4.5) 斜位ユビナデ	M形b 弱		外面舟形ヘラ記号	D類
16	09C⑩ 127	円筒 胴部	礫粗砂やや多 石・チ・酸・凝	良好 少し粉っ ぽい	淡褐色	ナナメハケ(5/1.4) ヨコハケ(5/1.5)	M形a 弱	円形	外面平行するヘラ記 号	D類
17	09C⑩19	円筒 胴部	粗砂やや多 チ・石・角・酸	良好 少し粉っ ぽい	淡橙褐色 淡褐色 肉暗赤褐色	タテハケ(9/3.0) ナナメハケ(11/2.6)	M形b 中		復原径24.0cm (16%)	D類
18	09C⑩19	円筒 胴部	粗砂やや多量 チ・酸・凝	普通 粉っぽい	淡褐色	ナナメハケ(12/4.0) ナナメハケ(13/4.1)			外面×ヘラ記号の一 部	C類
19	09C⑩268	円筒 胴部	礫粗砂やや多 石・チ	良好 堅緻 半須恵質	淡黄褐色 オリブ灰 色	ナナメハケ(10/3.8) ナナメハケ(11/2.8) 後斜位ユビナデ	M形a 弱		復原径32.0cm (14%)	D類
20	09C⑩18	円筒 胴部	粗砂やや多 チ・石・酸	良好 少し粉っ ぽい	淡橙褐色 淡褐色 肉暗赤褐色	タテハケ(7/2.6) ナナメハケ(7/2.3)	M形a 中		復原径26.0cm (20%)	D3類
21	09C⑩18	円筒 胴部	礫粗砂やや多 チ・石・酸	良好 堅緻	くすんだ淡 赤褐色	タテハケ後 ナナメハケ(9/2.0) ナナメハケ(6/1.6)	M形a 中			C類
22	09C⑩274	円筒 胴部	粗砂やや多 チ・石・長・凝	良好 堅緻 須恵質	明灰色	タテハケ(12/3.5)後 ナナメハケ ナナメハケ(4/1.2)後 斜位ユビナデ	M形a 弱		外面平行するヘラ記 号	D3類 カ

23	09C⑫7	円筒 胴部	粗砂やや多 チ・石・角・酸	普通	橙褐色 淡黄褐色 肉灰白色	ナナメハケ(6/1.6) 緩ナナメハケ (12/2.9)	台形a 弱		外面鍵形ヘラ記号	C2類
24	09C⑫23	円筒 胴部	礫粗砂やや多 チ・石・酸・凝	普通 粉っぽい	白っぽい淡 褐色	タデハケ(8/2.1) タデハケ・ナナメハケ (6/1.9)後 横位ユビナデ	M形b 中 ヨコナ デ丁寧		大型	D1類
25	09C⑫24+1 88+19	円筒 胴部	礫粗砂やや多 チ・石・凝・酸	普通 粉っぽい	淡灰褐色 肉橙褐色	ナナメハケ(12/2.9) ナナメハケ(11/2.7) 孔状の接合痕を残す	不整形 中		外面ヘラ記号 復原径34.0cm (24%)	D2類
26	09C⑫307	円筒 底部	粗砂やや多 石・酸・凝・長	やや軟質 粉っぽい	橙褐色 肉暗灰色	タデハケ(12/3.4) ナナメハケ(9/2.6)			底面に篠竹圧痕	C類
27	09C⑫310	円筒 底部	粗砂やや多 石・チ・凝・酸・ 角	良好	くすんだ淡 赤褐色	ナナメハケ(7/2.4) ナナメハケ(11/3.3)			底面にスノコ状圧痕	C類カ
28	09C ⑫187+一 括	朝顔 肩部	細砂少量 チ・石・酸・凝	普通 粉っぽい	橙褐色 肉暗灰褐色	肩ナナメハケ (10/2.4) 頸タデハケ 内横位ユビナデ	三角			C類
29	09C⑫68	円筒 胴部	礫粗砂やや多 チ・石・凝・長・ 角	普通 少し粉っ ぽい	淡橙褐色 (表面1mm) 肉暗灰褐色	ナナメハケ(12/2.2) ナナメハケ(10/1.9)	M形a 弱			C類
30	09C⑮23	円筒 口縁部	粗砂やや多 チ・酸・石・凝・ 角	やや軟質 粉っぽい	淡黄白色〜 くすんだ褐 色肉暗灰色	ナナメハケ(4/1.1) ナナメハケ(5/1.1)			直開・端部四角く収 める・復原口径25.0 cm(15%)	D3類
31	09C⑮2 B	円筒 胴部	礫粗砂やや多 チ・石・酸・長・ 凝	普通 粉っぽい	淡橙褐色 肉緑灰色 (マーブル)	緩ナナメハケ(7/2.4) ナナメハケ(8/2.3) 後ヨコハケ(12/3.4)	M形a 弱	円形		C1類
32	09E⑦2	円筒 口縁部	礫粗砂やや多 チ・石・長・酸・ 凝	普通 粉っぽい	くすんだ淡 黄褐色	ナナメハケ(10/2.7) ヨコハケ(9/2.3)			屈曲・端部四角く収 める 外面弧状ヘラ記号	D2類
33	09E⑦2	朝顔 口縁部	礫粗砂やや多 チ・石・角・長・ 酸・凝	良好 少し粉っ ぽい	黄白色 肉灰色	ナナメハケ(11/3.1) ナナメハケ後 端部ヨコハケ(9/2.4)			端部屈曲して開き四 角く収める 山より谷の広い原体	A類
34	09E⑧13	円筒 口縁部	礫粗砂やや多 チ・石・角・酸・ 凝・石英片岩	普通 粉っぽい	黄白色 肉灰黒色	タデハケ(6/2.3) ナナメハケ(10/1.4)			内外面とも赤彩弱 外反端部丸く収める	A類
35	09E⑧18	円筒 胴部	礫粗砂やや多 石・チ・凝・酸	良好 堅緻	淡茶褐色	タデハケ(10/2.3) 下部斜位ユビナデ 上部ナナメハケ (14/3.4)	M形b 弱		外面線刻画	D3類
36	09E⑧18	円筒 胴部	礫粗砂やや多 石・チ・凝・角・ 輝・酸	良好 堅緻	淡茶褐色 肉暗茶褐色	タデハケ(10/2.2) ナナメハケ後 タデハケ(8/1.9)	M形b 弱	円形	外面線刻画 171と同一個体	D3類
37	09E⑧18	円筒 胴部	礫粗砂やや多 チ・石・角・長・ 酸・凝	普通 粉っぽい	乳白色 肉暗灰色	タデハケ(14/2.9) ヨコハケ(12/2.4) 後斜位強いユビナデ	台形a 強			A類
38	09E⑧13	円筒 胴部	礫粗砂やや多 チ・石・凝・角・ 長・酸	軟質 粉っぽい	黄白色 肉暗灰色	タデハケ(10/3.4) 丁寧な斜位ユビナデ	台形b (擬三 角) 強	半円形	外面全面赤彩 復原径32.0cm (27%)	A1類
39	09E⑧18	円筒 底部	粗砂やや多量 凝・チ・長・酸・ 石・角	普通	くすんだ茶 褐色	タデハケ(13/2.3) ナナメハケ(15/2.4)				D2類
40	09E⑧9	円筒 底部	礫粗砂大量 チ・角・長・凝・ 酸・石	良好 堅緻	茶褐色 肉橙褐色	緩ナナメハケ(5/1.2) 横位ナデ			底面に篠状圧痕	D類
41	09E⑧13	円筒 底部	粗砂やや多量 チ・凝・石・酸	普通 粉っぽい	乳白色 肉灰黒色	緩ナナメハケ(8/3.0) 斜位ユビナデ後 ナナメハケ(4/1.5)	台形a 極強		厚手基底部欠失 下部に黒斑	A類
42	09E⑧14	円筒 底部	粗砂少量 チ・石・角・長・ 凝・酸	良好 少し粉っ ぽい	黄白色 肉灰黒色	タデハケ(6/2.3) 斜位強いユビナデ 粘土紐痕を残す			大型・厚手 底面蕨状圧痕 10.0cmの基部技法	A類
43	09E⑧18	円筒 底部	細砂少量 チ・石・角	良好 堅緻	淡茶褐色	タデハケ(7/1.7) 横位ユビナデ			幅5.0cmの基部技法 底面篠と篠状圧痕 径30.0cm(15%)	D2類
44	09E⑫1036	円筒 口縁部	礫細砂少量 チ・石・角	良好 堅緻	淡黄褐色	ナナメハケ(6/1.9) 緩ナナメハケ(5/1.5)			大型・薄手 外反端部シャープ	D1か 2類

45	09E⑫727	円筒 口縁部	礫粗砂多量 チ・石・長・酸・ 凝	良好 堅緻	淡茶褐色	ナナメハケ(12/2.7) 緩ナナメハケ (7/1.8)			薄手屈曲して開く 端部シャープ 復原径38.0cm(11%)	D3類
46	09E⑫952	円筒 口縁部	礫粗砂多量 チ・石・酸・凝・ 角・長	良好 堅緻	淡赤褐色 肉茶褐色	タテハケ(11/2.6) ヨコハケ(10/2.4)			弱外反・端部丸く収 める・端部外面幅の 狭いヨコナデ	D1か 2類
47	09E⑫757+ 762	円筒 胴部	粗砂やや多量 チ・長・角・凝・ 石・酸	普通 粉っぽい	淡橙褐色 肉灰褐色	ナナメハケ(6/1.6)後 タテハケ(8/1.2) ナナメハケ(14/3.5)	M形b 中			D2類
48	09E⑫628+ 21+ 21B	円筒 胴部	礫粗砂やや多 凝・チ・石・酸	普通 粉っぽい	赤茶褐色 肉暗茶褐色	ナナメハケ(14/2.9) ナナメハケ(4/1.1) 2回・粘土紐痕を残す	M形b 中		凸帯間隔が狭い 薄手	D類カ
49	09E⑫555+ 774+ 16D+1020	円筒 胴部	礫粗砂やや多 石・チ・凝・酸・ 角	良好 少し粉っ ぽい	くすんだ橙 褐色 肉淡黄褐色	タテハケ(9/2.2) ナナメハケ(8/1.9) 粘土紐痕を残す	M形a 弱	円形	薄手・大型 復原径41.0cm (15%)	D1類
50	09E⑫22A	円筒 胴部	礫粗砂やや多 石・チ・長・角・ 凝・酸	良好 堅緻	淡茶褐色	タテハケ(14/3.4) ヨコハケ(10/2.0) 粘土紐痕を残す	M形b 弱	円形	復原径30.0cm (22%)	D2類
51	09E⑫1058 +649+16D	円筒 胴部	礫粗砂やや多 石・チ・酸・輝	良好 堅緻	くすんだ淡 赤褐色	タテハケ(11/2.5) ナナメハケ(13/2.5) 粘土紐痕を残す	M形b 中		復原径30.0cm (25%)	D2類
52	09E⑫763+ 142+ 778+1014 +17C+58	円筒 胴部	礫粗砂やや多 チ・石・酸・凝・ 輝	良好 外面少し 粉っぽい	淡黄褐色～ 淡褐色 くすんだ赤 褐色	ナナメハケ(15/3.1) ヨコハケ(11/2.5) 粘土紐痕を残す	M形b 中		復原径31.0cm (25%)	D2類
53	09F⑫695	円筒 胴部	細砂少量 石・凝・チ	良好 堅緻	赤褐色	タテハケ(12/3.0) ヨコハケ後 ナナメハケ(9/2.1)	台形a 弱		薄手・大型 復原径34.0cm (13%)	D2類
54	09F⑫729+ 555	円筒 胴部	礫粗砂やや多 チ・石・角・酸・ 凝	良好 堅緻	くすんだ淡 赤褐色	左傾と右傾のナナメハ ケ交互(7/2.1) 下部タテハケ・上部ナ ナメハケ(10/2.8)	M形b 弱 ヨコナ デ丁寧	円形	大型	D2類
55	09F⑫693	円筒 胴部	礫粗砂やや多 チ・石・角・酸・ 凝		くすんだ赤 茶褐色	タテハケ(7/1.5) ナナメハケ(9/2.2) 粘土紐痕を残す			大型 外面弧状ヘラ記号	D2類
56	09F⑫254	円筒 胴部	礫粗砂やや多 石・チ・酸・角	良好 堅緻	くすんだ淡 赤褐色	タテハケ(6/1.6) タテハケ(7/1.9)後 縦位ユビナデ	台形a 弱	円形	小型 復原径20.0cm (25%)	D3類
57	09F⑫324	円筒 胴部	礫粗砂少量 チ・石・長・酸・ 凝	普通 内面は良 好	淡灰黄褐色	タテハケ・ナナメハケ (9/2.4) ナナメハケ(9/2.5) 後斜位ユビナデ	M形a 中	円形	大型	D2類
58	09F ⑫565+617	円筒 胴部	礫粗砂やや多 チ・石・凝・酸	良好 堅緻	くすんだ淡 赤褐色	タテハケ(10/3.1) ナナメハケ(13/3.4)	M形b 中	円形	大型	D1か 2類
59	09F ⑫259+23B + 392+ 415	円筒 胴部	礫粗砂やや多 チ・石・凝・輝・ 酸	良好 堅緻	淡赤褐色	ナナメハケ(8/2.4) 緩ナナメハケ(10/2.8)	台形b 弱			D1か 2類
60	09F⑫656	円筒 胴部	粗砂少量 凝・酸・チ・輝	良好 堅緻	暗茶褐色	タテハケ(9/2.3) ナナメハケ(13/3.9) 粘土紐痕を残す	M形a 極弱		復原径30.0cm (20%)	D2類
61	09F⑫708+ 730	円筒 胴部	礫粗砂やや多 チ・石・凝・長・ 角・酸	良好 堅緻	淡褐色	タテハケ(11/2.5) ナナメハケ(9/2.5) 後強い斜位ユビナデ	M形a 弱	円形 (大 型)	谷幅の広いハケ原体 復原径36.0cm (24%)	D1類
62	09F⑫550+ 534+ 391+401+ 758+419	円筒 胴部	礫細砂少量 石・チ・凝・角	良好 堅緻	茶褐色	タテハケとナナメハケ 交互に(10/2.4) タテハケ後上部にヨコ ハケ(12/3.0)	M形a 弱	円形	薄手大型 内面調整に特徴 復原径40.0cm (24%)	D1類
63	09F⑫311+ 595+ 711+563+ 547+23A	円筒 胴部	礫粗砂やや多 チ・角・凝・酸・ 石・長	良好 堅緻	赤茶褐色	ナナメハケ(17/5.0) 2次調整のハケメ有 ナナメハケ(9/2.8)	M形b 弱		凸帯ヨコナデは人差 指から薬指の3指を 用いる 復原径43.0cm(15%)	D1類
64	09F⑫665	朝顔 口縁部	礫粗砂少量 チ・石・酸・輝	良好 堅緻 半還元	灰色 淡褐色 肉灰褐色	ナナメハケ(9/2.2) ナナメハケ・ヨコハケ (8/1.8)	台形d 中 ヨコナ デ丁寧		段部は擬口縁技法+ 補強凸帯	D類朝

65	09F⑫18B	朝顔 頸部	礫粗砂やや多 チ・石・長・酸・ 角・ガ	良好 堅緻 半還元	灰色がかつ た淡褐色 肉赤灰色	タデハケとナナメハケ 交互(13/3.2) 左傾と右傾のナナメハ ケ交互(10/2.5)	台形d 中	34と同一個体 口縁部接合面に刻み 目あり	D類朝	
66	09G⑫54	朝顔 口縁部	粗砂多量 チ・石・長・凝・ 酸	普通	くすんだ橙 褐色 肉灰褐色	ナナメハケ(12/2.8) ヨコハケ(16/3.5) 端部外面ヨコナデ			不明	
67	09J⑥637+ 491+堀底	円筒 胴部	礫粗砂やや多 チ(円礫)・ 石・凝・酸	良好 少し粉っ ばい	茶褐色 黄白色	ナナメハケ(9/2.0) ヨコハケ(11/2.5)	M形b 中	凸帯のヨコナデは拇 指から薬指の4指を 用いる	D3類	
68	09J⑥624+ 639+ 478+ 堀底	円筒 胴部	礫粗砂やや多 石・チ・酸・凝・ 長	普通 粉っばい	淡褐色 肉淡黄褐色	ナナメハケ(12/2.8) 下部ナナメハケ 上部ヨコハケ(18/4.8) 粘土紐痕を残す	台形d 中	凸帯のヨコナデは人 差指から子指の4指 を用いる	D2類	
69	09J⑥489+ 620+646+6 23+512+堀 底	円筒 胴部	礫粗砂多量 チ・石・凝・酸	普通 粉っばい	橙褐色 淡黄褐色	ナナメハケ(12/2.9) 後上段に2次調整タ デハケ・ヨコハケ (12/2.9) 粘土紐痕を残す	M形b 中	上段と 下段に 円形透 孔	凸帯ヨコナデは拇 指～薬指の4指使用 復原径32.0cm (18%)	D2類
70	09J⑥631	円筒 胴部	礫粗砂やや多 石・チ・凝・酸・ 角	良好 堅緻	淡赤褐色 肉赤灰色	ナナメハケ(11/2.9) ナナメハケ (13/3.4)後タデハケ	M形b 弱		凸帯ヨコナデは人差 指～薬指の3指使用 復原径38.0cm(23%)	D1類
71	09K⑮95	円筒 口縁部	細砂少量 石・チ・凝・酸・ 角・輝	軟質 粉っばい	淡黄灰色	ナナメハケ(7/2.9) ヨコハケ(4/1.4) 原体浅く間隔粗い		外反・外面ヨコナデ 外面二重弧線ヘラ記 号	D1か 2類	
72	09K⑮65	円筒 胴部	礫粗砂少量 チ・凝・酸	普通 粉っばい	赤褐色 肉灰褐色	タデハケ(12/2.5) 下部緩ナナメハケ 上段急ナナメハケ (11/2.1)	台形a 弱	外面凸帯より上部の 外面調整は2次調整	B類	
73	09K⑮246	円筒 底部	礫粗砂やや多 チ・凝・石・角・ 酸	普通 粉っばい	赤褐色 橙褐色 肉灰茶褐色	タデハケ(11/2.3) ナナメハケ(15/3.0)		底面浅いスノコ痕 底径26.0cm(20%)	B3類	
74	09K⑮34	朝顔 肩部～ 頸部	粗砂やや多 凝・石・チ・酸・ 長・角	普通 やや脆い	明赤褐色	肩ナナメハケ(9/1.7) 頸タデハケ(9/1.7) 肩横位ナデ・頸横位ナ デ・円筒部ヨコハケ (8/1.7)	M形a 強	円筒部先端内側に肩 部を接合 頸部M凸帯	B類朝	
75	09K⑮194	朝顔 肩部	礫粗砂やや多 チ・石・凝・酸・ 角	普通	くすんだ橙 褐色 肉灰黄褐色	タデハケ(15/3.2) ヨコハケ(18/3.7)	M形a 中	肩部の外面調整は2 次調整	B類朝	
76	09L⑩16	朝顔 口縁部	礫粗砂やや多 石・チ・凝・長・ 酸	普通	橙褐色 肉灰白色	タデハケ後ヨコハケ (10/2.7) さらにナナメハケ ナナメハケ(9/2.7)		外面ヘラ描き文様	B類朝	
77	09L⑪3	円筒 胴部	粗砂やや多 酸・凝・チ・石・ 長	普通 粉っばい	橙褐色 肉青灰色	タデハケ(12/2.4) ナナメハケ(14/2.8) 後 雑なユビナデ	台形a 強	内面に粘土紐痕を残 す	B類	
78	09L⑪64	円筒 胴部	細砂少量 凝・チ・石・角・ 酸	普通 粉っばい	赤褐色 肉黒褐色	ナナメハケ(9/2.0) ナナメハケ(10/1.9) 粘土紐痕を残す	台形b くずれ 強	胎土の凝灰岩はマー ブル状	B類	
79	09L⑪40	朝顔 口縁部	礫粗砂やや多 チ・石・凝・酸	良好 堅緻	淡橙褐色	ナナメハケ(7/1.5) ヨコハケ(6/1.4)		端部強いヨコナデで 上下拡張	C類朝	
80	09L⑪51	朝顔・ 頸部～ 口縁部	礫粗砂やや多 石・チ・凝・酸	良好 堅緻	淡褐色	タデハケ(12/3.1) ヨコハケ(13/3.3)	M形b 中	凸帯裏に擬口縁技法	C類朝	
81	09L⑬25	円筒 口縁部	粗砂少量 凝・酸・チ・輝	普通 粉っばい	橙褐色 肉暗青灰色	ナナメハケ(8/2.2) ヨコハケ(8/1.9)		緩外反 端部四角く収める 口径34.0cm(10%)	C2類	
82	09L⑬20	円筒 口縁部	粗砂多量 凝・長・石・酸・ 角	良好	くすんだ暗 黄褐色 肉暗茶褐色	タデハケ(8/1.9) ナナメハケ(10/2.2) 粘土紐痕を残す		内面平行斜線ヘラ記 号	D1か 2類	
83	09L⑬25	円筒 口縁部	細砂少量 チ・石・凝・酸・ 長・角・ガ	良好 少し粉っ ばい	橙褐色 肉灰褐色	ナナメハケ(10/1.9) ナナメハケ(14/3.1) 粘土紐痕を残す		77と同一個体 外面×ヘラ記号 口径31.0cm(18%)	C2類	
84	09L⑬20	円筒 胴部	粗砂やや多 凝・酸・チ・角	良好	くすんだ赤 褐色 肉黒褐色	タデハケ(9/2.3) 後 ナナメハケ 緩ナナメハケ(9/2.0) 後急ナナメハケ	台形a 中	復原径38.0cm (20%)	B類	

85	09L⑬20	円筒 胴部	細砂少量 チ・石・角・長・ 凝・酸	良好	橙褐色 肉暗茶褐色	ナナメハケ(12/3.0) ナナメハケ(10/2.0) 粘土紐痕を残す	台形a 強	円形		B類
86	09L⑬25	円筒 胴部	粗砂多量 チ・角・石・酸	普通 粉っぽい	乳白色 肉暗灰色	タデハケ(18/2.1) ナナメハケ(11/1.9)	台形a くずれ・強		外面ヘラ記号	A3類
87	09L⑬25	円筒 胴部	細砂多量 凝・長・角・酸	普通 粉っぽい	くすんだ橙 褐色 肉灰褐色	タデハケ(9/1.9) ナナメハケ(12/2.6)	台形a 強		復原径36.0cm (22%)	B類
88	09L⑬15	円筒 胴部	粗砂多量 チ・角・長・石・ 酸	良好	黄乳白色 肉灰褐色	ナナメハケ(10/2.3) ナナメハケ(10/2.4)	台形a 強		内面ヘラ記号 復原径30.0cm	A類
89	09L⑬20	円筒 胴部	粗砂やや多量 チ・凝・長・石・ 酸	軟質	橙褐色	緩ナナメハケ(7/1.7) ナナメハケ(5/1.0)	台形a くずれ・中			B類
90	09L⑬20	円筒 胴部	礫粗砂やや多 石・チ・凝	良好 堅緻	淡茶褐色	タデハケ(6/1.2) ナナメハケ(8/1.5)後 斜位ユビナデ			外面線刻画 171と同一個体	D類カ
91	09L⑬25	円筒 底部	礫粗砂少量 チ・石・凝・酸	良好	橙褐色 肉灰褐色	ナナメハケ(8/2.0) ナナメハケ(10/2.1)			幅7.5cmの基部技法 底面に篠圧痕	B類
92	09L⑮135	円筒 口縁部	粗砂多量 角・酸・長	普通 粉っぽい	黄乳白色 肉灰黒	ナナメハケ(14/2.2) ナナメハケ(6/1.4)			外反・端部四角内面 ヘラ記号	A類朝
93	09L⑮278	円筒 口縁部	粗砂やや多 チ・凝・長・石 角・酸	普通 粉っぽい	淡黄白色 肉黒色	タデハケ(9/2.0) ナナメハケ(17/3.6)				A4類
94	09L⑮352	円筒 胴部	粗砂多量 凝・酸・角	良好 少し粉っ ぽい	淡褐色 肉灰茶褐色	タデハケ(34/3.3) ナナメハケ(16/1.9)	台形a 強		内面調整ナデ→ハケ →ナデ 復原径26.0cm	A4類
95	09L⑮245	円筒 胴部	粗砂多量 凝・酸・角・長	良好 少し粉っ ぽい	乳白色 肉灰黒色	1次タデハケ(34/3.3) 2次B種ヨコハケ ナナメハケ(8/2.8)	台形b 強		ヨコハケの工具幅は 5.4cm・止め間隔は 3.0cmと3.8cm	A3類
96	09L⑮270+ 5	円筒 胴部	粗砂やや多量 チ・角・凝・酸・ 長・石	普通 粉っぽい	淡黄白色 (表面1mm) 肉黒色	ナナメハケ(12/2.3) ナナメハケ(15/2.9)	台形a 中	半円形	外面ヘラ記号	A類
97	09L⑮247+ 241+K⑮39 2	朝顔 口縁部	細砂少量(精 選)石・凝・ 角・酸・長	良好 少し 粉っぽい	淡橙褐色 淡茶褐色 肉灰黒色	ナナメハケ(6/2.5) ナナメハケ後横位ナデ			強外反・端部外側丸 く内側尖る 口径56.6cm(10%)	A3類 朝
98	09M⑬一括	円筒 口縁部	礫粗砂少量 チ・酸・凝・角・ 長	良好	橙褐色 肉灰褐色	ナナメハケ(10/2.2) ナナメハケ(9/1.8)	幅の狭 い凸帯 が剥離		口縁直立 (17%)	B類
99	09M⑬550	円筒 口縁部	細砂少量 凝・酸・チ・石・ 長・輝・ガ	良好 少し粉っ ぽい	橙褐色 肉暗オリ ブ灰色	ナナメハケ(14/3.6) ナナメハケ(7/2.0) 後口縁部ヨコハケ (8/1.9)			78と同一個体・弱外 反・端部角・外面幅 狭ヨコナデ 口径38.0cm(15%)	B類
100	09M⑬506	円筒 口縁部	細砂少量 凝・角・酸・チ・ 金雲母	普通 粉っぽい	淡灰褐色 肉黒色	ナナメハケ(19/2.3) ナナメハケ(15/2.2) 口縁部丁寧なヨコナデ			外反・端部くぼむ 口径35.0cm(15%)	A3か 4類
101	09M⑬21	円筒 胴部	細砂やや多量 凝・チ・石・長・ 酸	普通 粉っぽい	淡橙褐色	緩ナナメハケ(9/2.3) 緩ナナメハケ(7/2.0)	台形a 中	円形		B類
102	09M⑬21	円筒 胴部	粗砂多量 チ・石・長・凝・ 酸	普通 粉っぽい	くすんだ橙 褐色 肉暗灰色	ナナメハケ(12/2.4) ヨコハケ(4/1.3)	台形c 強		胎土のチャートは円 礫を含む	B類
103	09M⑬518	円筒 胴部	細砂少量 凝・酸・チ・長・ 角	良好 堅緻	くすんだ淡 赤褐色 肉茶褐色	タデハケ(10/2.2) 急ナナメハケ(8/1.9)	M形a 強	円形か 半円形	復原径29.0cm (20%)	B類
104	09M⑬463	円筒 胴部	礫粗砂やや多 凝・酸・チ・長・ 角	普通 粉っぽい	橙褐色 肉暗茶褐色	ナナメハケ(15/3.0) 急ナナメハケ(11/2.1)	台形c 強		復原径38.0cm (15%)	B類
105	09M⑬一括	円筒 胴部	粗砂やや多量 凝・チ・酸・角	普通 粉っぽい	淡褐色 肉暗灰色	タデハケ(44/3.6) ナナメハケ(17/2.8) 後横位ユビナデ	台形b 強	半円形	復原径26.0cm (20%)	A4類 朝
106	09M⑬一括	円筒 底部	礫粗砂やや多 チ・石・角・凝・ 酸	普通 粉っぽい	黄白色 肉灰黒色	タデハケ(22/3.4) ナナメハケ(9/1.2) 基底部斜位ユビナデ			外反して立ち上がる 上部に凸帯下の強い ナデ	A2類

107	09M⑬一括	朝顔 口縁部	礫粗砂やや多 チ(亜角礫)・ 石・酸・凝	良好 堅緻	淡赤褐色	ナナメハケ(11/2.4) ヨコハケ(10/2.4)	台形c 強		段部は擬口縁技法+ 補強凸帯	C類朝
108	09M⑭529	円筒 口縁部	細砂少量 チ・石・角・酸・ 長	良好 外面のみ 少し粉っ ばい	橙褐色 肉暗オリ ブ灰色	ナナメハケ(10/2.5) 後口縁部ヨコハケ (11/2.7) ナナメハケ(9/2.7)			弱外反端部くぼむ 外面幅の狭いヨコナ デ 口径38.0cm(14%)	C1類
109	09M⑭185	円筒 胴部	礫粗砂やや多 石・チ・長・角・ 凝・酸	普通 粉っばい	淡茶褐色 肉青灰色	タデハケ(13/2.5) ヨコハケ(10/2.0) 粘土紐痕を残す	台形b 中		復原径35.0cm	C1類
110	09M⑭537+ 435	円筒 胴部	細砂少量 チ・酸・凝・角・ 長	良好 堅緻	淡褐色 肉暗灰褐色	タデハケ(27/2.6) ナナメハケ(13/2.1) 後斜位ユビナデ	台形b 強	半円形	復原径30.0cm (15%)	A3類
111	09M⑭203	円筒 胴部	礫粗砂やや多 チ・石・凝・酸・ 角	良好 少し粉っ ばい	黄乳白色 肉暗灰色	タデハケ(36/3.0) ナナメハケ(33/3.5) 後斜位ユビナデ	台形a 中	円形か	厚手 復原径30.0 cm ハケメ細かい	A3類
112	09M⑭523	円筒 胴部	礫粗砂少量 チ・石・酸・凝	良好 堅緻	橙褐色	ナナメハケ(10/2.6) 下部ヨコハケ 上部ナナメハケ (17/3.0)	M形b 中		大型・凸帯ヨコナデ は拇指から中指の3 指を用いる 復原径35.6cm(18%)	C1類
113	09M⑭542+ 543	円筒 胴部	礫粗砂やや多 凝・チ・石・酸	普通 粉っばい	橙褐色 肉暗オリ ブ灰色	ナナメハケ(10/2.3) ナナメハケ後 ヨコハケ(21/4.3)	台形b 中		凸帯ヨコナデは人差 指から薬指の3指を 用いる 復原径27.0cm(15%)	C2類
114	09M⑭479	円筒 胴部	礫粗砂やや多 凝・石・チ	良好 少し 粉っばい	橙褐色 肉暗青灰色	タデハケ(10/2.3) 上段は2次調整 ナナメハケ(9/2.0) 粘土紐痕を残す	M形a 中		凸帯ヨコナデは人差 指～薬指の3指使用 復原径27.0cm (18%)	C2類
115	09M⑭328	円筒 胴部	礫粗砂やや多 凝・チ・角・石・ 酸	良好 堅緻	淡褐色 肉黒褐色	タデハケ(26/2.5) ナナメハケ(53/5.2) 後強い斜位ユビナデ	台形b くず れ・強	半円形	3～4条凸帯の小型円 筒 復原径25.0cm(17%)	A4類
116	09M⑭373+ 452	円筒 胴部	礫細砂少量 凝・石・チ・酸・ 角	良好 少し 粉っばい	灰白色 肉黒色	ナナメハケとタデハケ 交互に(14/2.9) ナナメハケ(14/3.1) 凸帯裏丁寧なヨコナデ	台形a 極強 (端 正)	半円形 か円形	凸帯水平に貼る ヨコナデは拇指～薬 指の4指使用 復原径35.4cm(20%)	A2類
117	09M⑭461+ 145+ 11A	円筒 胴部	礫粗砂やや多 チ・石・凝・角・ 酸	良好 堅緻	乳褐色 肉暗灰色	タデハケ原体2種 A(8/3.6) B(6/1.4) 斜位ユビナデ後 ナナメハケ(14/2.7)	台形a 強	半円形 か円形	調整具Aは谷幅の広 い・特異なもの 復原径35.4cm (25%)	A2類
118	09M⑭467	円筒 胴部	礫細砂少量 凝・酸・チ・長・ 角・輝	良好 堅緻	淡黄褐色 肉暗灰褐色	タデハケ(34/3.1) 斜位ユビナデ後 ナナメハケ(22/2.1)	台形b 中		復原径30.0cm ハケメ細かい	A類
119	09M⑭11	円筒 底部	礫粗砂やや多 チ・長・酸・角・ 凝	普通 粉っばい	乳白色 肉暗灰色	タデハケ(8/2.8) 斜位ユビナデ後 ナナメハケ(5/1.5)			幅9.5の基部技法底 面にハケ・ナデ調整 (一旦倒立) 底径30.0cm(13%)	A3類
120	09M⑭541	円筒 底部	礫粗砂やや多 チ・酸・凝・石	普通 粉っばい	赤褐色 橙褐色 肉灰茶褐色	タデハケ(13/2.6) ナナメハケ(9/1.8)	台形a 極強		幅8.0の基部技法凸 帯ヨコナデは拇指～ 中指の3指使用 復原径34.0cm(12%)	B2類
121	09M⑭491	朝顔 口縁部	礫細砂少量 石・チ・酸	良好 堅緻 半須恵質	赤灰色 肉青灰色	ナナメハケ後 タデハケ(13/2.9) ヨコハケとナナメハケ (16/3.2)を交互			弱外反・端部四角く 収めシャープ 端部外面ヨコハケ (5/3.2)	C類朝
122	10くびれ D-D' ベル ト	円筒 胴部	粗砂少量 石・凝・チ・酸・ 角	普通 粉っばい	黄白色 肉灰黒色	タデハケと右傾ナナメ ハケを交互(12/2.8) 緩ナナメハケ (8/3.2)凸帯裏斜位 ユビナデ	台形b くずれ 擬三角 強		大型・厚手 復原径34.0cm 外面に赤彩痕	A2類
123	11①区外 1009+ 466+680+ 476	円筒 口縁部	礫粗砂やや多 石・チ・凝・酸	普通 粉っばい	淡橙褐色 肉緑灰色	ナナメハケ(12/3.4) ヨコハケ(9/2.2) 粘土紐痕を残す	M形b 中		直立して端部屈曲端 面と内面に凹線が巡 る	D3類
124	11①区外 1316	円筒 胴部	礫粗砂少量 石・チ・酸・凝・ 角・長	良好 堅緻	橙褐色	タデハケ(11/2.4) ナナメハケ(12/1.9) 粘土紐痕を残す	M形b 中		厚手の中型円筒 復原径29.0cm (30%)	D3類

125	11①区外 988	円筒 胴部	礫粗砂やや多 チ・石・凝・酸・ ガ・角	良好 堅緻	淡黄赤褐色 肉淡赤褐色	ナナメハケ(12/3.0) タデハケ後 ナナメハケ(7/1.7) 粘土紐痕を残す	M形b 中	円形	凸帯ヨコナデは人指 指～薬指の3指使用 復原径34.0cm(18%)	D2類
126	11①区外 1413	円筒 胴部	粗砂少量 チ・凝・酸	普通 粉っぽい	橙褐色 淡橙褐色 肉灰褐色	タデハケ(15/2.2) ナナメハケ(12/2.5)	台形a 強	円形	復原径27.0cm (22%)	B3類
127	11①区外 969	円筒 胴部	礫粗砂やや多 チ・石・酸・凝	軟質 粉っぽい	くすんだ淡 黄褐色 肉暗赤褐色	ナナメハケ(7/1.8) 急ナナメハケ(8/1.9) 粘土紐痕を残す	M形b 中	円形	凸帯のヨコナデは人 差指から薬指の3指 を用いる 復原径34.0cm	D1か 2類
128	11①区外 658+480	円筒 胴部	礫粗砂多量 チ・石・酸	普通 粉っぽい	くすんだ淡 褐色 淡黄褐色	ナナメハケ(10/2.8) ナナメハケ(15/4.1) 粘土紐痕を残す 凸帯裏横位ナデ	M形a 弱		凸帯のヨコナデは人 差指から薬指の3指 を用いる 復原径30.0cm(23%)	D2類
129	11①区外 1287+ 1319	円筒 胴部	礫粗砂やや多 石・チ・酸・凝	良好 堅緻	淡褐色	ナナメハケ(15/4.6) 横位ナデ後ヨコハケ (13/3.6) 粘土紐痕を残す			外面竹管によるヘラ 描き文様	D1か 2類
130	11①区外 1058	円筒 胴部	礫粗砂少量 チ・石・酸・凝	良好 堅緻	淡茶褐色	タデハケ(12/3.0) ナナメハケ(14/3.4)			外面ヘラ描き文様	D類
131	11①区外 411	円筒 胴部	礫粗砂やや多 チ・石・凝・酸	良好 少し 粉っぽい	淡赤褐色 肉赤灰色	タデハケ(8/2.1) ナナメハケ(11/2.8) 粘土紐痕を残す	M形a 弱		薄手・中型 復原径31.0cm (19%)	D2類
132	11①区外 覆土	円筒 胴部	礫粗砂多量 チ・石・凝・酸	良好 堅緻	橙褐色	ナナメハケ(12/3.9) ヨコハケ(6/1.4)			谷幅の広いハケ原 体・ヘラ記号あり	D類
133	11①区外 1221	円筒 胴部	粗細砂やや多 凝・チ・石・酸	普通 粉っぽい	くすんだ赤 褐色 肉暗茶褐色	1次ナナメハケ (12/3.4) 2次B種ヨコハケ (9/2.2) ナナメハケ(9/1.7)	台形a 側面窪 む 強		小型円筒 外面ヘラ記号 復原径28.0cm (12%)	A4類
134	11①区外 74	円筒 胴部	粗細砂やや多 凝・チ・石・酸	普通 粉っぽい	くすんだ赤 褐色 肉暗茶褐色	1次ナナメハケ (8/1.5) 2次B種ヨコハケ (10/2.0) ナナメハケ(12/2.5)	台形a 側面窪 む 強		133と同一個体 小型円筒 ヨコハケの止間隔 4.8cm 復原径30.4cm(10%)	A4類
135	11①区外 1284	円筒 胴部	粗細砂やや多 凝・チ・石・酸	普通 粉っぽい	くすんだ赤 褐色 肉暗茶褐色	1次ナナメハケ (8/1.6) 2次B種ヨコハケ (11/2.1) ナナメハケ(9/1.8)	台形a 側面窪 む 強		133と同一個体 小型円筒 ヨコハケの止間隔 5.1cm 復原径28.0cm(10%)	A4類
136	11①区外 1330	円筒 胴部	粗細砂やや多 凝・チ・石・酸	普通 粉っぽい	くすんだ赤 褐色 肉暗茶褐色	1次ナナメハケ (8/1.5) 2次B種ヨコハケ (17/3.6) ナナメハケ(11/2.3)			133と同一個体 ヨコハケの間隔3.2 cm	A4類
137	11①区外 105	円筒 胴部	粗細砂やや多 石・チ・凝・角・ 酸	普通 粉っぽい	くすんだ赤 褐色 肉暗茶褐色	1次ナナメハケ (10/2.0) 2次B種ヨコハケ (7/1.6) ナナメハケ(11/2.2)	台形a 側面窪 む 強		133と同一個体 ヨコハケの間隔2.0 cm	A4類
138	11①区外 557	円筒 胴部	粗砂少量 石・チ・酸・凝	良好 堅緻	淡黄褐色 淡茶褐色 肉淡青灰色	1次タデハケ(8/2.0) 2次B種ヨコハケ (13/3.1) ヨコハケ(10/2.5)				A類
139	11①区内 238	円筒 胴部	粗砂やや多量 長・石・チ・酸・ 凝	普通 粉っぽい	くすんだ赤 褐色 肉黒褐色	ナナメハケ後 タデハケ(17/4.1) 2次調整緩ナナメハケ (13/2.8) 粘土紐痕を残す	台形b 強	円形	凸帯のヨコナデは拇 指から中指の3指を 用いる	B類
140	11①区外 1366	円筒 胴部	粗砂少量 石・凝・チ	良好 堅緻 須恵質	紫灰色 肉暗灰色	1次タデハケ (10/2.2) 2次B1a種ヨコハケ (17/3.3) ナナメハケ(9/1.7)		円形	ヨコハケは同一段 を上下2回調整して いる 止間隔3.2cm	A4類
141	11①区外 676+ 546+720	円筒 胴部	礫粗砂やや多 チ・石・凝・酸	良好 堅緻 内面還元	淡橙褐色 灰色	ナナメハケ(11/3.0) ヨコハケ(12/3.1) 粘土紐痕を残す	M形b 中		薄手・凸帯ヨコナデ は人差指～薬指の3 指使用(丁寧) 復原径36.4cm(13%)	D1類

142	11①区内 456	円筒 胴部	粗砂やや多量 チ・石・凝・酸	普通 粉っぽい	暗橙褐色 肉黒褐色	ナナメハケ後 タテハケ(14/3.3) 2次調整ヨコハケ (13/2.8) 粘土紐痕を残す	台形b くず れ・強 ヨコナ デ雑	円形		B類
143	11①区外 1406+1419	円筒 胴部	粗砂やや多 チ・凝・酸	良好 堅緻	暗茶褐色 肉暗灰色	ナナメハケ(11/2.2) ナナメハケ(8/1.9)			外面×ヘラ記号 焼成半須恵質	不明
144	11①区外 806	円筒 底部	礫粗砂少量 石・チ・酸	良好	くすんだ橙 褐色 淡黄褐色	タテハケ(14/3.9) 急ナナメハケ(11/2.8)			底面に篠圧痕2 底径27.6cm(21%)	B3類
145	11①区外 1130	円筒 第1段	礫粗砂多量 チ・石・酸	普通	暗茶褐色 暗灰褐色 肉赤灰色	ナナメハケ(15/4.1) 急ナナメハケ(23/6.2) 粘土紐痕を残す	M形b 中		第1段が長い 底部付近に大黒斑 底径30.0cm(30%)	D2類
146	11②区 146+492+4 93	円筒 胴部	礫粗砂多量 石・チ・酸・凝	良好 外面少し 粉っぽい	くすんだ赤 褐色	ナナメハケ後 タテハケ(10/2.7) 左傾と右傾のナナメハ ケ交互(15/4.4)	M形a 弱	円形	復原径34.0cm (25%)	D2類
147	11④区555	円筒 口縁部	礫細砂少量 凝・チ・石・酸	良好	暗褐色 肉暗オリ ブ灰色	タテハケ(12/3.0) ナナメハケ・口縁部 ヨコハケ(12/3.3)			薄手・大型 口径40.0cm(19%)	B類
148	11④区 785+L⑮ 覆土	円筒 口縁部	礫粗砂少量 角・石・長・チ・ 凝・酸	普通 粉っぽい	乳白色 肉灰黒色	ナナメハケ(28/2.8) ナナメハケ(24/3.2) 口縁部ヨコナデ	台形b 強		外反・端部はくぼむ 外面赤彩痕 口径38.6cm(15%)	A3か 4類
149	11④区164	円筒 胴部	細砂やや多量 凝・酸・チ・石・ 長・角	普通 粉っぽい	橙褐色 肉暗茶褐色	ナナメハケ(7/1.6) ナナメハケ(8/1.5)	台形c 強		外面斜線ヘラ記号	B類
150	11④区863	円筒 胴部	礫粗砂やや多 チ・凝・石・角・ 酸		橙褐色 肉黒褐色	タテハケ(11/2.6) 傾斜の異なるナナメハ ケ(13/3.0)を2回 粘土紐痕を残す	M形 b・中 M形a くず れ・弱	円形	上の凸帯は際立って 赤く使用粘土異なる 最大径28.0cm (30%)	C2類
151	11④区 625+609+6 11+671+67 0	円筒 胴部	礫粗砂少量 チ・凝・石・長・ 角・酸(硬質 で暗赤褐色)	良好 堅緻	鮮やかな赤 褐色	タテハケ(12/2.6) ナナメハケ(11/2.6)	M形a 弱	円形	凸帯ヨコナデは人差 指から薬指の3指を 用いる 復原径30.4cm(23%)	B類
152	11④区575	円筒 胴部	礫粗砂少量 凝・角・石・長・ 酸・輝	良好 少し粉っ ぽい	黄白色 肉黒色	タテハケ(12/2.0) ナナメハケ(12/2.0)後 斜位ユビナデ	台形a 強	半円形 か円形	厚手 復原径31.0cm (18%)	A3類
153	11④区M④ 耕作土	円筒 胴部	細砂微量精選 凝・チ・角・石・ 酸・長	普通 粉っぽい	黄乳白色 肉暗灰色	ナナメハケ後 2次調整B種ヨコハケ (13/4.0) ナナメハケ(12/3.7)	台形a 強		ヨコハケは4.5間隔 で明瞭な止め痕 外面に赤彩痕 復原径34.0cm	A3類
154	11④区151	朝顔 口縁部	礫粗砂少量 凝・酸・チ・石	良好	橙褐色 肉明灰色	ナナメハケ(11/2.1) ナナメハケ(8/1.8) 頸部横位ユビナデ			有段外反口縁 段部は擬口縁技法+ 補強凸帯	C類朝
155	11④区223	朝顔 口縁部	粗砂やや多量 チ・石・凝・酸	良好 少し粉っ ぽい	橙褐色 肉黒褐色	口ナナメハケ 頸タテハケ(13/2.8) 内ナナメハケ 頸内ヨコハケ(6/1.4)	M形b 強		口縁開き小さい 段部は擬口縁技法+ 補強凸帯	C類朝
156	11④区 742+739	朝顔 口縁部	礫粗砂やや多 チ・石・凝	良好 半須恵質	暗茶褐色 肉灰褐色	ナナメハケ(26/5.8) ヨコハケ(18/3.7) 口縁端部ヨコナデ			弱外反 端部四角く収める	C類朝
157	11④区 701+755+7 05造出し 表土	朝顔 口縁部	礫細砂多量 凝・チ・石	良好 堅緻 半須恵質	紫灰色 肉青灰色	外面下段ナナメハケ (18/3.7) 上段タテハケ後 ナナメハケ(14/2.7) 内面下部ナナメハケ 上部ヨコハケ (14/2.7)	M形b 強		直線的に開き無段凸 帯裏に乾燥単位があ り調整も上下で異な る 復原径49.0cm (21%)	C類朝
158	11N⑮内堀 +O⑮表採	円筒 口縁部	細砂少量 精選 チ・石・凝・角	軟質 粉っぽい	乳白色 器肉も同色	タテハケ(8/1.5) 下部斜位ユビナデ 上部ナナメハケ (16/2.9)	台形b 強		外面全面と内面の 上部に赤彩	A類
159	11N⑮内堀 表採	円筒 胴部	礫細砂少量 酸・チ・石・凝・ 角	軟質 粉っぽい (多孔質で 比重軽い)	乳白色 肉灰白色	ナナメハケとタテハケ 交互(11/2.1) ヨコハケ(10/2.0)後 斜位ユビナデ	台形a 強	半円形 上辺の 現存幅 11.2	外面全面に赤彩痕	A類

160	11N⑩内堀表土	円筒胴部	礫粗砂やや多 チ・石・酸・角・ 長・凝	良好 少し 粉っぽい	黄白色 肉淡青灰色	タテハケ(13/2.5) ナナメハケ(13/2.8)	台形a 強	半円形 か円形	外面赤彩 復原径36.0cm (15%)	A類
161	11O⑩表探	円筒口縁部		良好 少し 粉っぽい	乳黄白色 肉灰黒色	タテハケ(14/2.7) 緩ナナメハケ(18/3.7)	台形a 強		厚手・超大型 外反・外面赤彩 口径43.8cm(17%)	A2類
162	11内堀O⑩	円筒口縁部	礫細砂少量 チ・凝・石・角・ 長	良好 少し 粉っぽい	黄白色 肉黒色	タテハケ(17/3.2) ヨコハケ(25/4.4) 口縁端部のヨコナデ幅 広く内面に段を形成			直立幅広く端部強外 反・端部丸く収める 外面に赤彩痕 口径42.0(14%)	A2類
163	11O⑩表探	円筒胴部	細砂少量 チ・石・長・角・ 凝・酸	良好 少し 粉っぽい	淡黄白色 肉黒色	タテハケ(11/2.5) ヨコハケ・ナナメハケ (18/3.5)	台形a 強	半円形	厚手・外面赤彩 復原径38.0cm (25%)	A1か 2類
164	11O⑩表探	円筒胴部	礫粗砂少量 角・長・凝・石・ 酸	良好 少し 粉っぽい	淡黄白色 肉灰黒色	タテハケ(8/2.5) ヨコハケ(10/1.9)	台形b くずれ・強		外面赤彩 復原径34.0cm (15%)	A類
165	11O⑩表探	朝顔 肩部	礫粗砂やや多 チ・石・凝・酸・ 角	普通 粉っぽい	黄白色 肉灰色	肩タテハケ(13/2.8) 円筒部1次ナナメハケ 2次B種ヨコハケ 内面ナナメハケ後 斜位ユビナデ	台形b 極強	肩部に 半円形 か隅円 方形	円筒部先端内側に肩 部を接合	A類朝
166	11西側内堀中堤寄表探No.3	円筒胴部	礫粗砂多量 チ・石・長・酸・ 角・凝	普通 粉っぽい	くすんだ黄 白色 乳白色	タテハケ(16/3.3) 丁寧な斜位ユビナデ	台形b 台形a 強		凸帯ヨコナデは拇指 から中指の3指を用 いる	A4類
167	11西側内堀中堤寄表探No.4	円筒胴部	礫粗砂やや多 チ・角・凝・酸・ 石・長	普通 粉っぽい	乳白色 肉黒色	タテハケ(9/2.5) ナナメハケ(8/1.8) 後斜位ユビナデ	台形b 強	半円形	厚手・大型 上2段外面赤彩痕	A2類
168	11西側内堀中堤寄No.5	円筒胴部	細砂少量 精選 凝・角・石・長・ 酸・チ	良好 少し 粉っぽい	淡褐色 黄白色 肉灰黒色	タテハケ(10/3.5) ヨコハケ(12/4.4)後 斜位ユビナデ	台形a 強		厚手・大型・凸帯ヨ コナデは拇指から中 指の3指を用いる 外面×ヘラ記号	A類
169	11西側内堀中堤寄表探No.6	円筒胴部	礫粗砂やや多 チ・酸・角・石・ 凝	普通 粉っぽい	黄乳白色 肉暗灰色	タテハケ(14/2.5) ナナメハケ(12/3.2) 後凸帯裏横位ユビナデ	台形a くずれ・強		凸帯ヨコナデは拇指 ～薬指の4指使用 復原径42.0cm(18%)	A1か 2類
170	14③区試掘	円筒胴部	細砂少量 精選 石・チ・凝・酸・ 角	普通 粉っぽい	黄白色 肉暗灰色	タテハケ(16/3.6) ナナメハケ(18/3.8) 後部分的なユビナデ	台形b 強		凸帯ヨコナデは拇指 ～中指の3指使用す るが当り具合で形状 が異なる 外面にヘラ記号	A2類
171	03西側中堤表探No.2	円筒胴部	礫粗砂やや多 チ・石・凝・角・ 酸・長	良好・少 し 粉っぽい	乳白色 肉灰黒色	タテハケ(10/2.9) ヨコハケ(11/2.5)後 縦位ユビナデ	台形b くずれ (擬三角) 強	半円形		A類
172	03西側中堤表探No.2	円筒胴部	粗砂少量 凝・チ・角・ 酸	良好 少し 粉っぽい	赤味を帯び た乳白色 肉暗灰色	タテハケ原体2種 A(7/2.4) B(21/4.4) ナナメハケ(14/2.7) 後斜位ユビナデ	台形b (擬三角) 強		復原径40.6cm (17%)	A1か 2類
173	03西側中堤表探4	円筒胴部	礫粗砂やや多 チ・石・長・角・ 凝・酸	良好 少し 粉っぽい	黄白色 肉淡褐色	ナナメハケ(16/3.2) 急ナナメハケ(12/2.0) 凸帯裏横位ナデ	台形b 強		外面全面赤彩 凸帯のヨコナデは拇 指から中指の3指を 用いる	A類
174	03西側中堤	円筒胴部	礫粗砂やや多 チ・凝・石・角・ 酸	良好 少し 粉っぽい	黄白色 肉灰黒色	タテハケ(10/2.3) 上段2次調整 ナナメハケ(14/3.0) 後斜位ユビナデ	台形a 強	半円形	凸帯ヨコナデは拇指 ～中指の3指使用 復原径40.0cm(17%) 外面赤彩	A1類
175	03西側中堤表探	円筒胴部	礫細砂少量 凝・チ・石・酸	軟質 粉っぽい	乳白色 肉暗青灰色	タテハケ(13/3.0) ナナメハケ(11/2.4) 後斜位ユビナデ	台形a 強	半円形	凸帯ヨコナデは拇指 ～中指の3指使用 外面赤彩痕	A類
176	03西側中堤表探No.2	円筒底部	粗砂少量 凝・チ・石・角・ 酸	良好 堅緻	乳白色 肉灰黒色	タテハケ(16/3.4) ナナメハケ(14/3.1) 後斜位ユビナデ			幅7.0の基部技法と 推定・亀裂補修痕 底径31.2cm(18%)	A3類
177	04西中堤側	円筒口縁部	粗砂やや多 チ・石・凝・角・ 酸・長	良好 少し 粉っぽい	黄白色 肉黒色	タテハケと右傾ナナ メハケ交互に(18/3.6) ナナメハケ・口縁部ヨ コハケ(22/4.8)			厚手大型・赤彩痕 弱外反・端部丸く収 め内側に段あり 口径40.6cm(13%)	A1か 2類
178	表探	円筒口縁部	粗砂やや多量 チ・石・角・凝	良好 少し粉っぽい	黄乳白色 肉淡灰色	緩ナナメハケ(8/2.4) ナナメハケ(5/1.6)			端部屈曲して開く	A4類

第6節 形象埴輪

1 人物埴輪

(1) 人物埴輪胴部

1は人物埴輪の胴部である。着衣表現から巫女となろう。頭部と台部を失っている。左肩部と腰部2箇所の合計3ブロックから図上復原を行い、石膏を補って修復した。頸部までの復原高は41.7cm、腋の下での復原幅は25.5cmある。平成9年度5区の造出し付近M-14グリッドから出土した。

胴部は粘土紐巻き上げ成形であり、腕は臍を用いない中空製作で太い作りとなっている。体部の外面調整はナナメハケ（13本／2.4cm）で、腕部は長手方向のハケ調整を行い、付け根部分にユビナデを加えている。内面調整はナナメハケ（16本／3.2cm）である。

粘土紐を貼り付け、ユビナデ調整を行って袈裟状の特殊な着衣表現を行っている。それは①右肩から左腰に向かう輪と②左肩から左腰に向かう輪から成っていて、両者が左腰の位置で交差する。また、左肩からも①に向かって、前面と背面の両面において斜めの粘土紐が伸びている。全体の構造からすると①を支持するための紐と推定される。形状と着衣方法からいわゆる意須比になるものと考えられるが、段を以て布地を表現するのではなく、紐を組み合わせたような表現は珍しい。また、正面腹部やや右腰寄りに粘土紐を貼り付けた結び緒の表現があるが、紐から派生しているので、紐の端部を結んだ表現と見られる。なお、腰帯の表現は伴っていない。

胎土は小礫と粗砂を多量に含み、チャート、角閃石、石英、酸化鉄粒、凝灰岩粒が観察される。焼成はやや軟質で、粉っぽい。色調は乳白色を呈する。部分的に濃い赤彩痕が認められるが、当初の塗彩範囲は不明である。円筒埴輪A類と対応する。

(2) 人物埴輪頭頂部

2は頂部が尖り気味の形状から人物埴輪の被り物と推定するが、何らの装飾も伴っていないので坊主頭の可能性も残している。平成11年度3区（前方部西側隅角部外側）の外堀内から出土した。

前後方向となる長径は11.2cm、短径は10.3cm、現存高は8.5cmある。粘土紐巻き上げ成形で、頂部には小孔を残し、閉塞した痕跡はない。外面調整は天井部は横位の、それ以外では縦位のユビナデで、正面にのみヨコハケ痕がある。内面調整は下部では横位ユビナデを施すが、上部ではユビ押さえのみで粘土紐痕を残す。

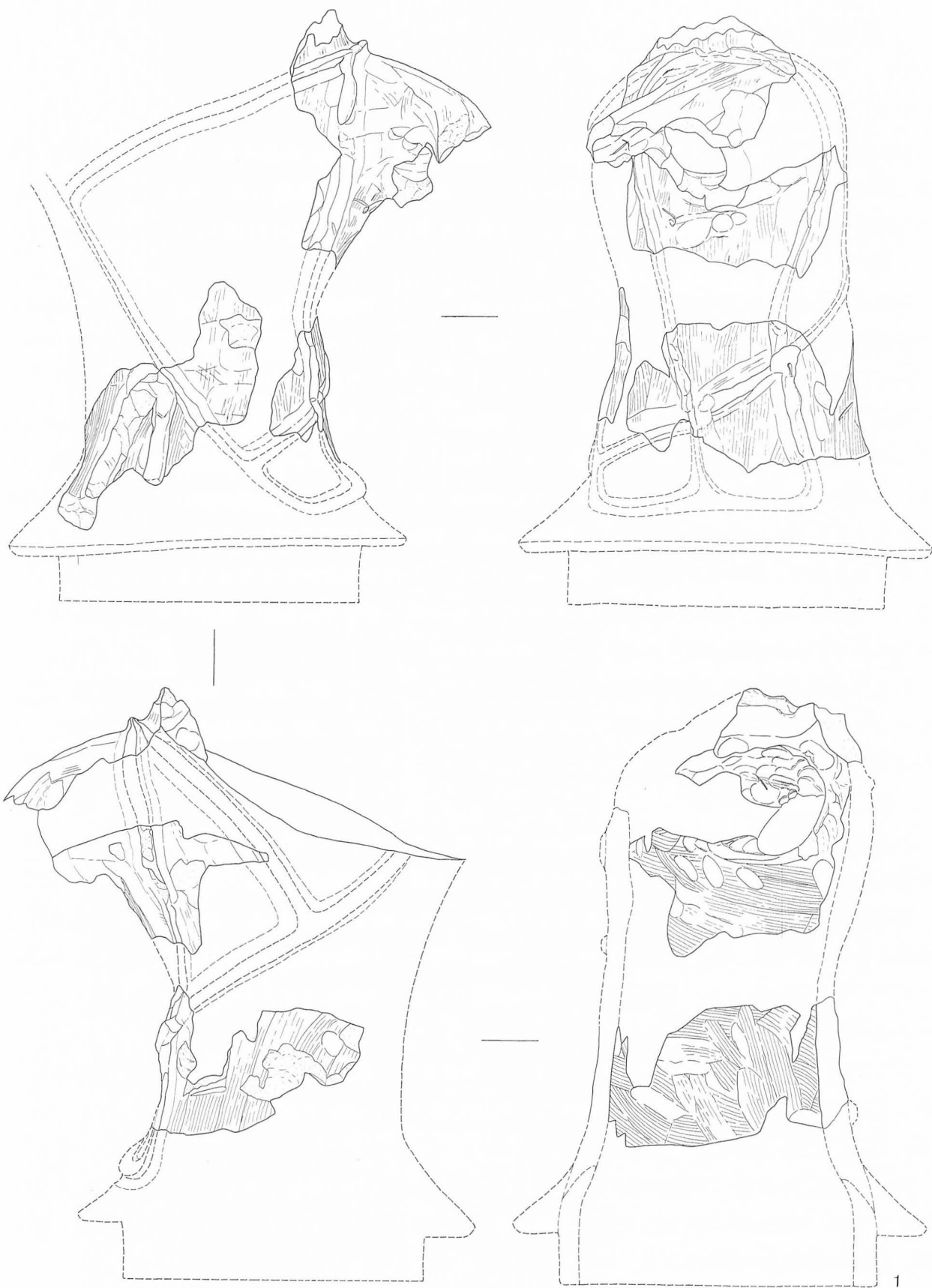
胎土は粗砂を多量に含み、チャート、長石、酸化鉄粒、凝灰岩粒が観察される。焼成は軟質で、著しく粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。円筒埴輪A類と対応する。

(3) 人物埴輪に伴う二又冠か

3は人物埴輪に伴う二又冠の破片と推定する。曲率から大型の製作である。上辺が山形に丸く突出している。内彎気味に立ち上がり、端部はそいだように尖る。L-15グリッド、造り出しとくびれ部に挟まれた内堀から出土した。

外面調整はナナメハケ（7本／1.8cm）で、端部は横ナデ、内面調整はナナメハケ（5本／1.2cm）である。端部は横位のヘラケズリ仕上げ。

ササラ状の塗彩具を用いて外面に格子目状の赤彩画を描く。また上縁部の内外両面を赤く縁取っ



0 20cm

第76図 形象埴輪実測図(1)

ている。胎土は精選されており、細砂をわずかに含み、石英、チャート、酸化鉄粒が観察される。焼成は軟質で、著しく粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。

(4) 人物埴輪頸部

4は人物埴輪の頸部で、図示部は完周する。9.4cmある直径からみて、かなり大型の製作である。11年度6区（前方部主軸線より東側の外堀部分）土層断面から出土した。

頸の付け根となる丸い孔を残して体部を成形し腕を接合した後に、その孔を接合面として粘土紐巻き上げによって成形する。外面調整は縦位及び横位のユビナデ、内面調整は斜位のユビナデだが粘土紐痕を顕著に残す。右側面部上端にヘラ押さえした粘土紐の一部が残っておりP字形の耳の下端部とみられる。

胎土は細砂から粗砂をやや多く含み、チャート、石英、凝灰岩粒、長石、酸化鉄粒が観察される。焼成は普通で、色調は表面暗橙褐色・器肉暗灰褐色を呈する。円筒埴輪C類と対応する。

(5) 人物埴輪腰部

5は器形が扁平で最もくびれた位置に凸帯が巡ることから人物の腰部とみて誤りないであろう。9年度2区のF-12グリッド（後円部東側の内堀墳丘より）から出土した。

外面調整はタテハケ（6本／1.1cm）後に斜位のユビナデを加えている。内面調整は縦位の強いユビナデである。凸帯は断面台形状だが、稜が丸みを帯び、幅が狭いのが特徴である。ヨコナデ調整によって丁寧に仕上げられている。

胎土は細砂から粗砂を多量に含み、凝灰岩粒、チャート、石英、酸化鉄粒、角閃石が観察される。焼成は軟質で、粉っぽい。色調は淡黄赤褐色を呈する。円筒埴輪A類と対応する。

(6) 人物埴輪手首

6は人物埴輪の右手首である。現存長は3.1cmである。平成9年度4区のJ-11グリッド（後円部東側墳丘上段部）から出土した。

板状粘土を丸めて中空の腕を整形し、その先端部を二つに割りさいて手の甲と拇指を作り分けている。手の甲と拇指は先端部を欠失している。サイズは通常の人物埴輪の場合よりかなり小型である。外面調整は長手方向のハケ調整後にナデ仕上げを加えている。手の内は指頭ナデで、中空の孔は閉塞していない。

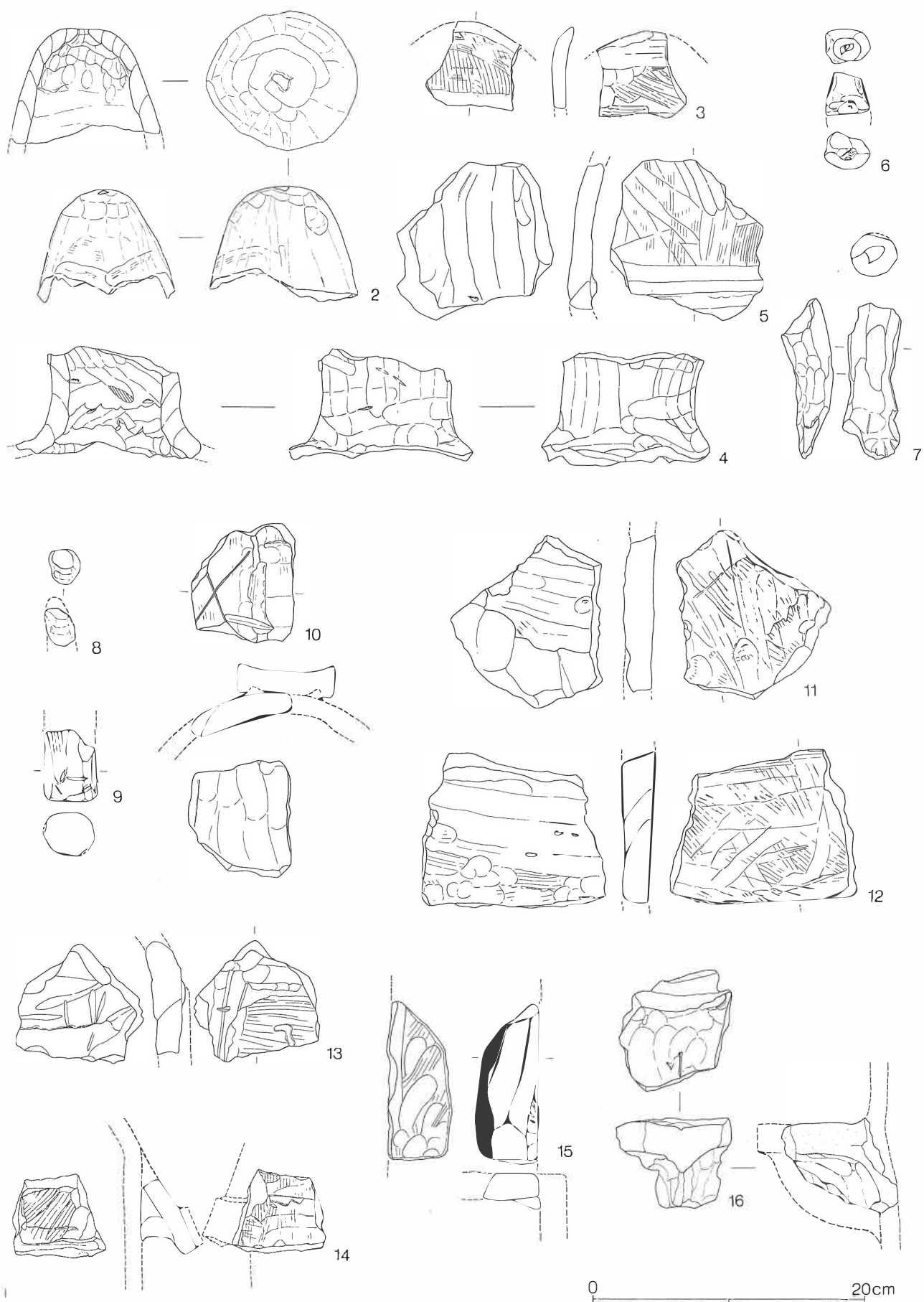
胎土は細砂を少量含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成は軟質で、粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。円筒埴輪A類と対応する。

(7) 人物埴輪腕

7は人物埴輪の左腕である。肩部と指の先端を欠失しており、現存長は11.8cmである。平成11年度3区（前方部西側隅角部外側）の客土内から出土した。

腕は板状粘土を丸めて綴じ、中空に製作する。手首から先は中実であり、別体製作して腕に接合したものであろう。指は粘土紐を用いて5本が独立した作りとなっている。外面調整は長手方向のユビナデ、内面は無調整でしぼり痕がある。

胎土は細砂を少量含み、石英、チャート、長石、酸化鉄粒、凝灰岩粒が観察される。焼成は良好だが、少し粉っぽい。色調はくすんだ淡黄褐色を呈する。



第77图 形象埴輪実測図(2)

2 動物埴輪

(8) 動物埴輪尻尾

8は手づくね製作で円錐形を成し、全体が少し彎曲している。形状から 動物埴輪の尻尾と推定する。小型なので馬ではなく猪か鹿に伴うものであろう。外面調整はユビナデである。平成9年度5区のK-10グリッド（後円部北側の埴裾部）から出土した。

胎土は細砂を少量含み、石英、チャート、長石、酸化鉄粒が観察される。焼成は軟質で、著しく粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。円筒埴輪A類と対応する。

(13) 馬形埴輪障泥部

13は断面から見て鞍の側面部で、垂直方向に低い凸帯を貼って吊り紐を、その内側に粘土を貼り付けて障泥を表現する。厚手の製作で、器厚は2.0cm前後ある。平成9年度5区のM-13グリッド（造り出し北側の内堀）から出土した。

外面調整はヨコハケ（4本／0.8cm）後に粘土を貼り付けて、ナデ調整を施している。内面調整は横位のナデである。胎土は細砂～粗砂をやや多く含み、チャート、凝灰岩粒、長石、石英、酸化鉄粒が観察される。焼成は普通で、少し粉っぽい。色調は外面橙褐色、内面くすんだ赤褐色を呈する。円筒埴輪C類と対応する。

(23) 馬形埴輪頭部

23は馬形埴輪頭部の左側板である。粘土紐を貼って面繫と手綱を表現する。9年度5区のM-15グリッド（造り出しの西側に接する内堀）から出土した。

円筒状の面部の側面に貼り付けた板状の部品で、上部は薄く、下部は厚くなっており、直線的な端部を有する。内面には円筒部からの剥離痕がある。外面調整は長手方向のナデ、内面調整はユビナデ及びユビ押さえである。面繫と手綱を表現する凸帯は幅が広く上面が平坦であり、布をあてがったヨコナデ調整を施している。胎土は粗砂をやや多く含み、石英、チャート、酸化鉄粒が観察される。焼成は普通で、粉っぽい。色調は淡褐色を呈する。円筒埴輪D類と対応する。

(24) 馬鈴

24は馬形埴輪に伴う馬鈴である。粘土粒で突起する珠文を表現するので鑄造品を模したものである。11年度1区外堀（前方部東側外堀隅角部）の攪乱耕作土中から出土した。

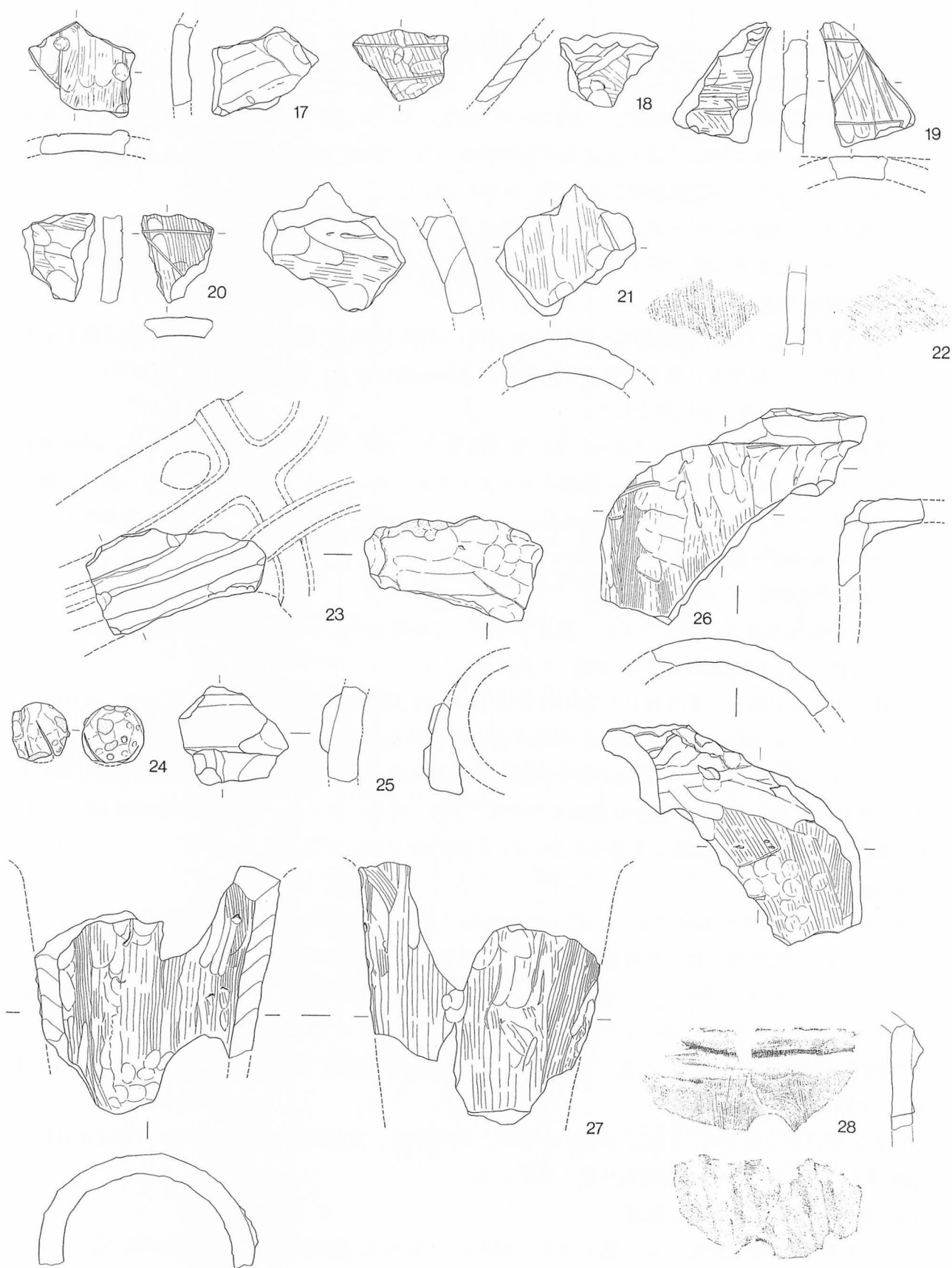
粘土を丸めて中実に製作し、ヘラ切りで下に向く鈴口を表現する。本体に接着する際に、接着面を増すために根本に粘土を巻いている。

外面調整のユビナデを施した後に、間隔を置いて扁平な円形粘土粒を貼り付けている。2個が残存し、6個は剥落している。

胎土は細砂を少量含み、石英、角閃石、長石、酸化鉄粒、凝灰岩粒が観察される。焼成は良好で、色調は茶褐色を呈する。円筒埴輪B類と対応する。

(25) 馬形埴輪の胸繫または尻繫

25は馬形埴輪の胸繫または尻繫となる。幅の広い帯から杏葉を吊るための紐が垂下している。11年度1区外堀のC-24グリッドから出土した。体部は厚手の製作で、器肉の厚さは2.2cmある。外面調整は丁寧なナデ、内面調整はタテハケ（13本／1.8cm）の後に斜位ユビナデを加えている。胎土は細砂を少量含み、チャート、凝灰岩粒、石英、酸化鉄粒が観察される。焼成は軟質で著しく粉っぽい。



第78図 形象埴輪実測図(3)

色調は外面が橙褐色、内面が赤褐色を呈する。円筒埴輪B類と対応する。

(26) 馬形埴輪脚部

26は動物埴輪の脚部の付け根部分で、大きさから見て馬であろう。上部での復原直径は20.65cmある。9年度5区のL-15グリッド（造り出し南側に接する内堀）から出土した。

成形は粘土紐巻き上げで、その上端部に板状の粘土を水平に載せており、左右の脚部を結合していたとみられる。また、接合部の内外に補強用の粘土を貼り足している。

外面調整はタテハケ（17本／3.5cm）の後に縦位のユビナデを付け根付近に重ねている。内面調整は脚部ではタテハケ（18本／3.2cm）で、胴部との接合部には横位ユビナデを加える。

胎土は細砂を少量含み、石英、チャート、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成は良好だが、少し粉っぽい。色調は淡茶褐色を呈する。円筒埴輪D類と対応する。

(27) 馬形埴輪脚部

27は動物埴輪の脚部で、大きさから見て馬であろう。付け根付近となる上部での復原直径は18.5cmあるが、下部は次第にすぼまっている。9年度5区のK-15～L-15グリッド（西側くびれ部と造り出しに挟まれた内堀）から出土した。

成形は粘土紐巻き上げで、胴部への付け根付近で剥離している。外面調整は2種のタテハケ（13本／2.1cm・6本／1.6cm）、内面調整はタテハケ（12本／2.7cm）で、部分的にユビ押さえを加えている。内面の粘土紐痕が少なく丁寧な調整といえる。胎土は細砂を少量含み、チャート、石英、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成は良好で、色調は外面灰黄褐色、内面くすんだ赤褐色を呈する。円筒埴輪D類と対応する。残存率は図の50%。

なお、26とは諸特徴が共通しており、同一個体である。

3 家形埴輪

(9) 堅魚木

9はほとんど幅の一定した円棒状の中実品で、上面が平坦面となっている。家形埴輪の堅魚木と推定する。幅は3.9cm、残存長は5.3cmで片方の端面を残している。平成11年度4区内堀（前方部南から西に接する内堀）の表土から出土した。

板状の粘土を丸めて成形し、外面は長手方向のユビナデ調整を施す。下面はユビ押さえ痕のみの未調整部を残す。ハケ目状に見えるのは作業台の木理圧痕である。

胎土は小礫から粗砂をやや多く含み、チャート、石英、凝灰岩粒、酸化鉄粒、長石、角閃石が観察される。焼成は普通で、粉っぽい。色調は橙褐色、器肉は黒色を呈する。円筒埴輪C類と対応する。

(10) 大棟

10は家形埴輪の大棟である。低い凸帯を貼って障泥板とし、これに直行する堅魚木の剥離痕が2箇所ある。屋根にはヘラ描き文があり、連続菱形文となろう。断面形は緩やかな曲線となっている。平成9年度4区のJ-11グリッド（後円部北側墳丘の上段部）から出土した。

成形は粘土紐積み上げ、外面調整はヨコハケ（3本／0.5cm）の後、丁寧な横位ナデを加える。内面は横位ナデ調整である。胎土は細砂を少量含み、石英、長石、チャート、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成は軟質で、著しく粉っぽい。色調は淡赤褐色、器肉は青灰色を呈する。諸特徴が『調査研究報告』第18号に報告した後円部墳頂部出土資料（129）と一致しており、同一個体で

ある。円筒埴輪A類と対応する。

(11) 屋根

11は家形埴輪の屋根部と推定する。傾斜角不明のため、平置き実測した。器肉は平板で分厚く、厚さが平均2.0cmある。平成9年度2区のE-12グリッド（後円部東側内堀）から出土した。

外面調整はナナメハケ（5本／1.4cm）の後、斜位ユビナデを施す。内面調整はナナメハケの後、横位の強いユビナデを加える。

胎土は細砂から粗砂を少量含み、凝灰岩粒、角閃石、チャート、石英が観察される。焼成は普通で、外面は著しく粉っぽい。色調は外面乳黄白色、内面灰褐色、器肉は灰黒色を呈する。ひび割れの溝の中に広く赤色顔料が残っていることから、外面の全面が赤色彩色されていたと推定できる。諸特徴が『調査研究報告』第16号に報告した後円部埴輪頂部出土資料（34～39）と一致しており、同一個体である。円筒埴輪A類と対応する。

(12) 屋根

12は家形埴輪の屋根部と推定する。傾斜角不明のため、平置き実測した。器肉は平板で分厚く、厚さが2.0～2.5cmある。平成9年度2区のJ-10グリッド（後円部北側埴丘下段部）から出土した。

成形は粘土紐積み上げ、外面調整はナナメハケ（7本／1.4cm）の後、横位と斜位のユビナデを施す。内面調整はヨコハケの後、強い横位ユビナデを加える。

胎土は細砂を少量含み、凝灰岩粒、石英、角閃石、チャート、長石、酸化鉄粒が観察される。焼成は普通で、外面は著しく粉っぽい。色調は外面黄白色、内面暗灰褐色、器肉は暗灰色を呈する。外面全体にわたって赤色顔料がわずかに残り、外面の全面が赤色彩色されていたと推定できる。諸特徴が11とともに『調査研究報告』第16号に報告した後円部埴輪頂部出土資料（34～39）と一致しており、同一個体である。円筒埴輪A類と対応する。

(14) 軒部

14は家形埴輪の軒隅角部である。平成9年度5区のM-13グリッド（造り出し北側の内堀）から出土した。軒は約60度の傾斜で立ち上がる。下端部には押縁を表現する幅の広い凸帯の剥離した痕がある。内面には壁体との接合面があり、軒と壁の間隙を埋めて固定するために粘土が貼り足されている。

外面調整はタテハケ（5本／1.0cm）の後、横位ユビナデを施す。内面には壁体の外面に施されていたナナメハケ（7本／1.1cm）の雌型圧痕が残る。

胎土は細砂～粗砂を少量含み、石英、チャート、角閃石、凝灰岩粒が観察される。焼成は良好だが、少し粉っぽい。色調は表面赤褐色、器肉は暗灰褐色を呈する。円筒埴輪B類と対応する。

(15) 家形埴輪壁体部

15は板状の形象埴輪片で厚さは2.0cmある。垂直を成す端面は接合面になっている。家形埴輪壁体隅角部と推定する。平成11年度3区のP-25グリッド（前方部西側の外堀隅角部）から出土した。

成形は長い粘土紐を垂直方向に何本か束ねて板状にする技法で、粘土紐接合痕は残していない。また、隅角での接合方法から見ても板作りに分類される。、端部内側には補強用の粘土が貼り足されている。外面調整は縦位ユビナデ、内面調整はナナメハケ（5本／1.1cm）の後に縦位ユビナデを加えている。

胎土は粗砂を多量に含み、チャート、石英、長石、酸化鉄粒、角閃石、凝灰岩粒が観察される。

焼成は普通で、著しく粉っぽい。色調は橙褐色を呈する。円筒埴輪C類と対応する。

(16) 高床建物埴輪の円柱～高床部

高床建物埴輪の円柱部と高床部を含む破片である。平成11年度4区のM-14グリッド（造り出し北側に接する内堀）から出土した。

粘土紐巻き上げ成形の円柱に、粘土紐を束ねて成形した板状粘土を水平に接合して高床部とする。高床部の厚さは2.3cmある。高床と円柱の間にはアングルのように粘土を貼り付けているが、床を支える貫板が突出している状態を表現したものであろう。

外面調整は任意方向のユビナデ、円柱部内側の調整は縦位ユビナデである。胎土は細砂を少量含み、石英、チャート、酸化鉄粒、凝灰岩粒、角閃石が観察される。焼成は軟質で、著しく粉っぽい。色調は淡黄褐色、器肉は淡青灰色を呈する。

諸特徴が『調査研究報告』第18号に報告した後円部墳頂部出土資料（142・147など）と一致しており、同一個体である。円筒埴輪A類と対応する。

4 器財埴輪

(17) 甲冑形埴輪の短甲豎板部

17は甲冑形埴輪の短甲豎板部である。上部で内側に彎曲するので短甲の正面上部の破片となる。9年度J-10グリッド（後円部北側墳丘下段）から出土した。

平行する2本のヘラ描き沈線を垂直に引いて豎板を表現し、その線上に直径1.0cm前後の扁平な円形粘土粒を貼り付けて鋳の表現を行っている。鋳は1個が剥落している。

成形は粘土紐巻き上げ、外面調整はタテハケ（6本／1.0cm）の後、縦位のユビナデ、内面調整は斜位ユビナデである。胎土は細砂を微量に含む精選土で、石英、チャート、酸化鉄粒が観察される。焼成は普通で、少し粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。円筒埴輪A類と対応する。

(18) 甲冑形埴輪の草摺部

18は直線的に広がる形状と沈線文から甲冑形埴輪の草摺部と推定する。9年度1区のC-7グリッド（後円部東側外堀隅角部より少し南側）から出土した。

粘土紐を巻き上げて成形するが、断面観察によると粘土紐接合面が通常と逆傾斜になっているので、倒立製作または上から下方に向かう連続成形が行われたと推測される。外面には2.5cm間隔で平行する2本の水平な沈線が引かれており、板鋳を表現したと推測される。外面調整はナナメハケ（6本／1.5cm）、内面調整はナナメハケ（6本／2.1cm）である。

胎土は粗砂を少量含み、石英、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成は普通で、粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。円筒埴輪A類と対応する。

(19) 盾形埴輪

19は横断面の形状と沈線文から盾形埴輪と推定する。平成16年度の整備工事の過程で出土し、採集した。

外面は平坦だが、内面が円筒状の曲線を成しているため、円筒の左右両側に板状粘土を貼り付けて製作した盾形埴輪の正面部に相当しよう。器肉の厚さは1.7cmある。外面には連続鋸歯文を描く。その筆順は連続する逆三角形の二辺を一筆書きで引いてから左辺を加えて完成させるというものである。赤色彩色などの痕跡はない。

外面調整はナメハケ（5本／1.3cm）の後に斜位のユビナデを加え、内面調整はヨコハケ（7本／1.3cm）の後に横位ユビナデを加えている。胎土は細砂を少量含み、石英、角閃石、長石、凝灰岩粒、チャートが観察される。焼成は良好だが、表面は少し粉っぽい。色調は表面の2mmほどは黄白色、器肉は黒色を呈する。円筒埴輪A類と対応する。

（20）鋸歯文のある形象埴輪片

20は鋸歯文のある形象埴輪片だが、盾とするには薄手である。文飾は人物埴輪の着衣表現の可能性もある。9年度1区のE-8グリッド（後円部東側内堀の隅角部）から出土した。

外面調整はタテハケ（9本／1.7cm）で部分的に縦位ユビナデを加え、内面調整はヨコハケ（6本／1.0cm）の後に斜位ユビナデを加えている。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、石英、長石、角閃石、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成は良好だが、表面は少し粉っぽい。色調は淡褐色、器肉は暗灰褐色を呈する。円筒埴輪A類と対応する。

（21）器種不明の器財埴輪

21は厚手の作りで、器形は上部が撫で肩状にすぼむ。器財埴輪の一部であろうが、種類を特定できない。9年度2区のF-12グリッド（後円部東側の墳丘に接した内堀）から出土した。

器肉の厚さは2.4cmあり分厚いが、復原直径は16cmと細い。半球形を成すとすれば柄もその候補となる。外面調整はタテハケ（8本／1.6cm）の後に縦位のユビナデを加え、内面調整はヨコハケ（9本／1.7cm）の後に横位ユビナデを加えている。

胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、石英、凝灰岩粒、長石、角閃石が観察される。焼成は良好だが、外側表面のみ粉っぽい。色調は表面は黄白色、器肉は灰黒色を呈する。なお、くぼんだ部分に赤色塗料が残っており、もとは外面の全面に赤色彩色されていた可能性がある。円筒埴輪A類と対応する。

（22）器種不明の器財埴輪

22は鋸歯文のある破片で、器財埴輪となる可能性が大きい種類を特定できない。11年度1区外堀（前方部東側外堀隅角部）から出土した。外面調整はタテハケ（10本／2.0cm）、内面調整はナメハケ（11本／2.0cm）である。

胎土は細砂を少量含む精選土である。凝灰岩粒、酸化鉄粒、石英が観察される。焼成は良好で、色調は淡橙褐色を呈する。

（28）形象埴輪台部

28は円筒部が少し内傾し、ドーム形の天井部を持つと推定される台部である。9年度5区のL-15グリッド（造り出し南側に接する内堀）から出土した。

円筒部は復原径が24.0cmあり、上端部に断面三角形の凸帯が巡る。また側面に復原直径2.8cmの小型透孔を穿っている。朝顔形円筒埴輪とは見なしにくく、形象埴輪の台部と推定する。人物埴輪出現期に多く見られる丈が低い全身像台部となる可能性もある。

外面調整はタテハケ（10本／2.0cm）、内面調整はナメハケ（11本／2.0cm）である。胎土は粗砂をやや多く含み、凝灰岩粒、チャート、酸化鉄粒、角閃石、長石、石英が観察される。焼成は良好で、色調は淡褐色、器肉は淡灰茶褐色を呈する。残存率は23%。円筒埴輪A類と対応する。

第7節 土製品・石製品

1 土製品

(1) 三環鈴形土製品A (第79図1)

鋳銅製の三環鈴を模した土製品で、手びねり中実製作。環体の外側に粘土を貼り足して別作りの鈴を接合する。鈴は粘土板の上で転がして成形しているため木目圧痕が残る。環体は上面のみハケ調整（7本／0.8cm）し、さらにユビナデを加えて仕上げている。鈴口は刀子で切り込んでから少しこじて開口させる。深さは0.7cmある。

復原図からの検討では、実物と比較した場合、鈴に対して環体の直径が大きい。鈴の直径は4.3cm、環体の復原外径10.4cm、同内径5.8cm、環体の幅2.8cm、同厚さ1.2cm。胎土には細砂を少量含み、石英・長石・凝灰岩粒・チャート・酸化鉄粒が観察される。焼成はやや軟質で粉っぽく、色調は淡黄褐色を呈する。

(2) 三環鈴形土製品B (第79図2)

Aより小型の製作である。手びねり中実製作。環体の外側に粘土を貼り足して別作りの鈴を接合する。製作技法はAと共通するが、仕上げはユビナデ調整によっており、ハケ調整を伴わない。鈴口は刀子で切り込んでから少しこじて開口させる。深さは0.6cmある。

復原図からの検討では、実物に近い法量と形態を示す。鈴の直径は3.8cm、環体の復原外径6.9cm、同内径2.9cm、環体の幅2.0cm、同厚さ1.3cm。胎土には粗砂をやや多く含み、チャート礫・石英・長石・凝灰岩粒・酸化鉄粒が観察される。これらのうち、チャート礫が特に目立つ。焼成は普通だが少し粉っぽく、色調は淡褐色を呈する。

(3) 餅形土製品 (第79図3)

扁平で楕円形（舌形）の粘土塊をV字形に交差させて5枚を貼り合わせている。下面に剥離痕があるので6枚以上で構成されていたことがわかる。粘土塊は幅4cm前後、長さ6.5～8.0cm、厚さは0.9cm前後で、かすかに残る木目圧痕から粘土板に押しつけて扁平にし、周縁部を丸く調整し、両面にユビナデを加えて仕上げたことが分かる。

粘土塊1枚ずつ外側の周縁部に赤色彩色を施し、かなり乾燥した段階で、貼り合わせている。1枚ずつ形状を明瞭に示そうとする意図があったようである。しかし接合が弱かったために全点が剥離する結果を引き起こしている。胎土には粗砂をやや多く含み、チャート・石英・長石・凝灰岩粒・酸化鉄粒・片岩が観察される。これらのうちチャートが特に目に付く。焼成は軟質で粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。

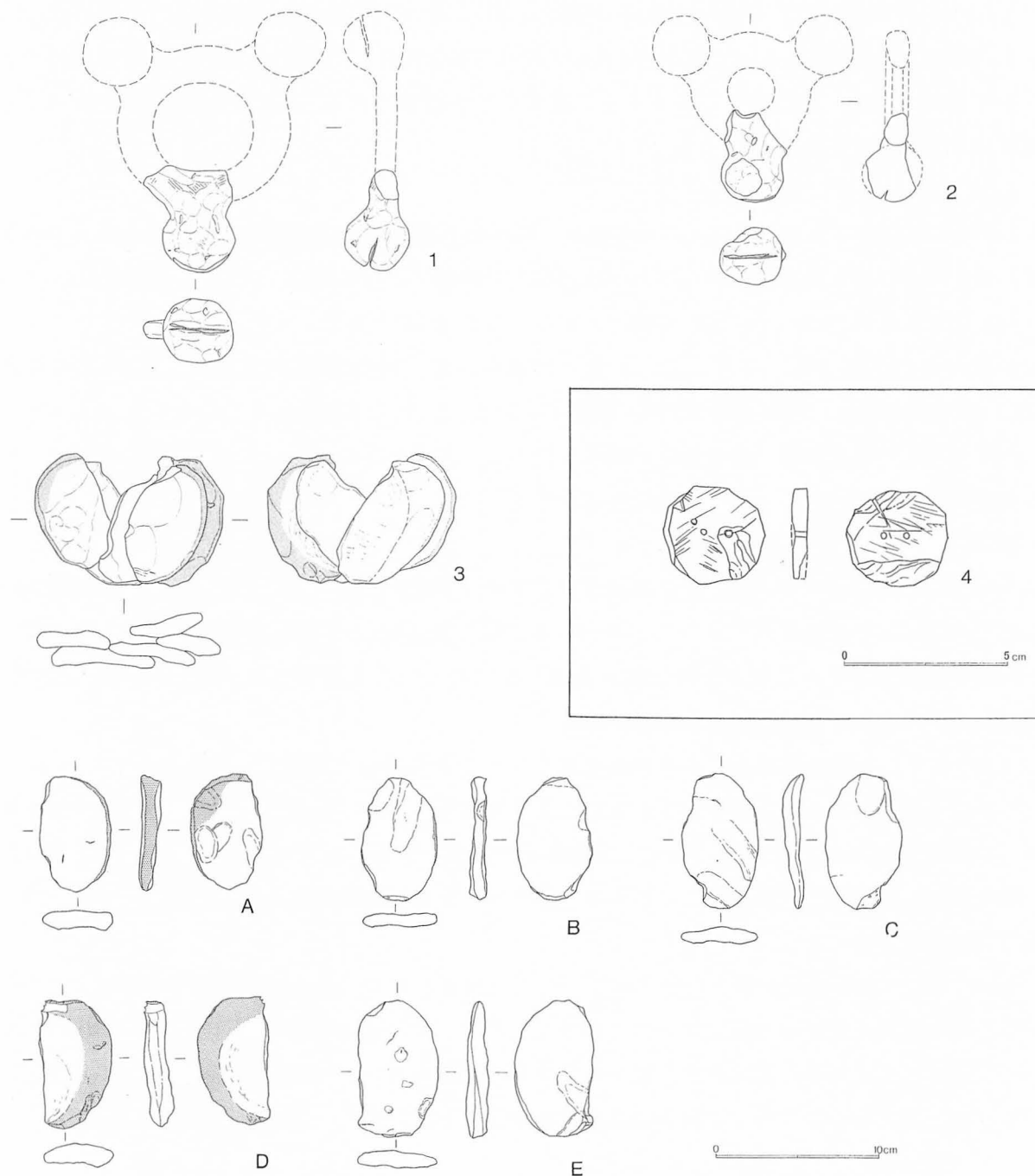
V字形の谷部に他の部品が組み合わされていないか検討したが、接合痕は確認できない。このことから、舌形の餅を意匠的な盛り付け方で重ねたもので、それは縁が赤く着色されたものであったらしい。形状と大きさから高坏の中に置かれていた可能性が高い。付近から土師器細片が出土していることが証左となる。ただし土師器は復原できるほどの量はなく、攪乱によって失われたらしい。

2 石製品

滑石製有孔円板 (第79図4)

双孔式の有孔円板である。平成10年度の調査時、前方部西側隅角部付近のM-21グリッドで採

集された。暗緑色の蛇紋岩製で、表裏とも研磨条痕が残る。側縁部も研磨するが、多角形状を呈している。穿孔は片面から同一直径で上手に行っているが、表面には途中まで開けた他の孔がある。表面の窪みは未調整部、裏面の下辺は2次的剥離である。直径は3.0cm、厚さは0.5cmを測る。



第79図 土製品・石製品実測図

第8節土師器・須恵器

今回の一連の発掘調査で出土した土師器で、形状が図示できるのは、坏と高坏である。坏は須恵器を模倣したもので、高坏は図示に至らなかった大型品がある。以下観察表にて報告するが、一部、さきたま資料館が『調査研究報告13』（2000）で報告したものを再掲する。

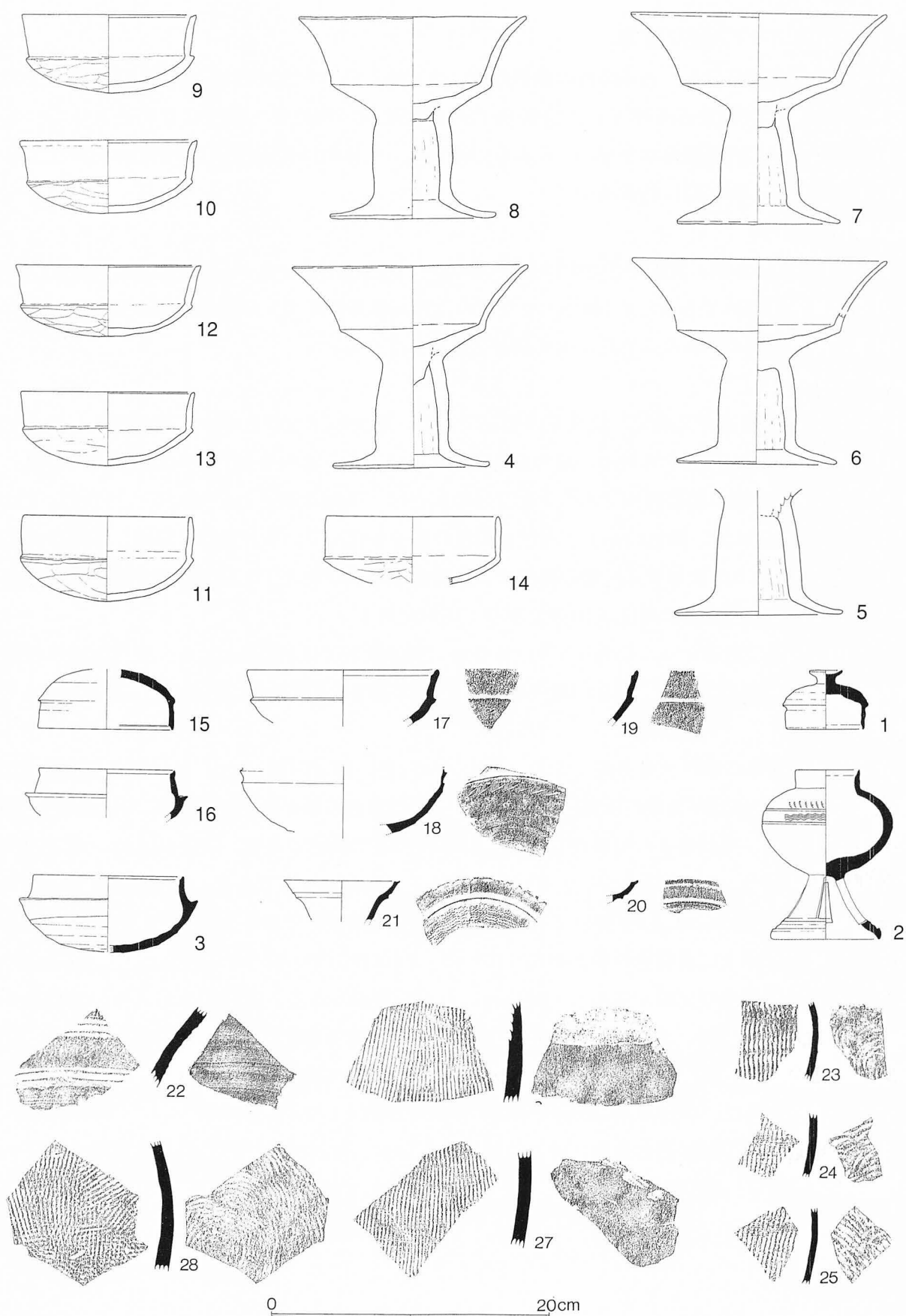
土師器観察表（寸法の項目 H：高さ D：口縁部径 カッコ内は推定値）

No.	器種	寸法・遺存率	器形の特徴	成形と調整・焼成	胎土・色調	備考
9	坏	H:5.6 cm D:12.5 cm 口縁～底部を約半周欠く。	須恵器の坏を模倣した土師器。浅い丸い底部から、わずかに外方に開く口縁部が付く。口縁端部にはわずかに内傾する端面が形成される。	底部外面は中央を一定方向にヘラクスリ後、周囲を外周に沿うようにヘラクスリ、内面はナデ。口縁部内外ともヨコナデ。	にぶい 橙・2.5YR6/4～橙 6/6	底部は他の坏よりやや厚い。 H9 年度 1 区出土。
10	坏	H:5.2 cm D:12.7 cm 口縁部半周と底部を若干欠く。	9とほぼ同様だが、口縁端部は小さく外反している。	同上。	にぶい 橙・5YR7/4～橙 2.5YR6/6	H9 年度 1 区出土。
12	坏	H:5.2 cm D:13.3 cm 口縁部～底部を若干欠く。	9とほぼ同様。	同上。	橙・2.5YR6/8	調研報 13・図 6-2 H9 年度 1 区出土。
13	坏	H:5.3 cm D:12.5 cm 口縁部 4/5 と底部 1/3 を欠く。	9とほぼ同様。口縁端部は薄く作られており、端面の幅は狭い。	同上。	橙・2.5YR6/6	内外摩滅。 底部外面に黒斑あり。 H9 年度 1 区出土。
11	坏	H:6.1 cm D:12.3 cm 口縁部 1/4 周を欠く。	須恵器の坏を模倣した土師器。浅い丸い底部から、ごくわずかに内湾傾向の直立した口縁部が付く。口縁端部は端面を作らず、薄く鋭く仕上げている。	同上。	橙・2.5YR6/6	調研報 13・図 6-1 H9 年度 5 区出土。
14	坏	(D:12.5 cm) 口縁～底部約 1/5 周遺存。	底部は 11 に比べて浅い。口縁部はほぼ直立しており、端部は丸く仕上げている。	同上。 口縁端部はシャープにつまみながらナデ。	橙・5YR6/6 微細砂含む。	H9 年度 5 区出土。
7	高坏	H:15.2 cm D:18.4 cm 坏部 1/5 と脚端部 1/4 を欠く。	坏部と脚部は「ほぞ」で接合している。坏部は底部に緩く屈曲した外湾する口縁部が付く、口縁端部を丸く仕上げている。脚部は、わずかに中膨らみの筒状で裾を断面「く」の字に強く屈曲させ、端部を丸く仕上げている。	坏部の口縁部内外はヨコナデ、底部内外はナデ。脚部筒状部分は外面ナデ、内面はヨコにヘラクスリ。裾部は内外ヨコナデ。	黄 橙・7.5YR7/8	内外摩滅。 調研報 13・図 6-3 H9 年度 1 区出土。
4	高坏	H:14.6 cm (D:16.9 cm) 坏部 3/5 を欠く。 脚部 1/2 を欠く。	7と同様の作りをしている。脚裾部への屈曲度は7より強く、断面は「L」字形に近い。	同上。	橙・2.5YR6/8	同上。調研報 13・図 6-4 H9 年度 1 区出土。
8	高坏	H:14.5 cm D:16.4 cm 坏部 3/4 と脚部を部分的に欠く。	7と同様の作りをしている。坏部の開き方は7、4と比べてわずかに弱く、脚は裾部が断面「L」字形に近い。	同上。	にぶい 橙・7.5YR7/4	同上。調研報 13・図 6-5 H9 年度 1 区出土。
6	高坏	坏部は底部のほぞ組部分のみ遺存。脚裾 1/5 を欠く。	7と類似の形状になるものと思われる。	同上。	橙・5YR6/6	同上。調研報 13・図 6-6 H9 年度 1 区出土。
5	高坏	脚部のみ 3/4 周遺存。坏部はほぞ組部分で脱落。	同上。	筒部は外面ナデ、内面ヨコにヘラクスリ。裾は内外をヨコナデ。	橙・5YR6/6	同上。調研報 13・図 6-7 H9 年度 1 区出土。

須恵器は、器形が判明し図示できたのは、脚付き短頸壺と坏・高坏がある。その他、器形の判明しているものに甕や甗がある、小破片であるが、以下観察表にて一緒に報告する。一部、さきたま資料館が『調査研究報告11』（1998）で報告したものを再掲する。

須恵器観察表（寸法の項目 H：高さ D：口縁部径 カッコ内は推定値）

No.	器種	寸法・遺存率	器形の特徴	成形と調整・焼成	胎土・色調	備考
1 2	有蓋 脚付き短 頸壺	壺・H:12.1 cm D:4.6 cm、破損 するが完形に復 原できた。 蓋・H:4.2 cm D:5.6 cm 口縁 部 1/3 周欠く。	体部は扁平な無花果形で直立する短い口縁端部内面に鈍い段を形成している。最大径部分の沈線区画中に波状文を、その上部に櫛描き列点文を施文する。脚は裾に鈍い凸線が1条巡り、端部は上下に鈍く突出させている。上が狭く下が広い長方形（長台形）のスカシが4方向にあげられる。蓋は浅い半球形の天井に皿状のつまみが付き、口縁部はほぼ垂直で、内面に段を形成している。	壺底部と蓋の天井は小型品としては厚い。器表内・外ほぼ全面をヨナテ。スカシは面取りしていない。壺体部内面上位にホリメが残る。	暗 灰 (N3/-) ～ 灰 (10Y7/1・ N6/-・N7/-)	灰をかぶり、各所に自然釉が付着する。 調研報 11・図 3-1 H9年度5区出土。
3	坏	D:10.8 cm H:5.5 cm 口縁～底約 1/3 を欠く。	底部は受部から丸く作る。口縁部はわずかに外反気味に内傾しており、端面は内傾してシャープさを欠いている。	底部外面は受部の先端から1～1.5 cmを残して回転ヘラクスリ。他の部分は内外ヨナテ。ロクロは右回転。	灰(N6/-)	調研報 11・図 3-3 H9年度5区出土。
16	坏	(D:10 cm) 口縁部 1/10 周遺 存。	端面は内傾している。		灰(N6/-)	調研報 11・図 3-4 H9年度5区出土。
15	坏蓋	(D:9.8 cm) 天井～口縁部 1/5 周遺存。	端面は内傾している。	天井外面約 3/5 を回転ヘラクスリ。他は内外ヨナテ。ロクロ左回転。	灰(N6/-)	調研報 11・図 3-2 H9年度5区出土。
17	無蓋 高坏	(D:14 cm) 口縁部 1/10 周遺 存。	端面は鈍く、内傾する。外面の凸線下に櫛描波状文。	やや厚みを感じる。	灰(N6/-)	調研報 11・図 3-5 H9年度1区出土。
18	無蓋 高坏	底部破片。	外面の2条の凸線下に櫛描波状文。	外面の回転ヘラクスリの範囲は約 1/2 程度。	灰(N5/-)	調研報 11・図 3-7 H9年度1区出土。
19	無蓋 高坏	口縁部破片。	外面の2条の凸線下に櫛描波状文。	外面の回転ヘラクスリの範囲は約 1/2 程度。	灰(N5/-)	調研報 11・図 3-7 H9年度1区出土。
20 21	ハツ	口縁部破片。 (20・D:14 cm) (21・D:8.4 cm)	20は口縁部外面直下に、21は凸線直下に櫛描波状文を施す。ともに内面に端面を作り出している。		20・黒 褐 7.5YR3/1 21・黒 10Y6/1	調研報 11・図 -9(20)・ 3-8(21) H9年度5区出土。
22	甕	口縁部破片	外面に2本で1単位となる凸線間に櫛描波状文が施される。	内外面ヨナテ。		H11年度1区出土。
26 27 28	甕	体部破片	中～大型の甕と思われる。	外面は平行タタキ。内面は26・27は同心円文をすり消すか？。28は消されずに残る。		H11年度4区出土。
23 24 25	甕	体部破片	器厚が薄く小型の甕と思われる。	外面は平行タタキ。内面は同心円文をナテている。		H11年度4区出土。



第 80 図 土器実測図・拓影図

第9節 その他の遺物

稲荷山古墳の調査では、古墳時代の遺物の他に縄文時代と中・近世から現代の遺物が出土している。現代の陶磁器類などを除くと、合計69点の縄文土器・陶磁器・古銭などが出土しているが、小破片が多く実測可能個体は少ない。これらの遺物は、全体的に後円部西側の表土から出土する傾向にある。以下、時代順に特徴を記す。

縄文時代

4点出土しているが、実測できたのは2点である。1は諸磯C式から十三菩提式の古式の様相が見られる深鉢胴部破片である。2は阿玉台I b式の深鉢口縁部破片で、中堤の西側から出土している。口縁部に隆帯と刻みがあり、竹管による角押文を施している。

中世

3はB1類の青磁連弁文碗で、龍泉窯の製品である。連弁の下端がわずかに確認でき、胎土は灰白色で薄青色の釉が内面から外面の高台部まで掛かっている。高台を欠損した底部破片である。13世紀。4は常滑の甕の胴部破片である。胎土は暗灰色で、明瞭な敲き目が見える。13世紀。5は口径11cmのかわらけで、褐色の胎土に赤色と黒色の粒子を含んでいる。全体に摩滅しており、15世紀に比定できる。6は大釜様式後期の播鉢で、灰褐色の軟弱な胎土で、器面はやや赤みのある暗褐色を呈している。刷毛目の単位は10条である。16世紀後半。

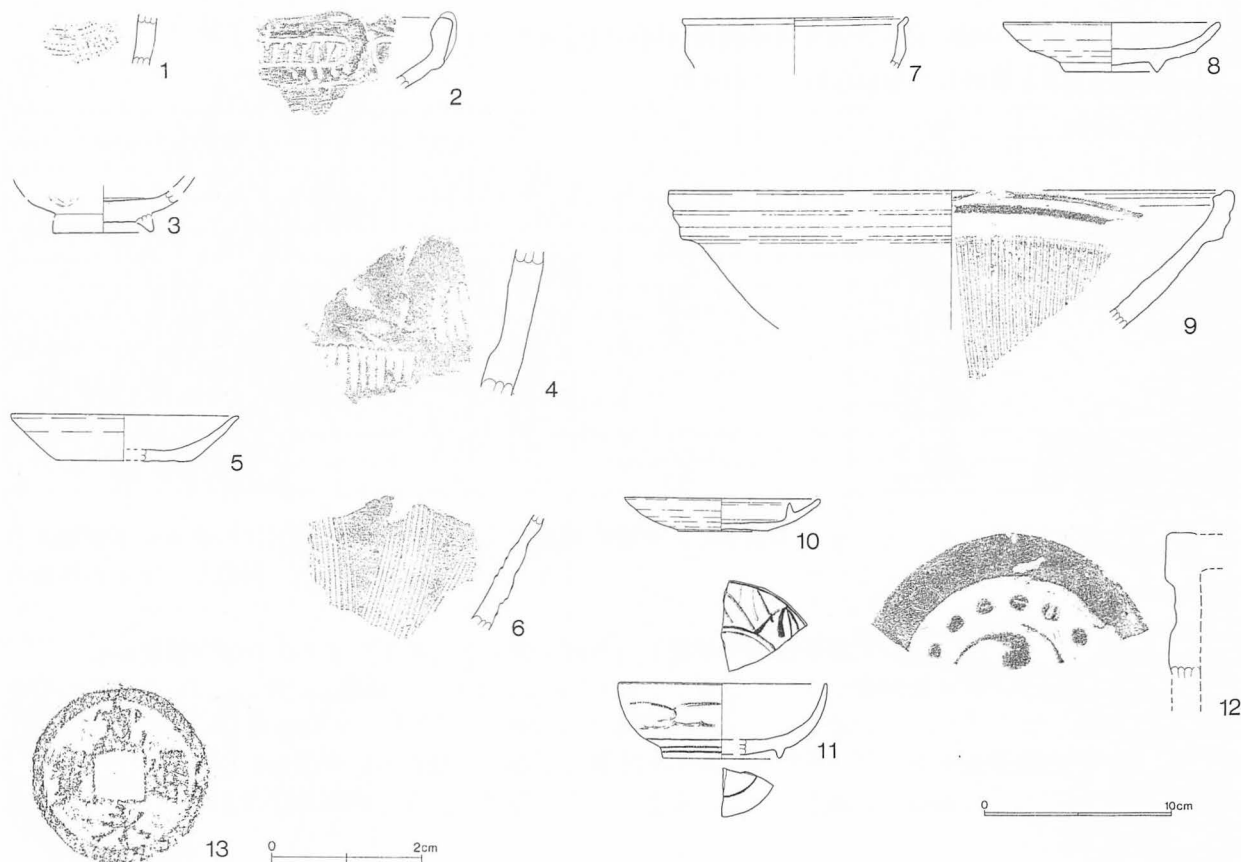
この他に図化できなかった小破片が8点あるが、個体識別では5個体となる。12世紀後半の渥美焼の壺・13世紀中葉の山茶碗系片口鉢・13世紀後半の在地系瓦質片口鉢などが出土している。

近世

7は17世紀前半の瀬戸天目茶碗である。胎土は灰白色。推定口径12cm。他に天目の破片が1片出土している。8は瀬戸美濃の灰釉皿で、底部以外は薄緑色の釉が掛かっている。内面には部分的に貫入が見られ、重ね焼きの痕跡がある。胎土は灰白色で緻密である。口径10.5cm・器高2.6cmで17世紀であろう。9は赤褐色を呈する信楽の播鉢で、口縁部破片である。小石が混じる胎土で焼成は良好で、口縁内面に隆帯を持っている。17世紀から18世紀であろう。10は瀬戸美濃の灯明受皿で、灰褐色の胎土に茶褐色の釉が掛かっている。11は伊万里の碗で、灰白色の緻密な胎土である。内外面に濃紺色の文様が描かれ、見込みに二重の圈線がある。粗い貫入が入り、時期的には19世紀。12は軒丸瓦で、瓦当径は推定15cm。暗灰色を呈する砂質で軟弱な胎土である。右巻きの三巴で、連珠は16珠である。この他に平瓦破片が2点出土している。13は寛永通宝。

以上の遺物の他に、中近世の陶磁器や焙烙の小破片が出土している。

なお、中近世遺物は該期の遺構に伴うものではないが、後円部北側50mほどに近世の溝の一部が確認されており、遺物の出土分布からも近世遺物に関しては、この溝との関わりが考えられる。



第81図 その他の遺物実測図

第10節 埴輪の胎土分析

藤根 久・長友純子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

土器の胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われる場合が多い。しかしながら、例えば胎土中に含まれる岩石片の特徴から、これら砂粒物の示す地域がいずれであるかを推定することは容易でない。

土器胎土は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、粘土材料は比較的良質とも思える粘土層から採取されたことが、粘土採掘坑の調査から推察される（藤根・今村、2001）。

一方、混和材としての砂粒物は、これら粘土採取の際に粘土層の上下層に分布する砂層などを採取したことが予想される。東海地域には、弥生時代後期の赤彩を施したパレススタイル土器が知られているが、これら3分の1程度の土器では、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれるが（藤根、1996；車崎ほか、1996）、これら火山ガラスは、粘土採取の際に上下層に分布したと思われるテフラ層と予想される。このように、胎土中の混和材は、砂層の特徴である可能性が高く、現河川砂とは大きく異なることから、現在の河川砂との比較では問題が大きい。こうしたことから、以前に堆積した段丘堆積物の砂層などとの比較検討が必要と思われる。土器胎土については、第一に土器に使用した粘土や混和材がどのような特徴を持つかを十分理解することが重要であり、こうした特徴を持つと思われる粘土層や砂層などと比較検討すべきと考える。

稲荷山古墳の調査では、円筒埴輪や朝顔形円筒埴輪が出土しているが、法量や段数など形状などの点で互いに異なった個体が存在している。ここでは、これら稲荷山古墳から出土した埴輪胎土について、これら胎土の粘土あるいは砂粒物の特徴について調べた。

2 試料と方法

試料は、稲荷山古墳から出土した埴輪10試料と二子山古墳および大稲荷1号墳の各1試料である（表1）。

これら埴輪は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片を作成した。

第1表 胎土材料を検討した埴輪試料とその特徴

分析No.	古墳名	種類	図版No.	分類	表面	側面
1	稲荷山古墳	円筒埴輪	1	A1	灰白色 7.5Y 8/2	灰白色 7.5Y 8/2
2		円筒埴輪	2	A3	灰白色 10YR 8/2	灰白色 5Y 8/1
3		朝顔形円筒埴輪	3	A3朝顔	淡黄色 2.5Y 8/3	淡黄色 2.5Y 8/3、中心 灰色 5Y 6/1
4		朝顔形円筒埴輪	4	A4朝顔	橙色 5YR 6/6	淡黄色 7.5Y 8/3
5		円筒埴輪	5	B3	橙色 2.5YR 6/6	褐色 7.5YR 4/4
6		朝顔形円筒埴輪	6	B1朝顔	橙色 2.5YR 6/6	明赤褐色 2.5YR 5/6
7		朝顔形円筒埴輪	7	C1朝顔	橙色 5YR 6/6	灰白色 2.5Y 7/1
8		円筒埴輪	8	D1	橙色 5YR 6/6	明黄褐色 10YR 6/6
9		円筒埴輪	9	D3	にぶい橙色 10YR 7/4	にぶい黄褐色 10YR 6/3
10		円筒埴輪	10	C2	にぶい橙色 10YR 7/4	淡黄色 2.5Y 8/3
11	二子山古墳	円筒埴輪	11	方形スカシ	にぶい橙色 5YR 7/4	浅黄褐色 2.5Y 7/3
12	大稲荷1号墳	円筒埴輪	12	3番	灰白色 7.5Y 8/2	浅黄褐色 2.5Y 7/3

- (1) 試料は、始めに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥した。全体にエポキシ系樹脂を浸させ固化処理を行った。これをスライドガラスに接着し平面を作成した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。
- (2) さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドガラスに接着した。
- (3) その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。
- 各試料は、偏光顕微鏡を用いて、薄片全面について微化石類（珪藻化石、骨針化石、孢子化石）や大型粒子などの特徴について観察・記載を行った。なお、ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。

[珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは10～数百 μm 程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。最近では、小杉（1988）や安藤（1990）によって環境指標種群が設定され、具体的な環境復原が行われている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石（淡水種）と分類し、同定できないものは珪藻化石（?）とした。なお、各胎土中の珪藻化石は、その詳細を記載した。

[骨針化石]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても日本において23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。

[植物珪酸体化石]

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なり、主に約10～50 μm 前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や垂鈴型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

[孢子化石]

孢子状粒子は、珪酸質と思われる直径10～30 μm 程度の小型無色透明の球状粒子である。これらは、水成堆積中で多く見られるが、土壌中にも含まれる。

[石英・長石類]

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く一括して扱う。なお、石英・長石類（雲母）は、黄色などの細粒雲母類が包含される石英または長石類である。

[長石類]

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、

細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などのSiO₂%の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。カコウ岩などのSiO₂%の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。なお、雲母類のみが複合した粒子を複合雲母類とした。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビールびんのような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。SiO₂%が少ない深成岩、SiO₂%が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてSiO₂%が中間から少ない火山岩によく見られ、SiO₂%の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のようなSiO₂%が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。

[ガラス質]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄くて湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物と考える。なお、濁ガラスは、非晶質でやや濁りのあるガラスで、火山岩類などにも見られるものをいう。

[凝灰岩質]

凝灰岩質は、ガラスや鉱物、火山岩片などの火山砕屑物などから構成され、非晶質でモザイックな文様構造を示す。起源となる火山により鉱物組成は変わる。

[斑晶質・完晶質]

斑晶質は斑晶（鉱物の結晶）状の部分と石基状のガラス質の部分が明瞭に確認できるもの、完晶質は、ほとんどが結晶からなり石基の部分が見られないか、ごくわずかのものをいう。これらの斑晶質、完晶質の粒子は主として玄武岩、安山岩、デイサイト、流紋岩などの火山岩類を起源とする可能性が高い

[複合鉱物類]

構成する鉱物が石英あるいは長石以外に重鉱物を伴う粒子で、雲母類を伴う粒子は複合鉱物類（含雲母類）、輝石類を伴う粒子を複合鉱物類（含輝石類）、角閃石類を伴う粒子を複合鉱物類（角閃石類）とした。

[複合石英類]

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01mm未満のものを微細、0.01～0.05mmのものを小型、0.05～0.1mmのものを中型、0.1mm以上のものを大型と分類した。また、等粒で小型の長石あるいは石英が複合した粒子は、複合石英類（等粒）として分類した。この複合石英類（等粒）は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考える。

[片岩類]

複合石英類は石英の集合している粒子で、これら粒子が片理状組織を示す場合は片岩類とした。

[砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質とし、約0.06mm未満のものを泥岩質とする。

[不透明・不明]

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明とする。

3. 結果

土器胎土中の微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。なお、表2の微化石類および砂粒の出現頻度は、◎が特徴的に多い、○が多い、△が少ない、空欄は検出されないことを示す。鉱物は、+++が特徴的に多い、++が多い、+が少ないが含まれている、である。

No.1：60-800 μm 、最大粒径2.7mm。石英・長石類>複合石英類（微細）>斑晶質、砂岩質、片岩質、凝灰岩質、角閃石類、斜長石（累帯）、斜長石（双晶）、単斜輝石、ガラス質、珪藻化石（沼沢湿地付着生指標種群 *Pinnularia gibba*、*Eunotia preerupta* var.*bidens*、*Eunotia pectinalis* var.*undulata*、淡水種 *Pinnularia* 属多産、*Eunotia* 属多産、*Diploneis* 属、*Cymbella* 属）、骨針化石、胞子化石多産、植物珪酸体化石多産（ヨシ属多い）

No.2：90 μm -1.0mm、最大粒径1.7mm。石英・長石類>複合石英類（微細）>斑晶質、凝灰岩質、砂岩質、ガラス質、片岩質、斜長石（双晶）、斜長石（累帯）、単斜輝石、斜方輝石、珪藻化石（淡水種 *Eunotia monodon*、*Pinnularia* 属多産、*Eunotia* 属多産、*Cymbella* 属）、骨針化石、胞子化石多産、植物珪酸体化石多産（ヨシ属多い）

No.3：120 μm -1.0mm、最大粒径2.7mm。石英・長石類>複合石英類（微細）>斑晶質、雲母類、凝灰岩質、ガラス質、片岩質、斜長石（双晶）、斜長石（累帯）、単斜輝石、斜方輝石、珪藻化石（沼沢湿地付着生指標種群 *Eunotia pectinalis* var.*undulata*、淡水種 *Eunotia monodon*、*Pinnularia* 属多い、*Eunotia* 属多産、*Cymbella* 属）、骨針化石、胞子化石多産、植物珪酸体化石多産（ヨシ属多い）

No.4：120-900 μm 、最大粒径1.3mm。石英・長石類>複合石英類（微細）>斑晶質、凝灰岩質、ガラス質、片岩類、斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、単斜輝石、斜方輝石、珪藻化石（淡水種 *Pinnularia* 属、*Eunotia* 属）、骨針化石、胞子化石多い、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）

No.5：60-400 μm （やや細粒）、最大粒径1.0mm。石英・長石類>複合石英類（微細）>カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、凝灰岩質、ガラス質、単斜輝石、斜方輝石、雲母類、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い、黒色粒子多い

No.6：60-750 μm 、最大粒径1.2mm。石英・長石類>複合石英類（微細）>片岩類、斜長石（双晶）、砂岩質、斜方輝石、ガラス質、凝灰岩質、骨針化石、植物珪酸体化石多い（ヨシ属含む）、黒色粒子多い

No.7：80-800 μm 、最大粒径2.0mm。石英・長石類>複合石英類（微細）>斜長石（双晶）、砂岩質、凝灰岩質、ガラス質、単斜輝石、雲母類、珪藻化石（淡水種 *Cymbella* 属、*Nitzschia* 属、*Eunotia* 属、*Pinnularia* 属）、骨針化石、植物珪酸体化石多産多い（ヨシ属含む）、黒色粒子多い

No.8：80-750 μm 、最大粒径2.3mm。石英・長石類>複合石英類（微細）>複合石英類、斜長石（双晶）、砂岩質、片岩質、凝灰岩質、ガラス質、単斜輝石、ジルコン多い、角閃石類、雲母類、骨針化石、植物珪酸体化石、赤褐色粒子多産

No.9：120-750 μm 、最大粒径1.4mm。石英・長石類>複合石英類（微細）>斜長石（双晶）、砂岩質、複合石英類、凝灰岩質、雲母類、単斜輝石、角閃石類、ジルコン、ガラス質、植物珪酸体化石、赤褐色粒子多産

No.10：80 μm -1.2mm、最大粒径1.8mm。石英・長石類>複合石英類（微細）>カリ長石（パーサイト）、片岩類、複合石英類、単斜輝石、角閃石類、雲母類、凝灰岩質、ジルコン、植物珪酸体化石、赤褐色粒子多産

No.11：70-750 μm 、最大粒径3.4mm。石英・長石類>複合石英類（微細）>複合石英類、片岩類、ガラス質、単斜輝石、角閃石類、珪藻化石（淡水種 *Pinnularia* 属、不明種）、骨針化石、植物珪酸体化石多い、赤褐色粒子多い

No.12：80-750 μm 、最大粒径2.5mm。石英・長石類>複合石英類（微細）>複合石英類、片岩類、砂岩質、角閃石類、雲母類、ガラス質、珪藻化石（淡水種 *Pinnularia* 属、*Eunotia* 属多い、不明種多い）、骨針化石、胞子化石多産、植物珪酸体化石（ヨシ属含む）

第2表 埴輪胎土の粘土および砂粒物の特徴

分析No.	種 類	種 類	粘土の特徴						砂粒の特徴						鉱物の特徴				植物珪酸 体化石	出現頻度	その他特徴	材料の分類
			分類	種類	淡水種 珪藻化石	不明種 珪藻化石	骨針化石	胞子化石	分類	堆積岩類	深成岩類	テフラ	火山岩類	片岩類	凝灰岩類	ジルコン	角閃石類	輝石類	雲母類			
1	稲荷山古墳	円筒埴輪	○	淡水成	◎	◎	○	◎	C	○		△	△	△	△		+	++		◎		I
2		円筒埴輪	○	淡水成	◎	◎	○	◎	C	○			△	△	△		+	++		◎		I
3		朝顔形円筒埴輪	○	淡水成	◎	◎	○	◎	C	○		△	△	△	△		+	++	+	◎		I
4		朝顔形円筒埴輪	○	淡水成	○	△	○	○	C	○		△	△	△	△		+	++	+	◎		I
5		円筒埴輪	□	水 成			△	△	C	○		△			△		+	++	+	○	黒色粒子多い	IIa
6		朝顔形円筒埴輪	□	水 成			△		C	○		△		△	△		+	++		○	黒色粒子多い	IIa
7		朝顔形円筒埴輪	○	淡水成	△		△		C	○		△			△		+	++		○	黒色粒子多い	IIa
8		円筒埴輪	□	水 成			△		C	○	△			△	△	++	+	++	+	○	赤褐色粒子多産	IIb
9		円筒埴輪	—	その他					C	○	△	△		△	△	++	+	++	+	△	赤褐色粒子多産	IIb
10		円筒埴輪	—	その他					C	○	△	△		△	△	++	+	++	+	△	赤褐色粒子多産	IIb
11	二子山古墳	円筒埴輪	○	淡水成	○		△		C	◎	△	△		△			+	++	+	○	黒色粒子多い	IIc
12	大稲荷1号墳	円筒埴輪	○	淡水成	○	○	△	◎	C	◎	△	△		△			+	++	+	○	黒色粒子多い	IIc

4 考察

i) 微化石類による材料粘土の分類

検討した胎土中には、その薄片全面の観察から、珪藻化石や骨針化石などが検出された。これら微化石類の大きさは、珪藻化石が10～数100 μm（実際観察される珪藻化石は大きいもので150 μm程度）、骨針化石が10～100 μm前後である（植物珪酸体化石が10～50 μm前後）。一方、碎屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9 μm以下、シルトが約3.9～62.5 μm、砂が62.5 μm～2mmである（地学団体研究会・地学事典編集委員会編、1981）。このことから、植物珪酸体化石を除いた微化石類は胎土の材料となる粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれているものの、製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した胎土は、粘土部分に含まれる微化石類により、a) 淡水成粘土を用いた胎土、b) 水成粘土を用いた胎土、c) その他粘土を用いた胎土、に分類された。以下では、分類された粘土の特徴について述べる。

a) 淡水成粘土を用いた胎土（7胎土）

これらの胎土中には、淡水種珪藻化石が含まれていた。特に、No.1～4の胎土中には、沼沢湿地付着生指標種群など淡水種珪藻化石が多く含まれていた。No.11およびNo.12においても比較的淡水種珪藻化石が多く含まれていた。

b) 水成粘土を用いた胎土（3胎土）

これら胎土中には、骨針化石のみが含まれていた。

c) その他粘土を用いた胎土（2胎土）

これら胎土中には、水成環境を指標する珪藻化石や骨針化石は含まれていなかった。

ii) 胎土中の砂粒組成による分類

ここで設定した複合鉱物類は、構成する鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。このため、各胎土中の鉱物、岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。

ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った（表2）。岩石の推定は、泥岩質や砂岩質あるいは複合石英類（微細）が堆積岩類、複合石英類が深成岩類、凝灰岩質が凝灰岩類、斑晶質が火山岩類、ガラス質がテフラ（火山噴出物）、片理複合石英類が片岩類である。さらに、推定した起源岩石は、表3の組み合わせに従って分類した。

胎土は、概ね堆積岩類を主体としたC群であった。ただし、火山岩類または深成岩類の砂粒を伴う胎土、凝灰岩類を伴わない胎土など、付随する砂粒組成に若干の違いが見られた。なお、堆積岩類のほか、テフラや片岩類の砂粒は概ね普遍的に含まれている砂粒であった。

第3表 試料中の岩石片の分類と組み合わせ

			第1出現群						
			A	B	C	D	E	F	G
			片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第2出現群	a	片岩類		Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab		Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc		Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd		Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De		Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef		Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg	

iii) 胎土材料の特徴

土器胎土の粘土材料は、粘土部分に含まれていた珪藻化石や骨針化石といった微化石類から、淡水成粘土（7胎土）、水成粘土（3胎土）、その他粘土（2胎土）に分類された。一方、混和材と思われる砂粒組成は、堆積岩類を主体としたC群であった。粘土の種類および砂粒組成から、ⅠおよびⅡa～Ⅱdに分類される。

分類Ⅰの胎土は、堆積岩類を主体とした火山岩類やテフラあるいは凝灰岩類や片岩類を伴う砂粒組成であり、同時に沼沢湿地付着生指標種群などの淡水種珪藻化石を多量に含む特徴的な粘土からなる。

分類Ⅱは、大きくは堆積岩類を主体とした砂粒組成であるが、粘土の種類あるいはその他砂粒組成の違いから細分した。なお、この分類Ⅱの胎土はいずれも黒色あるいは赤褐色粒子を多く含む特徴がある。

分類Ⅱaの胎土は、火山岩類あるいは深成岩類を伴わない砂粒組成であり、概ね珪藻化石を含まない水成粘土からなる。なお、これらの胎土中には黒色粒子が多く含まれる。

分類Ⅱbの胎土は、火山岩類を伴わないが、深成岩類を伴う砂粒組成であり、水成粘土あるいはその他の粘土からなる。なお、これらの胎土中には赤褐色粒子が非常に多く含まれる。

分類Ⅱcの胎土は、火山岩類および凝灰岩類を伴わないが、深成岩類を伴う砂粒組成であり、淡水種珪藻化石を含む淡水成の粘土からなる。なお、これらの胎土中には黒色粒子が多く含まれる。

さて、埴輪生産を考えた場合、地域が大きく異なれば粘土の種類あるいは砂粒組成に違いがあることが容易に想像されるが、採取した粘土層あるいは砂層により同一地域においても材料の特徴は異なるものと考えられる。

ここで分類した胎土は、大きくは粘土の種類に違いが見られ、また砂粒組成においても若干の違いが見られたが、地域による違いなのか、利用した粘土層または砂層の層準の違いであるかは、不明である。

埼玉県鴻巣市の生出塚粘土採掘坑や馬室埴輪窯跡出土埴輪胎土の材料分析では、骨針化石のみを含む水成粘土からなり、堆積岩類や凝灰岩類を含み、深成岩類と火山岩類を伴う組成と伴わない組成が見出され、埴輪においてすら砂粒組成において若干の違いが見られた。なお、赤褐色粒子を含む胎土が多いが、含まない胎土も見られた（藤根・長友、2006）。こうした胎土の違いは、粘土層や混和材としての砂層などの組成の違いを反映していると考えられる。生出塚あるいは馬室埴輪窯から出土した埴輪胎土では、ここで分類したⅡaあるいはⅡbに近い組成と思われるが、ここで検討した胎土中には砂粒として火山岩類を伴わないこと、片岩類を伴うことなど違いが見られることから厳密には一致した組成とは言えない。

5. おわりに

検討した埴輪胎土は、大きくは粘土の種類に違いが見られ、また砂粒組成においても若干の違いが見られた。こうした胎土の特徴は、地域による違いなのか、利用した粘土層または砂層の層準の違いであるかは、明確ではない。埴輪は、窯により生産されることから、周辺地域に分布する埴輪窯から出土する埴輪胎土と比較することにより生産地の推定は可能と考えられる。

土器作りは、一般的に微化石類を良好に含むことから、相当良質の粘土層を利用したことが考えられるが、材料として利用した粘土層や上下に堆積する砂層の広域的な調査および分析が不可欠と考える。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用，東北地理，42，2，73-88.

地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）『増補改訂 地学事典』，平凡社，1612p.

地質調査所（1991）20万分の1地質図幅「宇都宮」，地質調査所

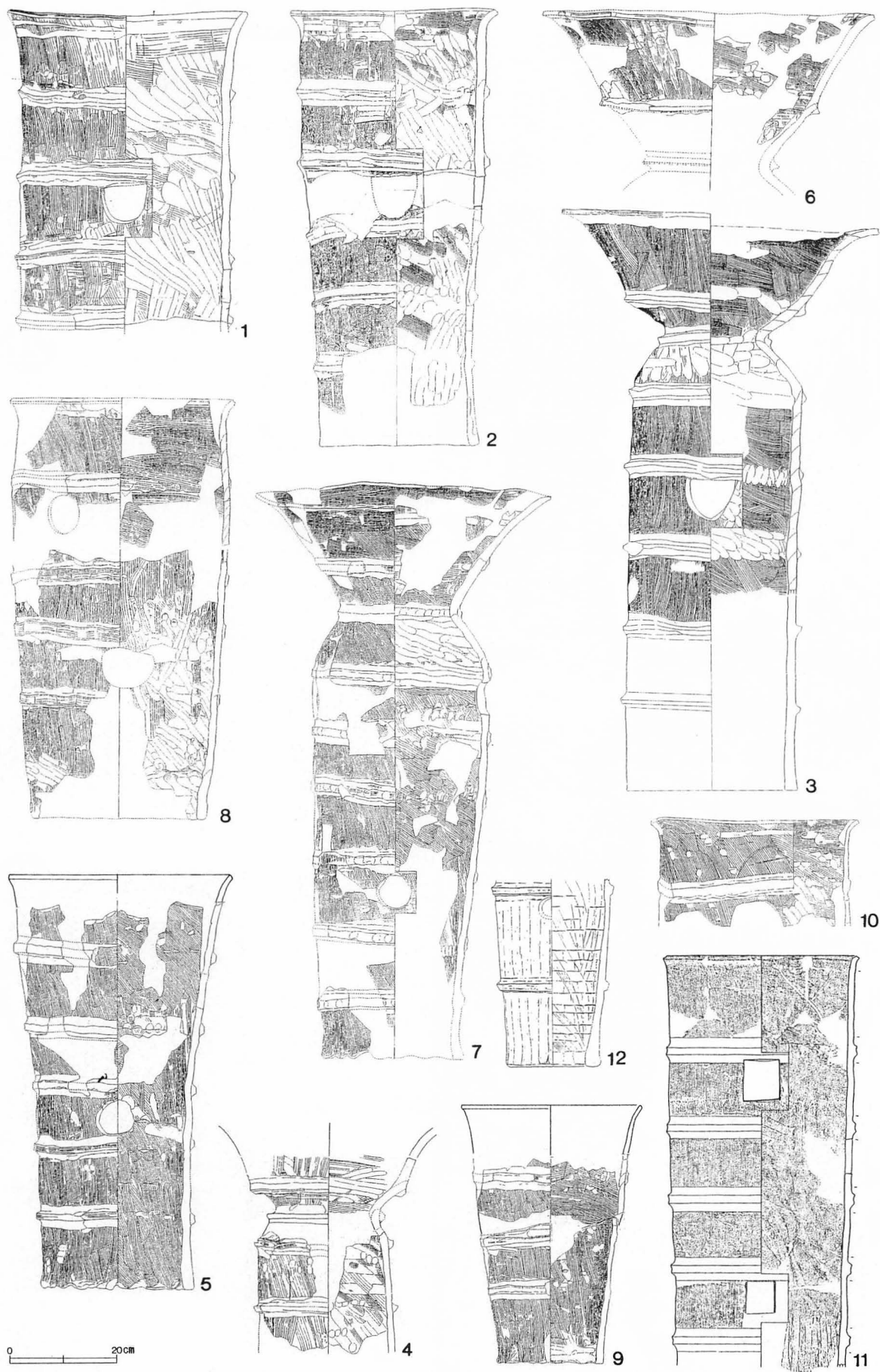
藤根 久（1998）東海地域（伊勢一三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料，第6回東海考古学フォーラム岐阜大会，土器・墓が語る，108－117.

藤根 久・今村美智子（2001）第3節 土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴，「波志江中宿遺跡」，日本道路公団・伊勢崎市・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団，262-277.

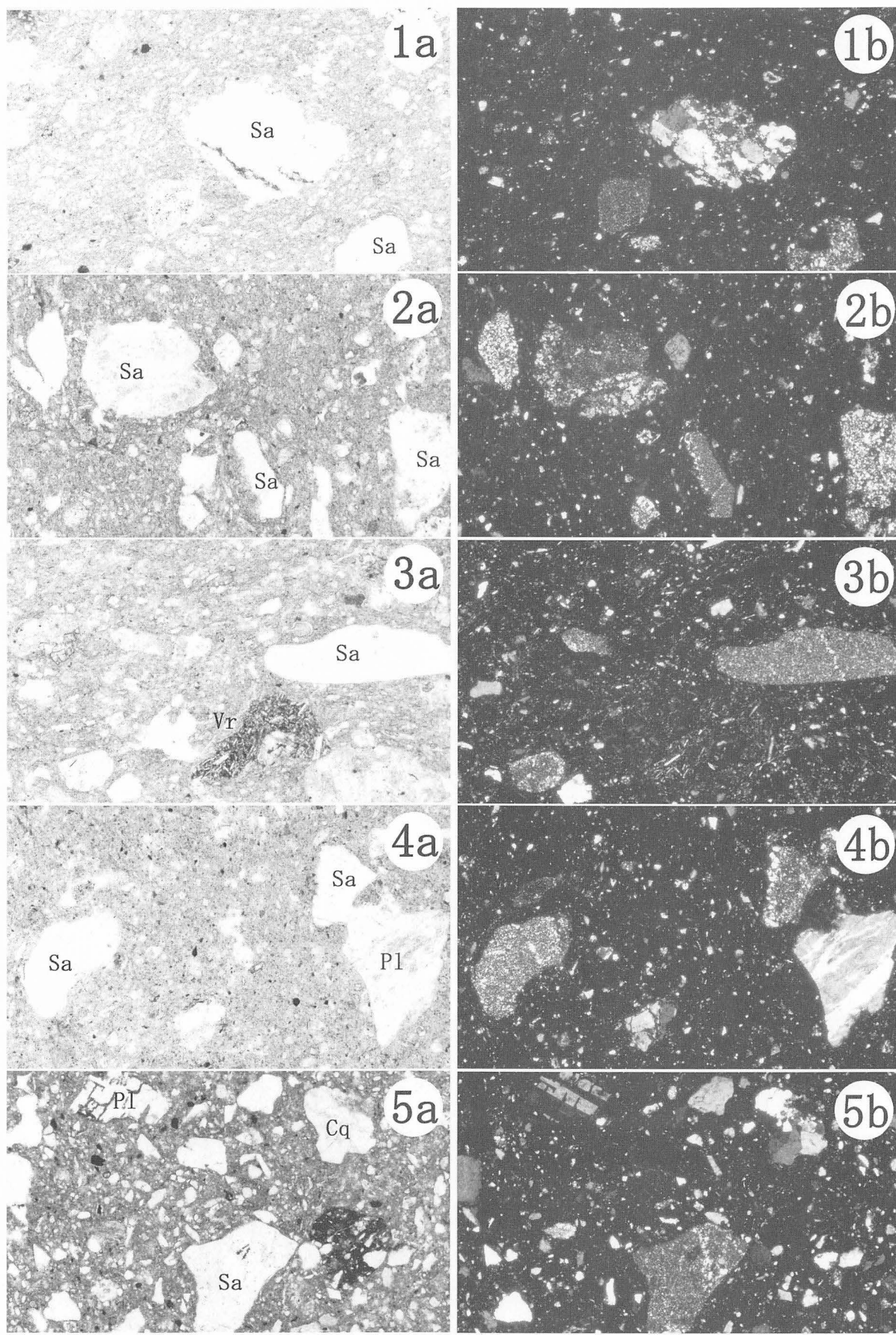
藤根 久・長友純子（2006）生出塚窯跡出土埴輪の材料分析，「鴻巣市遺跡群12 生出塚遺跡W地点一」，鴻巣市教育委員会

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用，第四紀研究，27，1-20.

車崎正彦・松本 完・藤根 久・菱田 量・古橋美智子（1996）（39）土器胎土の材料－粘土の起源を中心に－，日本考古学協会第62回大会研究発表要旨，153-156.

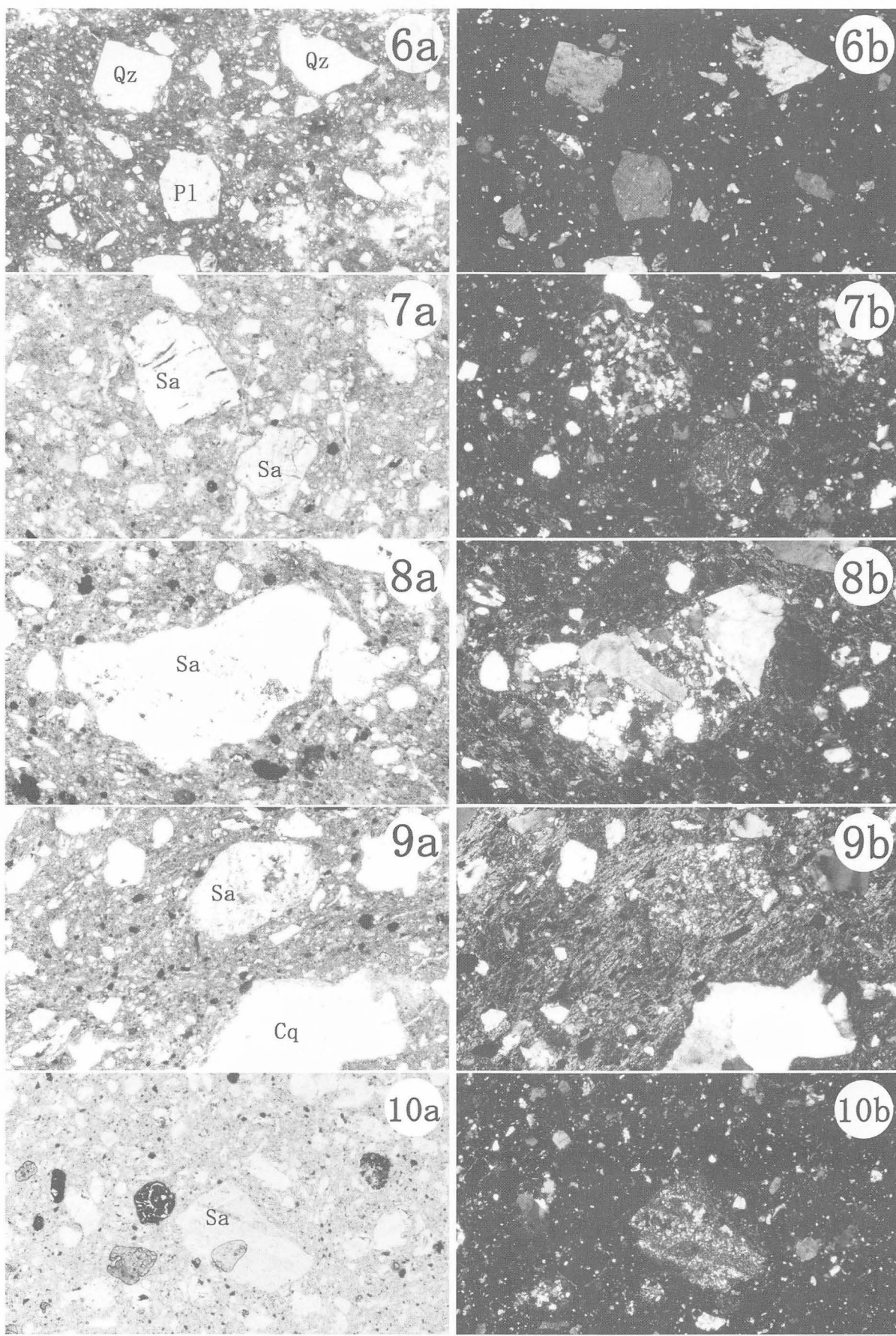


第82図 胎土分析資料実測図



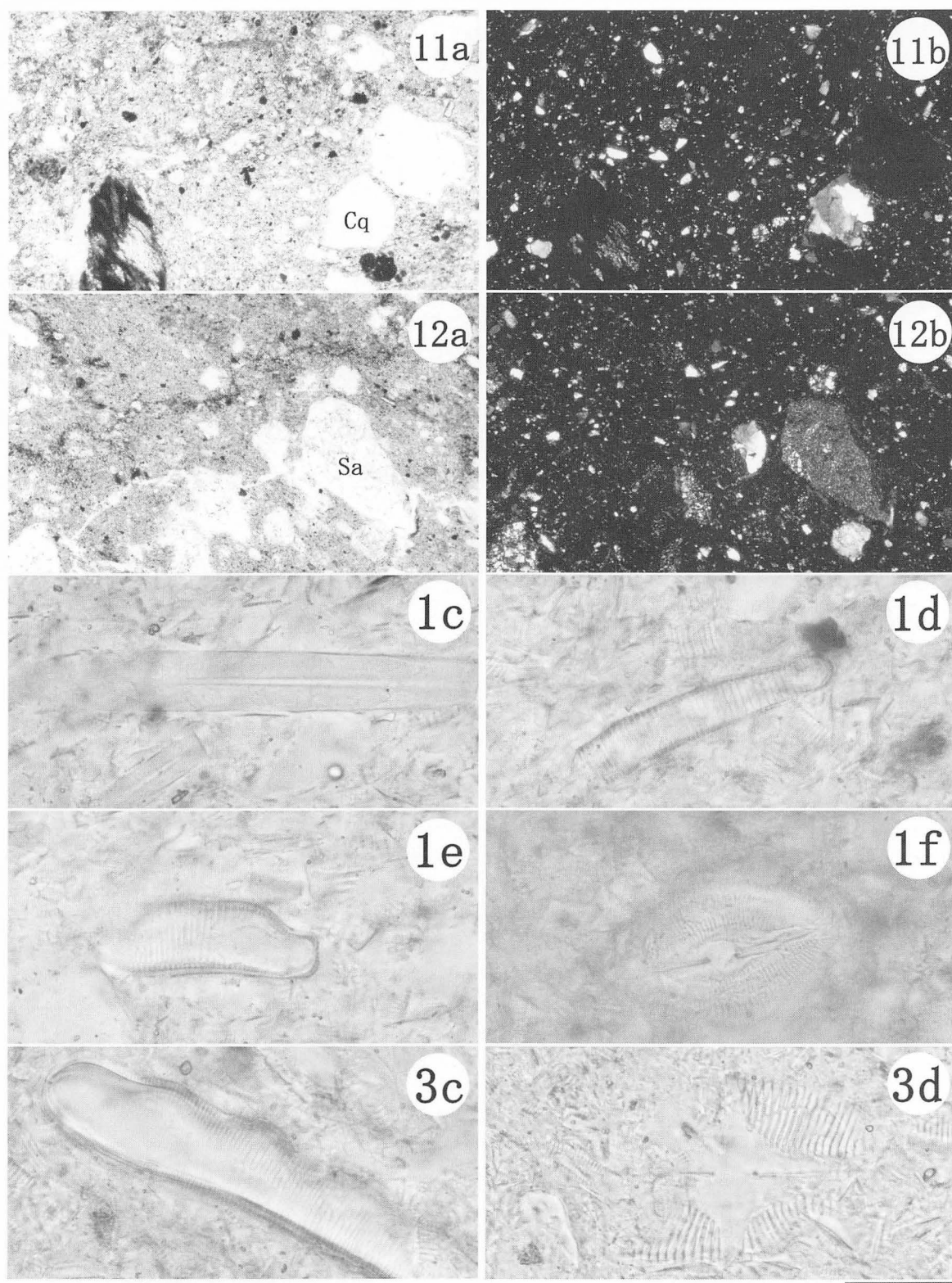
図版 1 埴輪胎土の顕微鏡写真 (スケール 0.5mm)

数字が分析No.に対応する (a: 開放ニコル、b: 直交ニコル) [粒子記号] Pl: 長石、Vr: 火山岩、Qz: 石英、Sa: 砂岩、Cq: 複合石英類



図版 2 埴輪胎土の顕微鏡写真 (スケール 0.5mm)

数字が分析No.に対応する (a: 開放ニコル、b: 直交ニコル) [粒子記号] Pl: 長石、Vr: 火山岩、Qz: 石英、Sa: 砂岩、Cq: 複合石英類



図版 3 埴輪胎土の顕微鏡写真 (スケール、11a ~ 12b: 0.5mm、その他 20 μ m)

数字が分析No.に対応する (a: 開放ニコル、b: 直交ニコル)

〔粒子記号〕 Pl: 長石、Vr: 火山岩、Qz: 石英、Sa: 砂岩、Cq: 複合石英類

1c. 骨針化石 1d. 珪藻化石 *Eunotia pectinalis* var. *undulata* 1e. 珪藻化石 *Eunotia preerupta* var. *bidens*

1f. 珪藻化石 *Diploneis* 属 3c. 珪藻化石 *Eunotia monodon* 3d. 珪藻化石 *Pinnularia* 属